

『世界でもっとも美しい10の科学実験』

Robert P. Crease 著、青木薫訳／日経BP社

常に客観性と厳密性を冷徹なまでに要求される「科学・技術」と、多分に情緒的な感覚である「美しさ」は、一見相容れないように思われる。しかしながら、一方では、その「美しさ」に魅入られた科学者・技術者が真理の発見や革新的な技術を生み出してきた人類の壮大な歴史があり、本書にもあるように「あれは実に美しい実験であった」とは科学・技術に携わる研究者・技術者から良く聞かれる言葉である。また、約9年間に民間企業で過ごし、技術開発テーマの栄枯盛衰をその人間模様の中で眺めてきた経験から言うならば、営利を求めることを最大の使命とする民間企業にあっても、その分野の技術開発を今後推進するのかどうかの最終判断の局面において、おそらくはその技術内容の「美しさ」に魅入られた担当者の情熱が大きな影響を与えている。

本書は、人類がこれまで行ってきた科学実験の中で、(1) 世界を測る (エラトステネスによる地球の外周の長さの測定)、(2) 球を落とす (斜塔の伝説)、(3) アルファ実験 (ガリレオと斜面)、(4) 決定実験 (ニュートンによるプリズムを使った太陽光の分解)、(5) 地球の重さを量る (キャベンディッシュの切り詰めた実験)、(6) 光という波 (ヤングの明快なアナロジー)、(7) 地球の自転を見る (フーコーの崇高な振り子)、(8) 電子を見る (ミリカンの油滴実験)、(9) わかりはじめることの美しさ (ラザフォードによる原子核の発見)、(10) 一個の電子の量子干渉 (次点につけた実験)、を取り上げている。個々の実験について、その歴史的意義を踏まえ、出来る限り平易な表現で解説がなされており、理学・工学の勉強を本格的に始めたばかりの大学学部生にも、十分にその「美しさ」の意味が理解可能である。例えば、(6) 光という波 (ヤングの明快なアナロジー) においては、光の波動説を実に簡単・明快な実験によって裏付けた「ヤングの干渉実験」が取り上げられている。光の波動説に否定的で粒子説を支持していたニュートンの光学が主流だった当時に、その絶大な権威に惑わされることなく、単純・明快な「美しい」実験によって、光の波動説の裏付けが行われていく。その過程において、まさに「客観性」「厳密性」と「美しさ」が共存していることを実感できる物語である。また、後半の(8) 電子を見る (ミリカンの油滴実験)、(9) わかりはじめることの美しさ (ラザフォードによる原子核の発見)、(10) 一個の

電子の量子干渉（次点につけた実験）、においては、物質の根源を追い求め、日常的には目にすることのない原子・電子の世界を如何に実験によって追い詰めていくのか、といった凄みを感じるまでの「美しさ」が展開されている。「美しさ」を感じないところに情熱は生まれない。研究者・技術者を志し、そのための勉強をまさに開始した学生諸君に是非読んでいただきたい一冊である。

執筆者紹介

小野 浩司

電気系教授。専門領域は、有機光エレクトロニクス、有機光学材料、波動光学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『世界でもっとも美しい10の科学実験』 ロバート・P. クリース著（青木薫） 日経BP社 2006年 2,100円

[ブックガイド目次へ](#)

『学問の進歩』

フランシス・ベーコン著、服部英次郎、多田英次訳／岩波文庫

大学の勉強は、高専や高校と違って授業内容を疑うことから始めてほしい。大先生といえども、間違えることはある。地動説しかり、アトム論しかり、製造不可能と言われた青色発光ダイオードしかり、枚挙にいとまがない。画期的研究とは常識や権威を疑うところから始まるといってよいと思う。

このことはフランシス・ベーコンによって警告が発せられている。彼については、歴史の嫌いな人にとっては記憶の彼方に飛ばしてしまっているかもしれないが、一応高校・高専の一般科目で人名ぐらい習っているはずである。一般的には16世紀から17世紀にかけてイギリスで活躍した哲学者としてのほうが有名だが、のちに大法官を務めている。当時のインテリ層は、当然哲学を学び社会的地位のあるものは国民のために働いたので、今のカテゴリーには当てはまらない。彼は、鶏の冷凍実験など哲学だけではなく知的探究心が旺盛で、科学の基本的姿勢について大きな影響を与えた人である。

この本では科学者の立場から人間が陥りやすい偏見の原因をイドラと呼び4つに類型化しているので簡単に解説しよう。

種族のイドラ…感情や感覚における錯覚であり、肉体を持った人間である以上、これに振り回されるであろう。実験機器や研究手法の発達によって解決されたとはいえ、それに価値評価し意味付けを行うのは相変わらず人間である。

洞窟のイドラ…個人的経験や生活環境や習慣、教育によって生じる誤り。狭い洞窟の中から世界を見ているかのように、見える範囲が限られている。にもかかわらず、それが全てであるかのように思ってしまう。研究室に籠ることの危険性である。

市場のイドラ…市場のように人が集まるところで広がる噂などを指し、これらの言葉が思考に及ぼす影響から生じる偏見である。洞窟のイドラと重なりとさらに厄介で、世間知らずの上にデマに翻弄されることになる。

劇場のイドラ…伝統や権威のある思想家たちの思想や学説を絶対正しいもの
だと思い込んでしまうことに起因する誤り。思想家たちの舞台の上のドラマ
に眩惑され、事実を見誤ってしまうこと。学界で華々しく取り上げられる学
説に惑わされるなどということである。

この4つのイドラを取り除いて初めて、人は真理にたどり着け、本来の姿を取り
戻すとベーコンは考えた。これはいわゆる文系にしか関係ないと思うことなか
れ。確かに、種族のイドラは人間が直接肉眼で確認する範囲から実験方法や器具
の発達によって、少しはマシになったレベルである。洞窟のイドラは、研究分野
の細分化によって、ますます酷くなっている。自分の分野では、まだ誰も手をつ
けていないことであっても、隣の研究室ではごく当たり前のことだってある。市
場のイドラは、今ではマスコミがそれに相当するであろう。マスコミだって事実
無根の報道をすることもある。それは意図的なものだけではなく、他のイドラと
複雑に絡み合って現われてくる。

そして最も怖いのが劇場のイドラである。これが科学・技術の発展を妨げるこ
とになる。これは、なにも大先生に限らない。自分がある研究で有名になったと
き、学界や産業界から「その研究の人」としてのラベルを貼られてしまう。もし
そうなったとき、途中で間違いに気づいてもそれを素直に撤回できるか？自分の
過ちを公に認めるのは勇気があることだ。もし過ちを認めなかったときは、社会
として大きなコストを払わなければならない。自分のコストを社会に付け替える
ことになる。

彼は学問について述べたが、日常の中でも彼の思考を活かす機会は多分にある。
機会があるとするのではなく、むしろ充分に注意しなければならない。

書かれてから400年経過しても人間の過ちを犯す原因はそんなに変わっていない
ものだと、ある意味感心する。たぶんこれらのイドラは科学に限られず、学問は
日常の延長にしか過ぎないのか？と。たぶん、人間が人間でいる限りイドラから
逃れられないだろう。

学生諸君は既に大学という高等教育を受けているのであるから、世間の動きを

そのまま自分の頭で判断することなく受け入れる大衆であってはならない。少なくともこの4つのイドラが我々の思考を乱すものだとの心構えがあるだけで、真のエリートに近づけるのである。

執筆者紹介

綿引 宣道

経営情報系准教授。専門領域は、経営学、経営社会学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『学問の進歩』 フランシス・ベーコン著(服部英次郎・多田英次) 岩波文庫
1974年 903円

[ブックガイド目次へ](#)

「長州ファイブ」

五十嵐匠監督

これは読書というよりも映画のすすめである。

2006年、意外な人物をヒーローにした映画が作られた。幕末に御禁制を破ってイギリスに渡って西洋文明のあれこれを学び、帰国後に明治日本のリーダーとなった5人の長州藩出身の若者達を描いた「長州ファイブ」である。

「長州五傑」とも呼ばれるこの5人とは、初代総理大臣となった伊藤博文、鉄の父と呼ばれる井上勝、外務卿として不平等条約改正交渉にあたった井上馨、造幣の父といわれる遠藤謹助、そして本エッセイの主題、山尾庸三である。三上は技術者倫理の授業の最終回で過去5年間必ず山尾のことを取り上げてきたので、三上の講義を受講した学生はどこかで聞いたことのある名前だと思ってくれたことと思う。映画の中では俳優松田龍平が演じる好青年であった。

日本の工学の父と呼ばれる山尾庸三は、天保8年（1837）、現在の山口県山口市に生まれ、20代前半を江戸に出て洋式砲術を学んだり、幕府の貿易船に乗り込んでロシア領内沿海州まで探検しながら航海術を学んだり、という冒険的な日々を送った。25歳の時には攘夷を叫んでイギリス公使館焼討ちにも加わった。しかし、翌年にはイギリス商社の手引きによって仲間と一緒に密出国を果たし、ロンドンへと渡った。ロンドンでは最初皆と一緒に英語を勉強したが、その後分かれてひとりグラスゴーに移り、そこでネイピア造船所の見習い工として働く傍ら、グラスゴー大学アンダーソンズカレッジで学んだ。このカレッジはグラスゴー大学物理学教授J・アンダーソンの遺贈により1796年に開設された一般市民を対象とする自然科学講座に由来し、後に英国全土に広がったメカニックスインスティテュート運動の発火点となったといわれる学校であった。

禁制を破ってと書いたが、これはなまやさしいことではない。彼が出国した文久3年（1863）、5年後に徳川幕府が倒れるとは誰も予想していなかった。まかり間違えば帰るべき祖国を失うかも知れない命懸けの密航だったのだ。渡英5年目にして日本では大政奉還が行われ、一足先に帰国した長州藩の仲間たちは新政府の中心人物になった。帰国した彼は民部省に職を得て明治政府が江戸幕府から継承した横須賀製鉄所を担当するとともに、工部省設立を提案し、また、明治4年には日本で最初の工学教育機関である工学寮の創設を試みる。このとき、彼のプ

ランに対して、「未だ日本において為すべき工業なし、学校を立て人を作るも何の用をか為さん」との批判があったが、彼は「人を作ればその人工業を見出すべし」と反論して自らのプランを実現させた。

ほぼ同じ頃（明治3年）、長岡では小林虎三郎が米百俵の使い道をめぐって同じような批判に曝されていたが、虎三郎もまた「国がおこるのも、ほろびるのも、町が栄えるのも、衰えるのも、ことごとく人にある。だから、人物さえ出てきたら、人物さえ養成しておいたら、どんな衰えた国でも、必ずもり返せるに相違ないのだ」と言って藩士達を説き伏せていたのであった。

山尾は日本における聾啞教育、盲教育のパイオニアでもある。当時の造船所では鋸打ちの騒音がひどく、そこで働く者達は耳をやられることが多かった。グラスゴーの造船所にもそうした聾者が多数いたが、彼らがたくみに手話を使って健常者と一緒に働いている姿は山尾に強い印象を与えた。そして、帰国後の山尾はイギリスで行われている聾教育を日本にも立ち上げたいと考え、音頭をとったのである。映画の中では聾者の美しい女性とのプラトニック・ロマンスを通じて山尾のこの方面への関心が紹介されるが、このロマンスはおそらく脚本家の創作だろう。

ちなみに聾教育パイオニアの青春時代を描いた映画であるだけに製作委員会に対しては日本語字幕への強い要望が寄せられ、DVD発売の二ヵ月後には日本語字幕付きが発売されたそう（申込み先：山口県字幕サークルEライン、ria@cable.ne.jp）。なお、山尾庸三顕彰会から『山尾庸三傳』（兼清正徳著、2003年、本学図書館にも配備）が刊行されているほか、工部大学校や聾教育の歴史に関する多数の本の中にも彼の生涯が紹介されている。また、山尾の郷里には山尾会館（電話083-984-5121）があり、生家も保存されている。関心あるものは訪ねられよ。

『山尾庸三傳』、兼清正徳著、山尾庸三顕彰会、2003年

執筆者紹介

三上 喜貴

システム安全系教授。専門領域は、産業技術政策論、国際開発論。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
「長州ファイブDVD」五十嵐匠監督・脚本「長州ファイブ」製作委員会 2006年
『山尾庸三傳 明治の工業立国の父』兼清正徳著 山尾庸三顕彰会 2003年 品
切・絶版

[ブックガイド目次へ](#)

『寺田寅彦随筆集』 全五巻

寺田寅彦著／岩波文庫

吾人（われわれ）が日常坐臥（普段の生活）の間に行っている事でも細かに観察してみると、おもしろい物理学応用の実例はいくらでもある。ただ、それらは習慣のためにほとんど常識的になっているのでそれと気がつかないだけである。（〔物理学の応用について〕随筆集第4巻の抜粋）

この文章を書いた寺田寅彦（以下寺田博士）は、今から約80年前、明治後半から大正の時代に活躍した、日本を代表する物理学者のひとりです。寺田博士は18歳のとき、熊本の第5高等学校（旧制高等学校：現在の大学の1・2年生に対する教養課程に相当）に入学し、ここで自身の人生を決める2人の先生に出会っています。一人は、数学と物理学を教えていた田丸卓郎先生で、寺田博士はこの方から物理学の面白さを学び、物理学者への道を歩むことになります。そしてもう一人が、英語を教えていた夏目金之助先生（後の夏目漱石）です。

初めて尋ねた先生の家は白川の河畔で、藤崎神社の近くの閑静な町であった。「点をもらいに」来る生徒には断然玄関払いを食わせる先生もあったが、夏目先生は平気で快く会ってくれた。そうして委細の泣き言の陳述を黙って聞いてくれたが、もちろん点をくれるともくれないとも言われるはずはなかった。とにかくこの重大な委員の使命を果たしたあとでの雑談の末に、自分は「俳句とはいったいどんなものですか」という世にも愚劣なる質問を持ち出した。（〔夏目漱石先生の追憶〕随筆集第3巻の抜粋）

寺田博士は、落第しそうな友人の「点をもらう」ための運動委員（当時こんな委員があったのですね）として漱石を訪ね、そこで俳句の手ほどきを受けることで、文学の世界にも興味と視野を広げられたようです。寺田博士は、いわゆる理系でありながら文学など文系の事象に造詣が深く、科学と文学を調和させた随筆を数多く残されました。

私が初めて寺田博士に興味を抱いたのは、高専に在学していた頃、好きだった

漱石の小説『三四郎』を読み返したことがきっかけでした。なぜ漱石が好きだったかという、私の祖母がホトトギス（正岡子規が創刊した俳句雑誌：漱石の「吾輩は猫である」も連載されました）の関係者で耳学問もあり、少年時代、子規と漱石の交友に一種の憧れを抱いていました。その時に読んだ『三四郎』のあとがきから、登場する大学の若い科学者（作中：野々宮宗八）のモデルが寺田博士であることを知りました。小説の科学者、野々宮は、研究室（穴倉）で黙々と、大学が休暇の日でも光線の圧力実験をしている人物として書かれています。野々宮曰く、「僕は穴倉生活をやっていれば済むのです。近頃の学問は非常な勢いで動いているので、少しゆだんするとすぐ取り残されてしまう。人がみると穴倉の中で冗談をしているようだが、これでもやっている当人の頭の中は激烈に働いているんですよ。」と自身を語っています。私は初めて『三四郎』を読んだとき、なるほど科学者というのはこういうものか、と妙に感心したことを覚えています。この野々宮の言葉だけをみると、この科学者は現実世界とは隔絶された人物のような気がします。しかし小説を読み進めていくとそうではなく、また作者である漱石の、野々宮に対する目が優しいことに気づきます。私は、いったい野々宮のモデルである寺田寅彦という人は、漱石とどういう間柄なのだろうと興味を持ちました。

その後、本屋で偶然、文庫版の寺田寅彦随筆集（岩波文庫）が目に入りました。恥ずかしながら、私はその時初めて、寺田博士が随筆を書かれていたことを知ったのです。手にとってみると、文庫の表紙に写實的に描かれた鳳仙花の絵（第1巻）も美しく、立ち読みもせずに直ぐにレジに持って行きました。後で知ったのですが、この表紙の絵は、寺田博士と同時代を生き、医学者であり詩人でもあった木下杢太郎の植物写生「百花譜」からのものでした。これも後で中身を読んでから思ったのですが、寺田博士の随筆に、これ以上ない素晴らしい組み合わせだったと思います。表紙の絵は、図鑑の絵のような客観性を持ちながらも死んだ標本ではなく、生きている植物の生命そのものを感じ取ろうとする木下杢太郎の精神性を漂わせていました。そして中身である随筆にも、淡々とした科学的な文体の中に、対象である、花や昆虫、学問や社会、そして家族や友人に対する、寺田

博士の温かみが感じられるのです。随筆の中には、漱石がでできます、子規がでできます。寺田博士は、漱石らとの師弟関係、交友のなかで、このような温かみを育まれたのかとも思います。

もし書店で、寺田寅彦随筆集を見つけたのなら、まず本の表紙を見てそのイメージのまま、目次を見て頂ければよいと思います。その目次だけからも、文学随筆だけでもない、科学随筆だけでもない、不思議な世界が広がっていることを感じられるでしょう。その世界の入り口が気に入ったのであれば、文庫本で700円程度ですので、ぜひお手元に置かれることをお勧めします。一息に読まれる必要はないと思います。随筆ですからそれぞれの文章は短く、内容は多岐にわたります。しかしこの短い随筆を集めた随筆集からは、科学と文学という表現を使った、世界とその世界を生きる人間に対する親しみと愛しさといった、寺田博士の人格を感じることができると思います。そしてあなたがそのことに共感できたのなら、それが、現代の科学者・技術者として活躍されんとする、あなたが目指す、ひとつの憧れなのかもしれません。

執筆者紹介

永森 正仁

経営情報系助教。専門領域は、情報システム工学、教育工学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『寺田寅彦随筆集 改版』 1-5巻 寺田寅彦著 岩波文庫 1963-1964年
693円(各巻)

[ブックガイド目次へ](#)

『銃・病原菌・鉄』

ジャレド・ダイヤモンド著、倉骨彰訳／草思社

ニューギニア人のヤリという人物が発した「白人はたくさんのもを発達させてニューギニアに持ち込んだが、ニューギニア人には自分たちのものといえるものがほとんどない。それはなぜだろうか？」という素朴な質問からプロローグが始まる。人類社会の歴史は世界の異なる場所で異なる発展を遂げたが、ユーラシア大陸系の民族や北アメリカ大陸への移民の子孫が世界の富と権力の大半を支配するという現代社会の不均衡はどうして生じたかについて、過去一万三千年の人類史の中で解説しようというのである。本書の帯は「なぜ人間は五つの大陸で異なる発展をとげたのか？」「なぜアメリカ先住民のほうが逆に旧大陸を征服できなかったのか？各大陸の住民の運命を決めたものとは？」という挑戦的なものである。こうしたテーマにも拘わらず、著者は歴史学者でも地理学者でもなく、カリフォルニア大医学部教授で著名な進化生物学者である。そして、このことが歴史を対象としながら、多様な科学分野の成果を用いる手法に繋がっているのだ。

なぜ、民族、地域毎の差異が生じたのか。その根本要因は「家畜にできる動物（大型草食哺乳類の家畜－由緒ある14種）と栽培できる植物の入手（肥沃な三日月地帯の八種の起源作物）とその伝播」にあるとする。つまり、これらが手に入った地方では、農業によって食料の大幅増産ができ、それにより労働力に余裕が生じて技術開発を進められるようになった。さらに、家畜と人が共生し、人口が増加することによって、家畜由来の疾病が人間に蔓延するようになるが、疫病の流行を繰り返しながら徐々に免疫を身につけたと説明する。そして、ユーラシア大陸が東西に広がり、アフリカ大陸、南北アメリカ大陸が南北に広がるという地理的相違が、食糧生産（農作物や家畜）や種々の製造技術そして各種疫病の免疫の伝播速度に差を生じさせたのだ、と非常に魅力的に論じている。

その結果、鉄器で武装し、文字を使い、致死性の疫病を保菌しつつ免疫を持つ社会（ユーラシア大陸・西欧人の社会）が出現し、新大陸のような異なった社会と出会う時に、「征服」という現象が生じたと示す。本書のタイトルは、西欧人による征服の直接の要因を凝縮して表現したものである、と著者は記す。

この本がおもしろかったならば次に読むと良い本－西欧が世界を支配する前が判る：

『ヨーロッパ覇権以前（上・下）』 ジャネット・L.アプー＝ルゴド著、佐藤次高・他訳 岩波書店 2001年

執筆者紹介

中出 文平

環境・建設系教授。専門領域は、都市計画（土地利用計画・地区計画）。

『書名』 著者名（翻訳者名） 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『銃・病原菌・鉄』 上・下巻 ジャレド・ダイヤモンド著（倉骨彰） 草思社
2000年 3,990円

『ヨーロッパ覇権以前』 上・下巻 ジャネット・L.アプー＝ルゴド著（佐藤次高・他） 岩波書店 2001年 5,880円

[ブックガイド目次へ](#)

『大聖堂』

ケン・フォレット著、矢野浩三郎訳／新潮社

この本は1991年末に新潮文庫から全3冊で出版された大作である。出版直後に購入したが読むのを数ヶ月控えた。というのは、翌年春からロンドンで1年弱、生活することになっており、この本の舞台の地で読みたいと思ったからである。1週間以上は掛かると思っていたが、わずか3日で一気に読了し、帰国後、周囲の本好きに誰彼と無く推薦した思い出がある。著者は『針の眼』などのスパイ小説、戦争小説で有名なイギリスの作家であるが、この作品は一転し大河歴史小説である。

舞台は12世紀のイングランド。プロローグの前に、世界史上では有名なヘンリー1世の跡継ぎ争いを引き起こした1120年のホワイト・シップの遭難の挿話がある。プロローグは1123年のある死刑場面で始まり、1174年にヘンリー2世が大司教トマス・ベケット殺害への関与を懺悔するまでの50年以上にも亘る。話の中心は、親子二代の建築職人が大聖堂建設を様々な妨害にあいながらも苦難の末に成し遂げるというものであるが、大聖堂再建を夢見る二代の建築職人に加えて、権力争いに翻弄されながらも神を信じ修道院の興隆に邁進する修道院長、伯爵領再興を目指す自立した美しい女性、などが絡み合う大河ロマンである。綿密な時代考証と大聖堂に関する重厚な取材を基に、史実を枠組にフィクションを巧みに織り込み、登場人物を縦横に躍動させる。冒頭の挿話とプロローグの謎が判明するのは最後の数十頁になってからである。

この本を推薦するのは、大河小説として極めて優れているだけでなく、建築様式がロマネスクからゴシックに変わる時代を扱っていて、ゴシック様式とその時代背景を知るのに最も優れた本の一つであるためだ。ネット上でも小説としての評価が非常に高い上に、建築に興味のある人への紹介としても取り上げられている。尖頭アーチ、フライング・バットレス、リブヴォールトといった様式、パリのノートルダム、シャルトル、ケルン、カンタベリー、ミラノなどの大聖堂に興味がある人は、ぜひ読んでほしい。もちろん、いわゆる大河小説が好きな人も。

後で知ったことだが、欧米では「101Books to Read Before You Die」の27位、BBCの「The Big Read-Top 100」の33位にも選ばれている。残念ながら新潮文庫は品切れであるが、ソフトバンク文庫から2005年に出版されている。

副読本として読むならば：

『図説大聖堂物語』 佐藤達生・木俣元一著 河出書房新社 2000年

日本の建築に関わる小説を読みたいならば：

『五重塔』 幸田露伴著 岩波文庫（ネット上の青空文庫にも）1994年

執筆者紹介

中出 文平

環境・建設系教授。専門領域は、都市計画（土地利用計画・地区計画）。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『大聖堂』上・中・下巻 ケン・フォレット著（矢野浩三郎） ソフトバンク文庫 2005年 2,865円

『図説大聖堂物語』 佐藤達生、木俣元一著 河出書房新社 2000年 1,890円

『五重塔』 幸田露伴著 岩波文庫 1994年 420円

[ブックガイド目次へ](#)

『フェルマーの最終定理』

サイモン・シン著、青木薫訳／新潮文庫

私は工学部の教員でありながら、研究上、数学をほとんど使用しない。大学受験までは数学が得意だと勘違いしていたが、教養学部で数学で打ちのめされ、使わなくても良い分野を選択した。高校生の時に自然地理、建築、都市計画のいずれかを志したいという淡い思いがありながら決断できず、学部2年生で専門分野を決めるというモラトリアムを歓迎した上での大学進学であったのだが、最終的に、都市計画を選ぶ積極的理由はあったものの、消極的には数学をあまり使わなくて良いということもあった。しかしながら、数学に関わる話題に興味が無いわけではなく、学生時代に『国家の品格』で有名な藤原正彦が昭和50年代前半に書いた『若き数学者のアメリカ』や講談社ブルーバックス『四色問題 その誕生から解決』（一松信著）などを読んでみただけ。

そんな私が、東京の書店で平積みされていた若干分厚い文庫本が気に入り、当分、積読（つんどく）でも良いつもりで購入しながら、帰りの新幹線で読み出し止められなくなったのがこの本である。文庫版には2000年に単行本での出版と書かれていたが、天佑を得て5年遅れではあるものの良書を手にした喜びに浸った。

17世紀フランスの数学者ピエール・ド・フェルマーが「 n が3以上のとき、ある n 乗数を二つの n 乗数の和で表すことは不可能である。」とある本の余白に書き、さらに「この定理に関して、私は真に驚くべき証明を見つけたが、この余白はそれを書くには狭すぎる」と書き添えた。この書き込みの予想は、誰も証明することも反例をあげることもできず、「フェルマーの最終定理」と呼ばれるようになり、プロ・アマチュアを問わず無数の数学者がその証明に挑んだのだが、イギリスの数学者アンドリュー・ワイルズが1994年に最終的な証明を完成させる。そこまでのドラマチックな話を、彼が証明する過程だけでなく、3世紀に及ぶ数学者達の苦闘も含めて描いたノンフィクションである。「ここで終わりにしたいと思います」とは1993年6月の証明に関する講演の最後の一言であるが、その後、証明の欠陥が浮かび上がり、一年余りかけてその修正を施しているのである。BBC放送のドキュメンタリーを下地に、サイエンス・ライターである著者が書いたものであり、著者も訳者も理学博士でありながら、一般人にもそれなりに判るように書かれている。また、読み進むうちに、この証明の骨格にも関わる「谷村＝志村予想」「岩

澤理論」を始めとして何人もの日本人が大きな役割を果たしたことも知らされ、ワクワク感がより増幅する。昨年、ノーベル物理学賞と化学賞を日本人が受賞し、日本の科学力が脚光を浴びたが、その底力にも通じる。

数学者のことをもう少し知りたいならば：

『放浪の天才数学者エルデシュ』 ポール・ホフマン著、平石律子訳 草思社
2000年

数学に関わる小説を読みたいならば：

『博士の愛した数式』 小川洋子著 新潮社 2003年

執筆者紹介

中出 文平

環境・建設系教授。専門領域は、都市計画（土地利用計画・地区計画）。

『書名』 著者名（翻訳者名） 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『フェルマーの最終定理』 サイモン・シン著（青木薫） 新潮文庫 2006年 820円
『放浪の天才数学者エルデシュ』 ポール・ホフマン著（平石律子） 草思社
2000年 1,890円
『博士の愛した数式』 小川洋子著 新潮文庫 2005年 460円

[ブックガイド目次へ](#)

『精神と物質—分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか』

立花隆、利根川進著／文春文庫

生きていれば悩みはつきもの。学生のみなさんも、勉強、研究や進路で悩むことがあるでしょう。いつうまくいくとも分からない実験に嫌気がさし、やる気をなくすことも多々あるでしょう。かくいう私もそうでした。いや、今でもそうですが…。そういったときにお勧めするのが、“研究者の人生や半生がつづられた本を読む”ことです。私は読んだあとに、“やる気”と“根拠のない自信”がみなぎってきます。悩みが解決するヒントもあったりします。そのような本のひとつとして、今回紹介するのが『精神と物質』です。この本は1987年のノーベル生理学・医学賞を受賞した利根川進さんとジャーナリストの立花隆さんとの対談をまとめた本です。本書の題から、脳か哲学についての本かなと思われるかもしれませんが、彼のノーベル賞受賞にいたるまでの研究生活（ウイルスや免疫についての研究）や彼のサイエンスや研究者についての思いが熱く語られている本です。

利根川さんは“免疫”という動物がもつ生体防御システムで重要な働きをしている“抗体”というタンパク質ができる仕組みを明らかにしたことでノーベル賞を受賞しました。よって、本書には生物学（特に分子生物学）の専門用語がたくさん出てきますが、分かりやすく説明されているので、知識があまりない学生さんでも内容を理解することができると思います。それよりも、彼の研究に対する考え方が非常にためになるので、ぜひとも読んでほしい本です。これから生物について研究をしようと考えている学生さんには、役立つ内容が盛りだくさんあるので必ず読んで下さい。簡単に利根川さんの研究半生をみてみましょう。一浪して京都大学理学部化学科に入学。本当は工学部の化学系学科に行きたかったのですが、人気が高く落ちる恐れがあったため理学部を受けたそうです。このとき、生物が細胞からできていることを知らなかったらしい。大学卒業後、アメリカの大学院と研究所をへて、ノーベル賞受賞研究の舞台となるスイスのパーゼル免疫学研究所へと移ります。日本を出てから8年目31歳の時です。本書には研究を行ううえで役にたつ彼の言葉がたくさんあります。「何をやるかより、何をやらないかが大切だ」「何で実験が失敗したのだろうと、考えて考え抜く。観察と考察にける集中力これが大事」「実験なんてたいがいうまくいきません。失敗の連続。だから楽天性じゃないとだめ。楽天性と精神的強靱さが必要」。学生さんに心に留めておい

て欲しい言葉です。

現在、彼はマサチューセッツ工科大学で脳について研究しています。人間の精神現象を物質レベルで解明することに取り組んでいるそうです。最後に、励みになる彼の言葉を－「自分はわりとものをしらない人間なんです。記憶力も悪いし、そんなに頭のいい人間じゃない」「記憶力があまりよくないから、頭のどこかにポカッと穴が開いている。だからときどき変なことを考える。それがサイエンティストには重要」。どうです、少しは“やる気”と“根拠のない自信”が出てきませんか？

執筆者紹介

高橋 祥司

環境・建設系准教授。専門領域は、分子生物学、応用生物化学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『精神と物質 分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか』 立花隆、利根川進著
文春文庫 1993年 540円

[ブックガイド目次へ](#)

『アムステルダム物語～杭の上の街～』

ヘルマン・ヤンセ著、堀川幹夫訳／鹿島出版会

私は昨年1年弱の間、オランダに滞在していたので、オランダに対する愛着が深い。オランダの家屋や教会はレンガでできているので、街全体が赤茶色をしていて可愛らしい。これは隣国のベルギーやドイツのように自国内で石材が取れないためであるが、それがかえて独特な景観を創出している。郊外に出れば、延々と牧場が広がり、牛や羊が悠々としている。オランダはどこに行っても美しい。天才を育むには美しい環境が欠かせないと言われるが、オランダならばその条件を十二分に満たすであろう。実際、ファンデルワールス力を発見したファンデルワールス、ローレンツ力のヘンドリック・ローレンツなど、稀代の天才には事欠かない。

「神は世界を創ったが、オランダはオランダ人が創った。」と言われるとおり、オランダは実に国土の1/3以上が海拔下にあり、干拓によって国土を切り開いた歴史を持っている。干拓とは堤防や土手で区切られた土地から余分な水を排水することで土地を造成する方法である。かつては風車を原動力として排水が行われていたが、現在では電気や石油で動くポンプが使用されている。これら海拔下の土地には絶えず水が流入するので、人間の管理が滞れば即座に水没してしまう。わが国では人間が何もしなくても土地は存続することを考えると、大違いである。そのような環境では、「家を継ぐ」とか「土地を守る」とかいった日本的な気質は生まれない。その代わりに不斷の努力を惜しまない強靱の意志や、開拓精神が養われるようである。

オランダは九州と同じくらいの広さしかないが、ポルダーや高潮のための堤防の総延長は7000kmにも及ぶ。最近では地球温暖化による海面上昇に対して、堤防の高さを嵩上げするか否かという議論が真剣に行われている。もし国内すべての堤防を2m高くすると70兆円という費用が必要になると試算されている。先進国とはいっても、人口1000万人の国に対して、この金額は天文学的な数字である。このような事情があるので、オランダ国内では土木建設技術者、特に堤防や治水を司る地盤工学・水工学の技術者・研究者は非常に尊敬されている。当然である。彼らがいなくなれば、速やかに国土の1/3が消滅するのだから。オランダに限らずとも、文明社会に住まう限り、土木建設技術者の存在は必須である。彼らが担

うインフラストラクチャーの整備と維持管理は、文明生活の大前提であるからである。

杭を使う技術もオランダの専売特許といってよいだろう。オランダの国土の大半は厚い泥炭層に覆われている。この地層は非常に軟らかく、圧密沈下しやすいので、地盤改良などしないで家を建てると100%家が傾く。これを避けるため、1000年以上前から地中に木の杭を打ち、その上に建物を建てるというやり方が行われてきた。10世紀頃は、杭の長さが一律2mと短かったので、重量の大きな教会などを建てるとしばしば傾いたりした。その一例はデルフト市の旧教会であり、これは今日でも傾いたままの姿を見ることができる。アムステルダムの場合、泥炭層の厚さは10mにも及ぶので街中の建物の下にはそれ相応の杭が打たれている。これが本書の副題「杭の上の街」の所以である。

本書『アムステルダム物語～杭の上の街～』では、アムステルダムという街が形成された歴史的経緯や街の中に建てられた家々の建造技術が細部に至るまで叙述されている。著者自身により描かれた挿絵がふんだんに盛り込まれているので、視覚的に理解しやすい。絵の脇には住所が掲載されているので、本書を持ちながらアムステルダム観光をすると良質なガイドブックとしても重宝する。

というわけで、アムステルダムを訪れることがあれば、飾り窓やコーヒーショップといった歓楽施設だけでなく、家々のちょっとしたディテールを楽しむこともお勧めしたい。

執筆者紹介

田中 泰司

環境・建設系助教。専門領域は、コンクリート工学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『アムステルダム物語 杭の上の街』 ヘルマン・ヤンセ文+イラスト (堀川幹夫)
鹿島出版会 2002年 2,310円

ブックガイド目次へ

『製陶王国をきずいた父と子 大倉孫兵衛と大倉和親』

砂川幸雄著／晶文社

日本のセラミックスに関する産業や研究レベルはおそらく世界屈指と言えるでしょう。TOTOやINAX、日本特殊陶業、日本ガイシ、ノリタケといえ、一般の方でも知っている大手企業であり、世界のトップ企業といえるでしょう。実は、ある親子がこれらの企業を創立したり、それらを育てたりしているという真実をご存知でしょうか？私もはずかしながらその事実を、ごく最近、ある本を通して知りました。晶文社から出版されている『製陶王国をきずいた父と子 大倉孫兵衛と大倉和親』を紹介させて頂きたいと思います。

本学の卒業生・修了生は、優秀な技術者であると同時に指導的な立場、すなわち、経営に携わることが期待されています。しかしながら、経営について何か学べる環境にあるかという点に十分には整っていないといえませんが、また、経営者は技術にあまり詳しくなくても、経済や市場の動向、人の使い方や経理などに長けていればよいと思う学生諸君も多いのではないのでしょうか？事実、製造業においても経営者の多くは、いわゆる文系出身者です。こういう考えを持っている学生諸君には是非読んでほしい本です。

大倉孫兵衛は、いわゆる商人です。最初はアメリカとの貿易会社に勤め、陶磁器の輸出という形で窯業と関わりを持ちました。当時、日本にはアメリカ人が好む純白の硬質磁器を作る技術はなく、日常に使うコーヒーカップといった磁器製品の輸出はできませんでした。彼は、長い時間をかけ、国内の職人と技術開発を行い、大学の協力や海外の先端工場の見学などを通して、世界トップクラスの製品を作れるようになるまでにしていきました。息子の和親も孫兵衛と同じくこの道に入り、日本陶器という会社を設立する際に社長に就任し、この日本陶器が後にノリタケとなりました。また、この会社で碍子の製造を始めるとやがて分社化して日本ガイシになりました。さらにこの日本ガイシから自動車用の点火プラグなどを作る部門が日本特殊陶業として分社化しました。

一方、大倉親子はサニタリーウェアの研究開発をはじめ、やがて、東洋陶器を創立します。これは今のTOTOです。また、土管を作っていた愛知県常滑の窯元への出資も行い、これがINAXへ成長していきました。このとき、大倉和親は経営面と経済面の両方からサポートをしていました。

大倉親子の企業経営で驚かされることは、技術開発を重要視したこと、大学をうまく利用していること、先を読む能力に長けていることの3点に集約されます。そして、適当なところで安易な妥協をしない姿勢がそれらを支えています。こういった精神は現在の経営者にも必要ではないかと思います。特に、商人であるにも関わらず、技術を追求する大倉親子の姿勢・情熱には見習うべきところがあります。技術者を目指す学生にも企業経営における技術の重要性を再認識できる一冊だと思います。そして本学の卒業生・修了生から未来の大倉親子のような偉大な経営者が現れることを期待しています。

執筆者紹介

南口 誠

機械系准教授。専門領域は、材料工学、高温物理化学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『製陶王国をきずいた父と子』 砂川幸雄著 晶文社 2000年 品切・絶版

[ブックガイド目次へ](#)

『生物と無生物のあいだ』

福岡伸一著／講談社現代新書

ある日、微生物を扱っている環境工学の先生がめずらしく興奮して、読んだ本の話をしました。正直なところ、ご自身の専門分野の本だからだろうと軽く受け取っていました。たまたま、書店で見たら、“30万部突破、絶賛の嵐！！”という多少オーバーな飾り文句が目に入りました。試しに手にとってプロローグを2～3ページ読んだところ、スーっと引き込まれてしまいました。

カバーには“読み始めたら止まらない極上の科学ミステリー 生命とは何か？”と記されていて、書棚から誘いかけるPRがなかなかです。読後の感想は、まさに推理小説を読んだような気分で、PRもさることながら、著者の文章能力、構成のうまさは超一流だと感じました。この本を教えてくれた先生の興奮が分かるとともに、ふと、このような講義ができれば居眠りする学生はいないだろうな、と自分の授業を反省したりもしました。

ブックガイドとしては、「騙されたと思って読んでみたら」の一言で終えてもよいと思いますが、近年では最も知的好奇心を揺すられた本ですので、私の感激がどこからきたかを振り返ってみようと思います。

私を引き付けたプロローグに、この本の命題が示されています。著者が学生の時に、生物学の授業で生物と無生物の違いに興味を持ち、その答を求めて研究者になったこと、そして、エピローグで、生物あるいは生命とは単に自己複製を行うシステムではなく『動的平衡状態にある流れ』であると結論しています。母親が子供を出産するとか、卵が孵化して生体になるという生物の自己複製はよく理解できますが、『動的平衡状態にある流れ』というのは、生物の研究者以外は何のことか分からないと思います。でも、この本を読んだ後では何となく分かった気がしました。その謎解きに280ページ余を使い、20数年をかけたと言っています。

ミステリーの第1章は、20世紀初頭のロックフェラー大学に留学した野口英世から始まります。意外なことに、大多数の日本人にとっては偉人として記憶されている野口英世が、米国では（生物学の世界では）ほとんど顧みられていないとのこと。その理由は、彼が発見したとされる病原体が実はウィルスであって、彼の研究方法はウィルス発見に至る方向にはなかった。現象の一面を明らかにした

ものの真理に迫ったものではなく、その成果は今日の生物学の発展には全く寄与していない、と。

ストーリーは、ウィルスの発見に展開して行きます。ここでのキーポイントは、極微小の病原菌として仮定されたウィルスを直接確認する電子顕微鏡の開発でした。残念なことに、それが使えるようになったのは、野口英世が黄熱病で倒れた1928年より数年後のことでした。科学の飛躍は、仮説を実証する計測技術の開発に大きく依存していて、個人の能力もさることながら、周辺環境による運不運はどうしようありません。

今年もインフルエンザの大流行で学校閉鎖が広がりました。インフルエンザはウィルスによるものです。その繁殖力（自己複製能力）は絶大です。では、ウィルスは生物でしょうか。自己複製が生物の定義とするとウィルスも生物ですが、電子顕微鏡で見たウィルスはどう見ても物質で、栄養摂取や排泄といった代謝行為がみられない。ここで、筆者は従来の生物の定義に疑義を呈します。

話は変わって、自己複製がDNAによるものであるという研究の歴史に移り、あの燦然と輝く“二重らせん構造”の解明に至ります。1953年に『ネイチャー』で発表されたジェームズ・ワトソン、フランシス・クリックのわずか1ページ余りの論文が世界を大きく変えました。DNAが二重らせん構造を有するが故に自己複製能力を発揮するという発見は、二十世紀最大の発見で、その後の生物学が大展開する礎になっています。両先生は勿論天才ですが、発見に至る前提には、数多くの研究者の業績があり、その経緯や人間模様が興味深く示されているのもこの本の面白さです。

さて、と筆者は再び生物の定義に戻ります。きっかけは、量子力学の先駆者エルヴィン・シュレディンガーが1944年に行った講義録『生命とは何か』です。講義録では、原子はランダムな熱運動をしているのに、原子からなる生命体はなぜ秩序を保っているのかと疑問を呈し、ランダムな運動をする原子の数が多くなればなるほど、統計学的な法則に従い、ある種の秩序も増してくると結んでいます。

生命は固定した構造体ではないことに気づいた研究者は、生物学の分野にもいました。1930年代後半に、ねずみを使った実験で、摂取した食物と体内のたんぱ

く質の生成との関係を明らかにしたルドルフ・シェーンハイマーがその人です。実験結果は、彼自身の予測も含めて、当時の生物学での常識をことごとく否定しました。結果として言えたことは、3日間で、成熟ねずみのたんぱく質は食物由来のアミノ酸によって置き換えられているということでした。人間ならば、もう少し時間がかかるかもしれませんが、現在の細胞は、少なくとも1年前とは全く違うということのようです。日々摂取している食事がいかに大切かを暗示しています。

ここから、生命の本質は動的平衡状態の流れであるという内容がさらに展開されていきます。ところで、残念なことに、私に割り当てられた紙面がつかたようです。推理小説は、解説を先に読んではいけないという原則があります。また、無駄な解説を書いてはいけないとも言えます。おいしい部分は原著で味わってください。

執筆者紹介

丸山 久一

本学理事・副学長（研究・入試・学生担当）。専門領域は、コンクリート工学。

『書名』 著者名（翻訳者名） 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『生物と無生物のあいだ』 福岡伸一著 講談社現代新書 2007年 777円

ブックガイド目次へ

『数学の花束』

中村滋著／岩波書店

前回『ブックガイド』（2007年4月発行）で『数学とは何か』（R.ケーラント・H.ロビンス共著、森口繁一訳、岩波書店）を紹介し、数学書としてこれを超える名著には出会っていないと書いた。ところが最近ある意味でこれを超える名著に出会ったので今回はこれを紹介したい。それは『数学の花束』（中村滋著、岩波書店）である。数学のいろいろな分野から10の話題を選び、その発端、展開、解決（未解決）までの物語が生き生きと描かれている。この種の数学の啓蒙書は数多く出ていてその多くはたいして面白くもないので、あまり期待もしないで手に取ったのであるが、読んでみたら類書の中では秀逸である。様々な読者を想定して、原資料の写真やコピーが載っていたり、いくつかの定理の簡単な証明が載っていたり、13人の大数学者の小伝が載っていたりと、サービス精神旺盛である。それにもかかわらず最前線に至るまでの道筋を真正面から解説している。さらに、巻末のあとがきに短い解説付きの関連図書のリストがあり、これが数学に興味を持った読者のための良質な「ブックガイド」になっている。

はしがきに「この本は一般の人に数学の美しさと勁さとロマンを伝えるために書かれました。特別な予備知識は要りません」とあるが、数学書の常として予備知識があればあるほど面白いと思う。しかしながら、難しい話がちんぷんかんぷんであったとしても、41ページに紹介されている素数が無限個あることの新証明を知るだけで、この本を手にする価値は十分にある。

「素数に限りはない」はすでに古代ギリシャ時代（二千数百年前）に知られていた定理で、その証明はユークリッドの『原論』に載っている（本書p.39参照）。これは背理法によるエレガントな証明の例として、高校までの教科書等にも紹介されているので誰もが知っていると思うが、2行で済むので以下に書いておく。

「もし素数が有限個しかないと仮定すると、それら全部の積に1を加えた数は別の素因数を持つことになり矛盾である」

最近発見されたという新証明も2行で済む。

「 N と $N+1$ は互いに素であるから $N(N+1)$ の素因数の数は N のそれより大きい。よって $N_1 = 2$ ； $N_{n+1} = N_n(N_n + 1)$ とすれば N_n は n 個以上の素因数を持つ」

驚くべきことにここには背理法が使われていない。数学的帰納法の適用例とし

でも面白い。十数年後には高校の数学の教科書にはこちらの証明が載っているであろうと予言しておく。この他にも、調和級数が発散することの簡単な証明 (p. 98)、日本の高校生が発見したというピタゴラスの定理の新証明 (p.145) 等、他書では目にすることがないものでいずれも一読の価値がある。

個人的には第2章を一番興味深く読んだ。そこには、素数の不思議の起源、素数定理証明までのドラマ、そして現代数学の最大の未解決問題「リーマン予想」の物語が簡潔にまとめられている。

これだけではもの足りないとか難しくてよく解らないと感じた人に、併せて読むと「リーマン予想」についての興味がさらに広がり様々な関連する話題を楽しめる本があるのでこれも紹介しよう。『素数の音楽』(マーカス・デュ・ソートイ著、富永星訳、新潮社)である。素数の不思議から最先端の数学研究の話が音楽という比喻を使って解説されるので、音楽好きはニヤリとして難しいところは解らなくても全体として解ったような気にさせられてしまう。様々な発展に関わった天才数学者たちの多彩な逸話をそこここに配してあるので、500ページ近い大部にもかかわらず長編ミステリー小説であるかのように一気に読んでしまう。

あえて難癖を付ければ、翻訳の日本語が正確ではあるが少々堅苦しく読みにくい。本文中にかなり複雑な数式や数値などが出てくるのに、これを縦書きの書物として出版するセンスは理解できない。訳者の富永星氏は児童文学や数学書を数多く翻訳しているかなりのベテランらしいのだが。そう言えば前回紹介した『数学する本能』もこの人による訳書であった。

チャレンジ精神のある人には英文の原著 Marcus du Sautoy, *The Music of the Primes*, Perennial, 2004 を原語で読むことを勧めたい。英語が弱くて困っている若い学生諸君のために、英語の上達法を伝授しよう。個人的な体験からの独断であるが誤解を恐れずに言うと、専門課程に必要な「英語力」を付けるための最も有効な方法は、英語の数学の本(あまり難しくないもの)を毎日少しずつ(1日15分でもよい)読み続けることである。この *The Music of the Primes* はこの目的のために最適な一冊であろう。1日15分ずつ読み続けて全巻を読み終わるころには(数ヶ月あるいは何年かかっても)、数学への興味が深まると同時に英語が自分で

も驚くほど格段に上達しているはずである。さらに、自分なりの翻訳文を創りそれをベテラン翻訳者のものと比較してもっと良い翻訳にするように添削すれば、「日本語力」をも向上させることが出来る。正に一石三鳥である。

『数学の花束』や『素数の音楽』を読み数学の深淵さに少しでも興味を持つ人が増えれば、本学の数学的環境も幾分かは改善されるのではと期待している。

執筆者紹介

小林 昇治

教育開発系教授。専門領域は、数学、複素解析とその応用。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『数学の花束』 中村滋著 岩波書店 2008年 2,415円

『素数の音楽』 マーカス・デュ・ソートイ著(富永星) 新潮社 2005年 2,520円

The music of the primes Marcus Du Sautoy 著 Perennial 2004年 1,165円

[ブックガイド目次へ](#)

『新しい量子化学』

A. ザボ、N. S. オストランド著、大野公男、阪井健男、望月祐志訳／東京大学出版会

量子化学計算をやっていると思うのは、教科書に記載されている基礎的な事項と実際に使う非経験的分子軌道法の内容のギャップである。教科書では、波動関数の説明からValence band理論、Molecular orbital理論、あとはせいぜいHuckel法の説明で終わる。一方、実際に使う非経験的分子軌道法について記述した教科書は少ない。基本的には計算法の違いはいわゆるSchrödinger方程式（多体問題）の近似解を求める方法の違いだけなのだが、やっぱり気になることが多い。しかし、実際に計算に使う理論を知るためには学術論文を読むしかなく、なかなか理解するのは大変である。自身が学生の頃、Guassianという量子化学計算ソフトでHartree-Fock法やMoller Plesst法などをよく使ったが、その理論も知らずに使うのはと思って、買ったのが今回紹介した本である。線形代数、行列、変分法と数学の準備から入って、多電子系の波動関数の記述法まで記述がされていて非経験的分子軌道をはじめて学ぶ人にも配慮した内容になっている（少し難解だが）。古い本なので、今、よく使われている密度汎関数法に関する記述はないが、Hartree Fock法、Moller Plesst法、CI法、Coupled Cluster近似などの計算法の原理、そして、量子化学計算には欠かせない基底関数についても説明がある。最近は特に理論の背景を知らなくとも計算が手軽にできるようになったし、ノウハウ本的な量子化学計算の教科書も多いが、一度は骨のある数学の基本原則から“量子化学”の骨の髄を味わってみるのもいいのではと思う。

執筆 者 紹 介

村上 能規

物質・材料系助教。平成21年4月より長岡高等専門学校准教授。専門領域は、物理化学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『新しい量子化学』上・下巻 A. ザボ、N.S. オストランド著（大野公男、阪井健男、望月祐志） 東京大学出版会 1987-1988年 8,610円

[ブックガイド目次へ](#)

『ニワトリの歯—進化論の新地平』

ステイーヴン・ジェイ・ゲールド著、渡辺政隆、三中信宏訳／ハヤカワ文庫 NF

恐竜は6,500万年前の白亜紀末に、中央アメリカ周辺に落ちた巨大隕石により大部分が絶滅したと言われていますが、近年恐竜は絶滅しなかったという説が有力になってきています。始祖鳥の化石は古くから知られ、鳥は恐竜から進化したと以前から考えられていました。近年になって、始祖鳥よりも古い小型恐竜の化石で羽毛を伴うものが次々に発見され、鳥と恐竜の距離は以前に考えられていたよりずっと近いと考えられるようになってきました。さらに大型恐竜でも保存状態のよい化石の中に、骨の内部構造や成長の様子が分かるものがあり、そこから恐竜の成長速度を推定したところ、少なくとも一部の恐竜は鳥とおなじ恒温動物だったと考えられるようになってきました。

こうした研究の積み重ねにより、今日では鳥と恐竜は区別すべきものではなく一つの分類群として扱うことが適切だとする考えが提唱されるようになっていきます。現在の分類学体系では、鳥類は恐竜の竜盤類に属する獣脚亜目内で分岐した系統として位置付けるのが定説となっており、恐竜の一部とされています。この考えに従えば恐竜は絶滅したのではなく、小型の飛翔能力を持つ一群が生き残り、それが鳥類として今日でも繁栄を続けていることになります。

ここまでの話は、化石を証拠とし、推論を重ねて間接的に導かれた仮説です。しかし、今日生きているニワトリの中にも、直接それを示す証拠があるというのが「ニワトリの歯」というエピソードです。

ヌードマウスという免疫系を持たない実験用マウスの系統があります。このマウスは異種の細胞を移植しても、免疫反応による移植組織の排除が起きません。タマゴの中で発達中のニワトリの胚から上顎になる組織を採って、このヌードマウスの胎児のちょうど顎が発達する時期に移植してやると、どうなるのでしょうか。周囲のマウス細胞から顎としての発達を促す分化シグナルを受け取ることで、マウスの上あごに移植されたニワトリの組織から歯が生えてくるのです。マウスの顎に移植された以上、歯が生えるのは当たり前だと思われるかもしれませんが、ここで生えてくるのは、ニワトリの遺伝子が発現することで分化するニワトリの歯であり、マウスの歯とは形態が異なるものが生えてくるのです。

もちろんニワトリには歯はありません。ニワトリの上顎はくちばしへと分化、

発達していくのが本来の遺伝的プログラムです。しかし、外部から歯の発達を促すシグナルさえ受ければ歯を作る遺伝子が、ニワトリのゲノムの中に今でも存在することをこの実験は示しています。この遺伝子こそ、ニワトリが形を変えた恐竜であることを示す証拠であり、ヌードマウスの口の中に生えた小さな歯は、「現在まで生き残った恐竜」の歯なのです。

進化学者であるスティーブン・ゲールドの科学エッセイ集『ニワトリの歯』には、この他にも、アンコウ鍋に使われるのはすべてメスで、オスがいないのはなぜかなど、具体的な事例をあげて生物の持つ不思議さ、面白さを教えてくれるエッセイが満載です。『パンダの親指』と併せて一気に読めば、きっと生物研究の面白さに魅了されることでしょう。

執筆者紹介

高原 美規

生物系准教授。専門領域は、植物バイオテクノロジー。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ニワトリの歯 進化論の新地平』上・下巻 スティーヴン・ジェイ・ゲールド著
(渡辺政隆、三中信宏) ハヤカワ文庫 1997年 1,428円

『パンダの親指 進化論再考』上・下巻 スティーヴン・ジェイ・ゲールド著 (櫻町翠軒)
ハヤカワ文庫 1996年 1,344円

ブックガイド目次へ

『無駄学』

西成活裕著／新潮選書

無駄とは何だろうか？工学では無駄のない最適化を教える。無駄は企業（特に製造業）にとっては天敵。ところが、工学はその天敵について全然研究してこなかった。この本はそれについて研究した成果の第1号。しかも、この原稿執筆時点のわずか2ヵ月前に出版されたばかり。一体工学は何を教えてきたのか？

著者はまず、無駄の定義から始める。これは工学の常道だろう。果たして無駄は定義できるか？著者は美事に定義し、「ムダ」と「むだ」と「無駄」の3つに分類する。諸君は定義できるだろうか？ひとつの答え（著者の答えでもある）は、最適でないものは無駄だということ。なーんだ、こんな簡単なことと思うか、それは再帰的自己定義だと思うか、詭弁だと思うか、どれだろうか？工学で最適を学んでいれば、無駄はすぐに分かるはず。それが取れない（「ムダとり」という表現を使う）のが現実。一体どうなっているのか？

トヨタの生産方式には2つの柱があり、ひとつは「自動化」であり、もうひとつは「ジャストインタイム」。この両者とも「ムダとり」のかたまりだという。「ムダとり」には長い歴史があった。現場の科学（本学でいう「技学」）の重要性の真骨頂だろう。

さらに、工学・技術の世界のみならず、広く社会一般には無駄が多い。地球温暖化での議論では必ず空調の無駄が議論される。また、さんざん外国から食糧を輸入し、それを大量に食べ残して捨てているのが我が国でもある。以前、ある学会での大御所の先生の講演で、たらふく食べて太ったお腹をへこますため、お腹に回したベルトを洗濯機の軸につなげた自動洗濯機の絵を示し、自分の手で洗うこととどちらがよいかというお話があった。話を端折るが、著者によれば、資本主義経済における利子も無駄ということになる。この結論は、著者を高名にした前著、『渋滞学』からの導出のようだ。

実は、ここでは『渋滞学』を紹介しようと考えていたところだが、本書が出たため、急遽こちらを選んだ。実際のところ、本書は数年の蓄積のようだが、『渋滞学』は10年以上の蓄積によるものであり、多くの出版賞を受賞した名著なので是非ともこちらも読んで貰いたい。渋滞は物理現象と社会現象の美事な一致。またその応用も幅広く、理学・工学が広く社会現象を解明する手段となりうることを

示している。

さて、究極の無駄はなんだろうか？無為な時間を過ごすことだろうか？その主体である我々自身の存在か？聞いていないが、CD「ムダとりの歌」（著者歌唱）というのも発売されているそうだ。これはさすがに無駄に思えるが…。

執筆者紹介

三宅 仁

経営情報系教授。学校医。専門領域は、医用福祉工学、医療情報学、大学保健管理。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『無駄学』 西成活裕著 新潮社 2008年 1,050円

『渋滞学』 西成活裕著 新潮社 2006年 1,260円

[ブックガイド目次へ](#)

『力学』 ランダウ・リフシッツ理論物理学教程第1巻

エリ・デ・ランダウ、イエ・エム・リフシッツ著、広重徹、水戸巖訳／東京図書

ノーベル物理学賞を受賞した旧ソ連の物理学者L.D.Landau（1908-1968）とその弟子E.M.Lifshitz（1915-1985）が著した全10巻からなる理論物理学教程の第1巻。世界各国で翻訳され、非常に高い評価を得ている「教科書」であるが、全体としてレベルは非常に高い。でも専門書ではなく、あくまで「教科書」。説明は非常に簡潔で明瞭に書かれていると認められてはいるけれど、「明らかである」と書かれているのが、何故「明らか」なのかを考えている内に、「長考」（将棋ではありません）に陥り、ふと気付くと1、2時間が過ぎているなんことはざら。その「長考」の心地良さが病みつきになってしまい、第一線で働く物理学者となっても「ランダウを読むのが趣味」という輩を多数輩出してしまっている罪つくりな本。でも「教科書」。

何故「教科書」かって？ だってこの「教程」を読破するのに必要なのは、ある程度の数学力のみ。物理に関する予備知識は全く要りません。ほとんど全てのことが、この「教程」に順序よく、「最短」の書き方で書かれています。つまり、物理未履修者でも大丈夫ってこと。ところが、もし、この本を学部1年の「力学」の教科書に使ったとしたら？ 多分、日本国内の全ての大学のどの学部でも、大部分の学生がパニックに陥ってしまうことはほぼ「明らか」。たまに物理学会等で、そういう噂を聞いては（そんなことは現実にはほとんどないが）心の中で十字を切る。でも、入門書なしで読めるはず（？）の「教科書」。

怖いもの見たさの物好きさんがいたら、図書館に行ってみて下さい。ずらっと並んだ「教程」の端っこに、わりと薄めの『力学』の本がすぐに見つかるはず。開いてみて、1ページ目。本学の1年の「物理学1」で使用している教科書の第1章の内容の全てがその1ページの中に書かれてある。ページをめくって2ページ目。ランダウさんたら、物理全体を「最短」に説明するために、ここに「最小作用の原理」を持ってきている。普通の学部1年生ならここでアウト。でもこれがランダウさんが選んだ道。

この間、復習と思って第2巻の『場の古典論』を読んできた。前半は、特殊相対性理論の説明とそれをもとにした電磁気学の説明。「やっぱり、書き方うまいなあ。」と読み進むうち、あちこちで光速を無限大にした場合の高校でも習うような

式が導いてある。「何で、こんな極限、いちいち取ってんだよ。当たり前だろうが！」と本を小突いてふと気づく。「あ、そうだ。この本って、物理全く習ったことのない人でも読めるようになってるんだった。実際には、相対論的に考えなくても良い場合の方が多いからきちんと説明してあるのか。ランダウさんって親切だね。」だから、やっぱり「教科書」。

じゃ、何故こんな教程を創ったのか。ランダウさんは、「物理学者は何でも知っていなければならない」という信念のもと、「理論ミニマム」というものを考えた。要は、ランダウさんが考えた最低の基準に達したら（2つの数学分野と7つの物理分野の試験に合格すること）、ランダウさんの「弟子」と認められるわけ。「弟子」といっても、ランダウさんの手帳に名前が書かれ、ゼミに出るのが許されるだけ。ちなみに、1分野の試験を受けられるのは最大限3回。つまり、3連敗したらサヨウナラ。約30年の間に、旧ソ連のあちこちから試験を受けにきたけれど、合格したのはわずか約40名。（これを少ないとみるか40名も合格したのは驚異とみるかについての結論は出ていない。）

そうこうするうち、その基準で教科書を創ることを考えた。でも、ランダウさん、頭は切れるけれど、文章を書くのは大の苦手。そこで、相棒に選んだのが、最年少（確か19歳くらい？）で理論ミニマムに合格したりフシツツ。それから数十年かけて完成したのが、この「教程」。つまり、この「教程」は、大学の講義で教えるレベルなんか全く無視して、「ランダウさんの基準」でできるだけ「簡潔、明瞭」に書かれた、非常に魅力的だけれど、ある意味恐ろしい「教科書」。

それから何十年も経ったけれど、今でも世界的に認められ、今日も、きっと世界中で多くの学生さんが、ウンウン唸りながらも必死で読んでいるはずの「教科書」。

様々な大学の様々な講義で良い「参考書」と紹介されることは多いけれど、「教科書」に指定するまでの勇気を持つ教員は少なく、「どの段階で読んだらいいですか」という問いに対する答えが非常にばらついてしまう困った「教科書」。

執筆者紹介

北谷 英嗣

教育開発系准教授。専門領域は、物性基礎論、統計力学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『力学 増訂第3版』 エリ・デ・ランダウ、イエ・エム・リフシッツ著(広重徹、水戸巖) 東京図書 1974年 2,100円』

[ブックガイド目次へ](#)

『ケミルミネッセンス 化学発光の基礎・応用事例』

大澤善次郎著／丸善

2008年は日本人のノーベル賞同時受賞で沸いた。特に、下村博士のオワンクラゲからの蛍光たんぱく質の発見は、身近な発光現象から生命化学や医療の応用研究に貢献したこと、苦勞の末に蛍光物質を発見した秘話等、聞いていても興味が尽きない。化学発光は神秘的でわかりやすいので、高校生や高専生が研究室に訪問してくる機会があるとよく体験実験をやる。ルミノールの化学発光実験は、真っ暗闇に輝く青白い光を見て若い学生諸君が驚いてくれるので、ちょっとしたマジックショー気分である。そういうわけで、化学発光実験は高校や中学でも模擬実験でよく行われているようである。

ところが、意外なことに、化学発光を専門に扱う教科書は非常に少ない。大概是、光化学等の教科書の一説に「化学発光」の章があり、その章での記述だけとか、光検出の技術解説書の中で、化学発光を紹介する程度である。おそらく化学発光の機構が複雑で「教科書」になりにくいというのが理由のような気がするが、一般に広く知られている割にはちょっと意外な気もする。本書はその少ない化学発光の教科書のひとつで、化学発光の基礎から実際の化学発光の事例を書いている。専門家でなくても読めるよう工夫がされているし、今、実用化され新聞等で話題になる有機EL（エレクトロルミネッセンス）の発光から、模擬実験でよく使うルミノール発光、そして、サラダ油や玄米等の食品の発光現象を紹介している。竹取物語で光り輝く竹の中からかぐや姫が出てきた一節は、実はタケノコの「化学発光」だったとか、喫煙者と非喫煙者の血漿における化学発光強度が違うとか、ポリエチレンをナイフで切ると化学発光するとか、読み物としても結構楽しめるし、本書を読んだ後では日常にある化学発光を探す楽しみもできる良書だと思う。

執筆 者 紹 介

村上 能規

物質・材料系助教。平成21年4月より長岡高等専門学校准教授。専門領域は、物理化学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『ケミルミネッセンス 化学発光の基礎・応用事例』大澤善次郎著 丸善 2003年
4,095円

ブックガイド目次へ

『エントロピーの法則 ―地球の環境破壊を救う英知―』

ジェレミー・リフキン著、竹内均訳／祥伝社

「石油は、あと30年で枯渇する」、オイルショックの年である1973年頃、盛んに言われていた言葉である。それから35年以上経っているが、石油は未だ枯渇していない。そればかりか当時発展途上国と呼ばれていた中国やインドなどの国々が経済発展し、大量のエネルギーを消費するようになってきている。当時から叫ばれてきた食料危機、エネルギー枯渇、環境破壊、地球温暖化などの緊急かつ重大な問題が未解決のまま取り残されている。一方、技術革新によって、それら諸問題を解決しようとする意欲的な取り組みも多数行われている。

この本は、私が大学1年生の時、物理化学の講義で習ったエントロピーという言葉と副題の「地球の環境破壊を救う英知」に惹かれて手にした書である。今まさに講義で受けている内容が、あたかも地球の環境破壊を解決する手段になるかのような希望をもって読み始めた。これから学ぶであろう知識を活用して、地球規模の問題に解決の糸口を与えるような仕事に取り組みたいと夢は膨らんだ。

しかし、読み始めてすぐに、技術革新がすべての問題を解決することができないと明言されてしまった。さらに、どんな技術でもエントロピーの法則には逆らえず、有益なエネルギーは希薄なエネルギーに変わってしまい、結果として、エントロピーを増大させてしまうことが、様々な事例を基に徹底して紹介されている。「なんだ技術革新も意味ないのか」と、まるで自己否定された気持ちになり、読むのをやめようかと考えたけれど、何か答えがあるのではないかと探して読み進めた。でもこの本には、環境破壊を救う答えは書かれていなかった。ただ、地球規模の問題を解決するための考え方のヒントを教えてくれていただけだった。

この本の著者ジェレミー・リフキンは、アメリカの経済学者で、本の内容も世界観や文明論、経済学なのだが、科学の世界では馴染みの深いエントロピーの法則を用いて説明している。その一方で、地球物理学の権威で科学雑誌ニュートンの編集長であった東大名誉教授竹内均が翻訳しているというとても面白い本である。

この本は、環境破壊など個人の努力では何も変わらないので自分には関係ないと思っている人や、エネルギー枯渇など閉塞感いっぱい希望を持ってない人、それらの問題から目を背けて考えることをしない人には、是非読んでもらいたい。この本を読んで、どんな未来を想像するのか？

執筆者紹介

松丸 幸司

産学融合トップランナー養成センター特任准教授。専門領域は、材料工学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『エントロピーの法則 改訂新版』 ジェレミー・リフキン著(竹内均) 祥伝社
1990年 1,890円

[ブックガイド目次へ](#)

『雷と雷雲の科学—雷から身を守るには』

北川信一著／森北出版

この夏のことで、雷光の「ピカ」と同時に雷鳴の「ドン」が聞こえる経験をしました。一瞬（零点数秒）遅れて聞こえる落雷はたまに経験しますが、完全一致に遭遇することは滅多に無いのではないのでしょうか。そのような訳で、本書「雷と雷雲の科学—雷から身を守るには」（北川信一著）を紹介します。雷の落ちる危険のある場所には行かないので関係ない、とお思いの方も多いかもしれませんが、そうお思いの方こそ是非、この本を読まれることをお勧めします。屋外での作業、活動、スポーツをする人は当然、雷には十分注意するでしょう。しかし落雷の本当の怖さは、むしろ、あまり危険性を意識しない日常生活の中にこそ存在します。大学構内にいても、例えば講義棟脇の駐車場で、あなたが車から降りようとしたところ、遠くで雷鳴が聞こえたとしみましょう。まだ雨は降っていないので、急いで講義棟まで向かったとします。同じ状況なら私でもそうします。しかし、これは既に、雷の直撃を受ける可能性のある、危険範囲内に晒されていることになります。雷鳴が届く範囲は14kmと意外に狭く、落雷地点のばらつきを考慮すると、雷鳴がかすかにでも聞こえたら既に危険範囲内に入っています。野外であればすぐに非難すべきで、秒数を数えて雷雲が近づいているかどうかなどと判断している余裕はありません。

雷鳴の可聴範囲内では、すでに危険範囲内に入っている。

雷については解明されていないことが多かったのですが、近年の研究でかなりの事実が明らかになっているようです。雷の落ちる場所がどのようにして決まるかもその1つで、これにより避雷針の保護範囲は以下のように修正されるようです。従来の基準は「避雷針を45度以上の高さに仰ぎ見る範囲は保護空間となる」でしたが、30mを超える避雷針の場合の扱いが変わってきます。その理由は本書に詳しく書いてあります。

避雷針が30m以下の場合には従来どおり、避雷針を45度以上の高さに仰ぎ見る範囲は保護空間となる。避雷針が30mを超えるときは、避雷針の高

さにかかわらず、避雷針の直下から30mの円内が保護空間となる。

30mというと、機械・建設棟の避雷針が44mなので、新基準では保護空間から外れる場所が大学構内でも存在します。また、保護空間というのは、一応安全とされる範囲で、100%安全とされる安全空間とは異なり、落雷の可能性が全く無いわけではありません。鉄筋の建造物と自動車（無蓋車を除く）の内部は安全空間です。木造の一般家屋も、ほぼ安全な空間といえます。一方、木の真下は、高い木ほど落雷を受けやすい上に幹からの側撃を受けるので、かえって危険。避雷針の無い建造物のそばも同様。その場合2m以上離れること。

落雷事故を100%は防げないにしても、正確な知識を持っていれば、事故に遭う確率を減らすことは出来ます。雷の電気がどのようにして発生しているか（あられが関係している！）を知れば雷にも興味が持てるし、日本海側特有の冬季雷が、1発当たりのエネルギーが通常の雷の100～1000倍！にもなる素晴らしい現象であることを知れば、長岡の冬も、（より）楽しくなるというもの。

冒頭で述べた雷光と雷鳴が完全一致する落雷ですが、これは安全空間である自宅で休日に遭遇したものでした。正しくは、直前までマウンテンバイクに乗っていたのですが、雷注意報が出ていたので遠出はせず、雷雲が近づいていたので雷鳴が聞こえる前に、余裕で自宅に戻りました。本書はそれ以前から読んでいたので、その時はもう（勿論これから）雷で怖い体験はしません。さて、安全な建物内に入った私は、暑いので窓を開け放っていました。つまり雨はまだほとんど降っていない時です。コーヒーを入れて一口飲んだところで、何の前触れも無く、それはやってきました。自宅を直撃です。映画やテレビドラマに出てくるような優しい音ではなく、強いて言えば、三尺玉が目の前で炸裂したような「ドカン」というすさまじい音。爆風は無いので怪我はしません。耳はやられましたが一時的なものです。とにかく驚いた私は、飲んでいたコーヒーをぶちまけてしまいました。手や顔にも掛かりましたが、運良く「やけど」はしませんでした。その理由は、その日は大変暑かったからに過ぎないのですが、入れたのがアイスコーヒーだったからです。

雷の日にコーヒーを飲むときは、ホットではなく、アイスコーヒーにする。

これが、この雷の経験を基に私が導いた、雷から身を守るための安全法則。「へそ」を取られないように隠すよりは、たぶん役立ちます。

執筆者紹介

鈴木 泉

経営情報系助教。専門領域は、知的システム。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『雷と雷雲の科学 雷から身を守るには』 北川信一著 森北出版 2000年 1,995円

[ブックガイド目次へ](#)

『科学を志す人々へ』

石本巳四雄著／講談社学術文庫

本書は、昭和14年に、柊谷書院から“科学への道”として出版され、昭和54年に講談社から復刻されました。

小生が本書と出会ったのは昭和60年で、本学助手に採用されて丁度3年目でした。本書は技術と科学の関係について平易に解説しており、本学の“技術科学（技術の実践による智の探求）”に通じるものがあるのでは…ということで購入したことを今でも鮮明に記憶しています。著者は我々の生活に直結する技術とそれを創成する工学並びに科学を有象的と無象的という切り口で所論しており、また、それぞれの技術者・研究者の立場の相違についての論述もあり、四半世紀後の現在読み返しても新たな感銘を受ける本です。さらに、科学と技術の本質だけでなく、それらの創造に関ってきた人物の天才論についても言及されており、当時数理工学的なアプローチで液晶相転移・画像符号化・垂直磁気記録等の研究に日々我武者羅に取り組んでいた小生には、極めて新鮮に映ったことを今でも覚えております。

また、巻末には、故川上正光元学長による解説があり、独創性について先生の実験者としての述懐も含めて述べられており、また、本学の基本理念である“技術科学”の由来についても触れられておられます。

本学において、VOSの精神に根差した技術科学を修得し、21世紀の持続可能な社会の創成を担う学生諸子に、是非ご一読されることをお奨めします。

執筆者紹介

中川 匡弘

電気系教授。専門領域は、カオス工学、フラクタル工学、感性情報・脳機能計測工学、非線形複雑進化系の数理、液晶物理学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『科学を志す人々へ』 石本巳四雄著 講談社学術文庫 1984年 693円

ブックガイド目次へ

『数の大航海 対数の誕生と広がり』

志賀浩二著／日本評論社

著者の志賀浩二先生の語り口はいつも魅力的である。「先生」と書いたのは、筆者は大学で志賀先生の授業を受講したからである。学部4年生の時の多様体論の授業でド・ラームの定理を情熱的に講義してくれたことを今でも思い出す。先生が熱心に講義してくれたのに、ほとんど理解していなくて申し訳なく思っています。志賀先生はその後、膨大な数の数学の啓蒙書を執筆している。そのどれもが普通の書き方ではなく、時には自分の内面を表現しながら、対象を生き生きと描写し、いかに読者に理解してもらえるかを最重要のことと考えていることが感じられる。

さて、本書は対数の概念が歴史上どのように生まれ出たかについて書かれている。現在では、対数は高校2年生で勉強する。一度勉強して理解すると、とても簡単な当たり前のことと思うようになる。対数は様々な分野で利用される。例えば、情報の分野では対数は重要である。0または1のどちらかひとつの値を表す情報量を1ビットというが、これも対数である。情報理論の基本的概念であるエントロピーは確率の対数を使って定義される。対数なしでは情報理論は存在しないし、大げさに言えば情報通信も存在しない。

このように、対数が日常的に使われている現在では、対数という概念が生まれるときの困難さは想像できない。本書ではどのような歴史的なあるいは社会的な背景から産みの苦しみを経て対数が発見されたかについて、当時の時代に戻って詳細に解説している物語である。

皆さんは e をなんと呼びますか？自然対数の底、と呼ぶのでは同語反復のようで落ち着かない。あまり親しまれてはいないが、「Napier数」という名前がある。名前の由来はスコットランドの数学者ジョン・ネピアである。対数はネピアによって17世紀初めに発見された。

15世紀から17世紀のヨーロッパは大航海時代にあり、世界中に貿易先を求めて船を出していた。当時の航行は天体の観測に基づいていた。昼は太陽、夜は月と星である。従って、天文学が発展した。西欧の数学は実社会からの要求が創造・発展の原動力となっている。自分の船の正確な位置を知るためには、精密な観測が必要である。例えば、有効数字7桁の数を扱うとする。2つの7桁の数の掛け

算を行うときの計算量は足し算と比較すると大きなものであり、当時は掛け算に苦慮していた。何とか掛け算の計算量を減らすことはできないか？積を和にすることはできないか？ネピアは、等比数列と等差数列の対応を見て積を和に変換する方法を考え始めた。そして、1より少し小さい公比の等比数列を考えて、実数区間を等比数列の各項で稠密に刻んで実数を表し、逆対応から対数表を作成した。対数表は出版され実用に供され、計算量の大きな削減に役立ったのである。

その後、負の数の対数、虚数の対数が議論されて、オイラーによって対数は無限多価であることが明らかにされた。さらに、対数関数の多価解析関数としての全貌が我々の前に提供されることになる。その過程がヨーロッパの歴史と共に生き生きと記述されている。

最後に、膨大な数値的な計算から新しい概念が生み出されることを著者がどのように考えているかを示す部分を引用しよう。「数学者は計算することの楽しみにひたっていたのである。この楽しみの中から誘い出されるようにして登場してきた無限は、概念としてではなく、計算するという無償の行為の尽きることのない泉として存在していた。」(同書p.176より)

志賀先生の別の著書として、『無限からの光芒』(日本評論社)も選択公理の不思議さを体感させてくれる興味深い本です。

執筆者紹介

中川 健治

電気系准教授。専門領域は、待ち行列理論、ネットワーク特性評価、応用確率論。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『数の大航海 対数の誕生と広がり』 志賀浩二著 日本評論社 1999年 2,940円

『無限からの光芒 ポーランド学派の数学者たち』 志賀浩二著 日本評論社 1988年 3,780円

ブックガイド目次へ

『痛快! コンピュータ学』

坂村健著／集英社文庫

本学の学生諸君は、コンピュータやインターネットといった情報技術（IT）を便利に使いこなしていますよね。しかし、コンピュータとは何ですか？ インターネットとは何ですか？ ときかたれた時に的確に答えられるのでしょうか？ 「何かなんて知らなくても、道具として便利に使っているんだから、それで十分」というのも、一般の人ならばひとつの見識と言えましょう。しかし、皆さんは大学生、それも工学部の学生です。自分が使っている道具について、それが何であるか、どのような原理で動いているか、興味を持って欲しいと思います。ITは非常に多くの要素から成り立っていますから、それらについて深く知ろうとすると、大変な勉強が必要です。それでも、せめて基礎的な事項については、知っていて欲しいものです。

さて、それではITの基礎的な知識を身につけるのに、どのような本を読めば良いのでしょうか。大学の売店でも、街中の本屋さんでも、ITに関する書籍は数多く売られています。中でも多いのは「〇〇の使いこなし」といった、いわゆるHOWTO本です。コンピュータやソフトウェアの操作について丁寧にわかりやすく書いてあるのですが、仕組みや原理にはほとんど触れられていません。では、「〇〇教科書シリーズ」といった大学の教科書として使われる本はどうでしょうか？ こちらはITの原理や概念について沢山のことが整然と書かれています。しかし、これを独学として読むには、文体が硬いし無味乾燥で、眠くなってしまうそうです。ページ数が限られている上に、授業で使われることを前提としていますから、知識が列挙的になるのは教科書の宿命とも言えます。授業では、先生の話が潤いの役割を果しているわけです（誰ですか、それでも眠たいなんて言っているのは！）。

『痛快! コンピュータ学』は、ITに関する基礎的な原理や概念が網羅的に、かつ、丁寧にわかりやすく気楽に読める文体で書かれた「いいとこ取り」な本です。著者はTRONで有名な坂村健先生。「坂村さんが大学で教えているコンピュータ科学の講義をレベルを下げずに、しかも面白く、分かりやすい本にしてみませんか」という「無茶な注文」に乘せられて生まれたのがこの本である、とまえがきにあります。これが、まさに、この本を言い表わしています。IT関係の多くの書籍は、

出版されてから数年で内容が現状に合わなくなってしまう。それだけITの進歩、またそれに伴う社会の変化が速いわけ。しかし一方で、ITに関する普遍的な原理、概念も確固として存在しており、それらは時間が経っても色褪せることはありません。本書は、このような普遍的な原理や概念を抽出して解説しています。「本書の内容は少なくとも、もう10年経っても通用すると信じている」と、あとがきでも書かれているように、出版された2002年から7年が経過した今も、本書の内容は古さを感じさせません。

なお、本書は、1999年に集英社インターナショナルから出版された同名の単行本を文庫化したものです。記述内容は単行本とほぼ同じで、価格は安くなっていますので、小さい字が苦にならない若い諸君には文庫版で十分ではあるのですが…、残念なことに、文庫版には、単行本のカバーイラストや挿絵が引継がれていません。単行本のカバーには江口寿史のイラスト、挿絵にはさいとう・たかをの劇画や山科けいすけの4コマ漫画が使われていました。これほど豪華なメンバのイラストや劇画・漫画が工学書に使われることなど、通常はあり得ません。単行本はすでに絶版になっていますので新品として入手することは不可能ですが、もしも古本屋で見つけることができたなら迷わず買うことをお勧めします。

執筆者紹介

湯川 高志

電気系准教授。専門領域は、知識処理、自然言語処理、並列コンピューティング。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『痛快! コンピュータ学 global standard・computer science』坂村健著 集英社
文庫 2002年 720円

ブックガイド目次へ

『速度論』

小宮山宏著／朝倉書店

この本は、工学部に進む大学2年生むけの教科書である。ただし20年近く前のことであるので、今も教科書として使われているかどうかは知らない。東京大学では学部1、2年生は駒場にある教養キャンパスで過ごす。2年生の後半に進学先の専門の学部学科が決まり、専門の講義が始まる。著者の小宮山宏先生は、後に東大工学部長、そして総長に就任される高名な先生であるが、この本の執筆時は若手の工学部教授であった。化学系の複数の専門学科に進学が決まった学部2年生を対象とした専門分野の入門的な講義を担当されておられ、その教科書としてこの本を書かれたとのことである。

実は、私は小宮山先生の講義は受けていない。私の専門は土木工学科（今は社会基盤工学というが）であるので、小宮山先生の講義の対象者ではなかったし、そもそも駒場で遊び呆けていた私は、どの授業であろうとまともに出席していなかった(!)。なので、この本に出会ったのは、教科書としてではなく、修士を出て大学で研究を開始した頃に、大学生協の書籍部で偶然手にとったことである。

土木工学と化学系の専門分野とでは、対象とする題材、方法論などに違いがあるので、初学者向けに書かれた本とはいえ、私にとっては新鮮で大変興味深かった。土木の分野ではあまりなじみのない物質移動や熱力学がやさしく解説されていたことも重宝した。しかしこの本の大きな特徴は、法則よりも現象や実例を先に挙げ、そこに科学法則を適用してどのように現象を定量化し、予測するかを解説する流れで書かれていることである。逆に、数式は少ない。工学部で研究対象となる問題は多岐にわたるが、共通のシンプルな法則で記述できる場合が多い。“技術の多様化が著しく進むなかで、科学技術者に要求されるのは、しっかりした基礎をもとに広い分野を横断的に理解できる能力である。科学法則を頭で理解するだけでなく、実際の問題に使える技術者になってもらいたい。”という著者のメッセージが伝わってくる。

この本のまえがきに、「入学してくる学生諸君に対して、大学の教官が行わなければならない最初で最大の仕事は、眠らされてしまった知的好奇心を呼び起こすことである。覚えさせられることは苦痛だが、理解することは喜びであることを実感してもらわなければならない。『誰が何と言おうとも、僕はわかった』という

喜びを経験することが必要である。いったん、知的好奇心に目覚めた若者はすばらしい力を発揮するものだ。講義では常にそのことを念頭に置いている。」と書かれてある。大学教員となり、研究と教育を開始したばかりの私には、このメッセージがとても印象的で、ずっと心に残っている。それ以来、研究室に配属され一緒に研究をすることになった学生には、この本を貸して一読を薦めたことも多い。

執筆者紹介

下村 匠

環境・建設系准教授。専門領域は、コンクリート材料、コンクリート構造。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『速度論』 小宮山宏著 朝倉書店 1990年 4,095円

[ブックガイド目次へ](#)

『視覚でとらえるフォトサイエンス化学図録（改訂版）』

数研出版編集部／数研出版

編集委員から依頼があり、ブックガイドを執筆させて頂く運びとなりました。このお話を頂いてから、まずは平成19年に刊行されたブックガイドを読み返してみました。どの先生も、個性的な紹介文を寄稿されていて、読みものとしても楽しいエピソードが詰まっておりました。さて、私にこんな文章書けるのかしら？今までにきちんと読了した教科書なんて殆ど無いしなあ。どうしょ…。うん、そうだ。一日一度は必ず使ってる、極めて実用的な本を紹介しようかな。

ということで、私は『視覚でとらえるフォトサイエンス化学図録（改訂版）』（数研出版）を紹介致します。私はセラミックスの合成および評価に関する研究を進めていますが、遙か昔、学部一年生の工学基礎実験でやったような内容について、なかなか思い出せないことが有ります。ガスバーナーを点火する、消火する順番。酸を希釈する際に水に酸を入れるのか、酸に水を入れるのか迷ったり。濾過、蒸留、抽出って具体的にはどうやるの？もちろん図書館に行って「実験化学講座」を読み、原理を理解して実験に望むのが正しい方法ですね。しかも最近は、図書館のホームページからも読む（検索ではなく）事が出来ます。実験中の事故を起こさないためにも是非そうしてください。

【はやい】でも、手元に有れば、サッと見ることが出来ますよね？この手の情報。他にも、原子やイオンの半径、電気陰性度、第一、第二、第三イオン化エネルギー、単体金属の結晶格子など、周期律順に並んでおり大変有用です。ま、実はこの程度の情報ならば、教科書やデータブックで簡単に見つかりますね。インターネットを使えば一瞬かもしれません。それだけじゃこの本を紹介する意味がないですよ。さて私はまず、見開きでビビった！放射線元素を除く全ての単体元素の写真が載ってます。金、銀、銅の常温、常圧での色や形状なんて容易にわかります。他にも、実際には見たことなくても、リチウムやナトリウムの単体金属は、空気中の水分と激しく反応するから油中に保存する、なんてのも理工系の学生なら知ってて当たり前かも知れませんが、でも、単体のルビジウム、とかセシウムなんて見たこと有ります？イリジウムは？ほとんどの単体金属粉末は灰色の粉で、あまり代わり映えが無いにもかかわらず、正直に全ての単体元素のカラー写真を載せてます。泣けてくるのは気体です。水素、酸素、窒素や希ガスなんて、常温、

常圧で無色透明に決まっています（これはこれで重要な情報）。なのにちゃんと写真が載ってる。すごい！ただの集気瓶だよ！！でも多分真面目に中身を入れてるような気がしてなりません。ま、ここは軽いギャグだとしても、とにかく全てカラー写真です。

【うまい】この本、私にとって今では理化学事典、理科年表の次くらいに有用なデータベースとなっております。ただし、いくつか気を付けなければなりません。一般向けのため、過度に簡略化された図があります。例えば、原子の電子配置図は、理工系大学生に求められる理解度としては物足りなさを感じるボーアモデルです。ですが、そこから更に深く学ぼうとする姿勢を大切にしてください。ボーアモデルは基本です。工学を志すものにとって、基礎は果てしなく深く、応用は極めて広いのです。実は、この本を眺めながら、研究の新しいアイデアが浮かんじやいました。時には基礎に立ち戻ることが、とても重要なことだと痛感します。

【やすい】最後になりましたが、実はこの本の一番にすごいところは、223ページにも及ぶフルカラーにもかかわらず、な、な、なんと値段が税込み850円なのです。これは絶対に買いです（出版社の回し者ではないしインセンティブももらっていないのであしからず）。日本の科学教育インフラの質の高さと、出版に携わっている先生方、写真を提供して頂いている企業の方々の熱意に、ただただ頭が下がります。

執筆者紹介

黒木雄一郎

電気系助教。専門領域は、材料工学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『視覚でとらえるフォトサイエンス化学図録 改訂版』数研出版編集部 数研出版 2006年 840円

ブックガイド目次へ

『100年の難問はなぜ解けたのか』

春日真人著／NHK出版

「では先生の研究はいったいどんな役に立つんですか？」この大学に勤め始めた頃、学生に聞かれた。言いよどんでいると、もうひとりの学生が「数学というのはすぐに役に立つというものじゃないんじゃない？」と助けてくれた。そうなのだ。役に立つのは十年後か百年後かわからない。大きな声で言えないが、世の中の役に立てようという考え方自体、あまりしていなかった。

最近「ポアンカレ予想」という、ポアンカレが提出した定理が、ロシアの数学者ペレリマンによって証明された。証明されるまで100年かかったことになる。ところがペレリマンはフィールズ賞を辞退し、クレイ研究所の1億円の賞金も受け取らず、失踪してしまった。いったい何が起こったのだろう。それをNHKがドキュメンタリー番組にしたのを、更に書籍としてまとめたものが本書である。

「ポアンカレ予想」とは「単連結な閉3次元多様体は、3次元球面と同相である。」という命題である。本書はまず、この言葉の意味について、いろいろな比喻を用いて説明する。その一つは「宇宙にロープをどのように回しても、たぐっていけば回収できるなら、宇宙は丸い。」というものだ。この私の引用だけでは意味がわかりにくい、本書の説明はなかなか良いと思う。

ここでは、「単連結な閉3次元多様体」を、我々の住んでいる「宇宙」になぞらえている。厳密に言えば、一方は「数学的な対象」であり、もう一方は「現実の世界」で、両者は関係が無い。いや、関係が無いとはちょっと言い過ぎで、前者は後者を抽象的に捉え直して再構成したものと言うことはできる。

それはいわば、バーチャルなゲームである。ゲームを世界中の人が100年にわたって、クリアできないのとは大騒ぎしているわけだ。だが人間だけでなく、もし宇宙人がいたとしても同じゲームをしなければならないはずの、そういうゲームである。

本書では、ポアンカレ予想に数学者たちがどのように関わってきたか、年代を追ひ、当事者へのインタビューを交えて説明される。しかし、当のペレリマンについての情報はあまり無く、やはり相変わらず多くが謎のままだ。最後の方で、ペレリマンの「恩師」が彼を訪ね、面会しようとするが果たせない、という場面がある。そして、その先生は、まるで暗いファンタジー小説のエンディングのよ

うな台詞を漏らす：

「彼は二十五年前とはまったく別の人間になってしまいました。私には、いま彼に何がおこっているのかわかりません。彼の生きている世界は、私たちが生きている世界とは、もはや違うようです。ポアンカレ予想を証明することは、私たちには想像すらできない恐ろしい試練だったのかも知れません。その試練を彼はひとりでぐり抜けました。しかしその結果、彼は何かを失ってしまったのです。」

執筆者紹介

原 信一郎

教育開発系准教授。専門領域は、代数的位相幾何学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『100年の難問はなぜ解けたのか 天才数学者の光と影』春日真人著 NHK出版
2008年 1,365円

[ブックガイド目次へ](#)

科学随筆文庫全40巻

寺田寅彦・他著／学生社

『大自然科学史』全12巻

ダンネマン著、安田徳太郎訳／三省堂

『科学の語源 250』、『続科学の語源 250』

アシモフ著、小尾信彌監修、東洋恵訳／共立出版

科学随筆文庫全40巻 学生社

一流の科学者には筆の立つ人が多い。寺田寅彦、糸川英夫、湯川秀樹、など数学、物理学、化学、動物学、植物学、医学、工学の各分野から、110人の科学者が書いた珠玉の随筆集が、科学随筆文庫全40巻である。ここには科学者ならではのうんちくが満載されている。一例をあげると、熱帯低気圧、すなわち台風には昔から特別の名前があった。日本では「野分（のわき）」、フィリピンでは「バギオ」、西インドでは「ウラカン」、などと呼ばれた。WMO（世界気象機構）では、その風力の最大がある値に達し、なおかつ北西太平洋にあるときはタイフンと呼び、それ以外は全てハリケンと呼ぶ。ハリケンの語源がウラカンである。コロンブスが第一航海で出会った大嵐を、当地の人がウラカンと呼んでいるのを聞き、その発音をスペイン語に取り入れ、それが転訛してハリケンにたどり着く（久米庸孝「一本足の台風神」、第9巻『気象ひとすじ』に掲載、昭和38年）。

科学者は「ぶらんこは何故動くのか」という、一見、角運動量の保存則に反するような現象にも疑問を呈する。それが腰を落とす事による重心の移動と偶力の変化を利用している事を図で示し、このような一見奇妙にみえる事柄に疑問を持たない事は、初等教育が実践的徹底に欠けるからだと言を呈す（伏見康治「ぶらんこ」、第40巻『科学者のノート』に掲載、昭和17年）。

もちろん、研究に関する随筆も数多い。藤永元作は、クルマエビに憑かれた人生を送った。幼くして父を失い、本人も病気のため何回も休学、静養を余儀なくされる。彼は魚が好きで、胸を膨らませて東大の水産学科に入学した。しかし大学の授業は退屈そのものであった。砂を噛むおもいで待ち焦がれた夏休みに、彼は朝鮮や九州に出かけた。そこで変な親父に出会い、妙な縁で卒論そっちのけで南方航海に出発。各種のエビを採取し、お情けで大学を卒業する（1933年、30才）。息子の将来を信じて疑わなかった母親に彼は「エビの研究をやる」と言う。「大学

まで出て、エビかい?」。母上の落胆振りが切ない。教授も「きみ、泥沼に足を踏み入れ、一生を棒に振るぞ」と翻意を促す。しかし、彼はもともと空想家に出来ており、クルマエビの謎解きに生涯を賭けるのに迷いは無かった。彼の夢はついで、希望は無限に広がっていた。彼は就職の誘いを受けた水産研究所の所長に、天草でクルマエビをやらせてもらえるならとの条件を出し、了承される。天草では助手2人と日曜、祭日を返上して研究に没頭する。その中で、あまりの重労働に助手がストライキを起こす。彼は、土曜には小料理屋で一杯飲むことにし、請われるまま芸者も呼ぶ。機嫌を直した助手が芸者と遊んでいる隣で資料の整理をし、論文を書く。変人との評判が立つ。借金もかさんで来る。そうこうしている内に、世界で始めてクルマエビの人工産卵に成功する。時に1933年7月24日(30才)。その後、彼はフジツボ、コイ、アヒルと遍歴する。そのような生き様を含めて、彼の胸躍るような研究人生が快調な筆で綴られている(藤永元作「クルマエビに憑かれて三十年」、第38巻『化学者の夢』に掲載、昭和37年)。

人にたかるツツガムシが反応するのは、人の吐く炭酸ガスであり、多くの寄生虫が同様であることを見出したのは、佐々学である。彼は、外国で別個に発見された蚊に対する炭酸ガスの誘引作用と他のダニなどの寄生虫に及ぼす炭酸ガスの効果の違いについても明らかにする(佐々学「いきに感ずる虫」、第39巻『風土と共に』に掲載、昭和35年)。

例を挙げだすときりがないが、随筆集でありながら、どの文章にも研究のヒントや生きることの喜びが満ち溢れている。本大学の図書館には、第3、4、10、14、15、16、18、19、21巻の9巻が収められている。

『大自然科学史』全12巻、ダンネマン著、安田徳太郎訳 三省堂

一步一步、自然の謎を解いていく、いわば科学版の探偵小説のような書物である。一人でこのような書物を書き上げることができたことは驚異であり、奇跡的と思う。彼は一生かかって何千巻にもおよぶ自然科学史文献を集め、1910~1914年および1920~1923年にかけてこの書物を書いた。図も非常に多い。

書物は、古代エジプトで使われた一元一次方程式の解き方、60進法の由来など、

エジプト人の文化からはじまる。アリストテレスの四元素説については、その思考法がきわめて独特であるが故に少し詳しく述べられており、アリストテレスには時々、本当のまぐれあたりが有った事にも触れている。化学、数学、物理はもとより、天文学、博物学、生理学におよぶ膨大な発見の歴史が記述されており、最後には執筆年代当時の最新情報である、ボーアの原子模型まで記述されている。

この書物は訳者の執念にも圧倒される。訳者は自然科学の歴史的な把握に非常な興味を持っていたが、当時得られる書物はがっかりするものばかりだった。たまたま1922年にイタリアで発行されていたある学術雑誌に大きくのっていた本書の広告を目にして、全4巻を取り寄せ、その内容に驚嘆する。彼は翻訳を決意しダンネマンに手紙を出す。返事の快諾書は彼の娘さんからであった。「父も昨年なくなりました。日本語訳ができたなら、私の母がどんなに喜ぶでしょう」。1941年の初版（全体の半分）はたちまち大ベストセラーとなる。しかし戦争のため、続巻の翻訳と出版は遅れ、完結をみたのは20年後の1960年である。これは、しかしながらあまり売れなかった。それから15年ほどがたち、現代語訳として登場したのが本書である。第1刷が1977年発行で、小生の所蔵しているものは第9刷（1985年）である。版を重ねるほど売れているようで、他人事ながら嬉しく思っている。

なお、この書物は小生が授業中のエピソードのネタとして仕入れることの多い書物でもあり、本大学の図書館にも1セットが揃っている。

『科学の語源250』、『続科学の語源250』 アシモフ著、小尾信彌監修、東洋恵訳 共立出版

意志の疎通には、概念とそれを表す共通の言葉が必要である。概念や物質を表す言葉が成立するには、それ相応の理由が存在する。

かつては多くの場合、科学用語はラテン語やギリシャ語から作られていた。教育を受けた人は、何も知っていなくても、言葉から物質や概念を知り得たのである。しかし、今や、ラテン語を解する人はほんの僅かであり、ここに、科学用語が神秘化し、逆に発見の喜びを味わえるようになったのである。（アシモフによる序文の抜粋）

アシモフは博学の人である。したがって単なる学術用語の説明に終わらない。最初に取り扱われる用語はアカデミー (academy) であるが、ここではアカデーメシアから話が始まる。スパルタのヘレネーがアテネにさらわれた時、アテネ人のアカデーモスがその居場所を教えた。そこで、スパルタはアテネに侵入したときも、アカデーモスの敷地、アカデーメシア、には足を踏み入れなかった。いわば平和の象徴となったのである。下って、この近くに住むプラトンがここで教えを説いた。今で言う学園である。この名前をアカデミーというようになった。またアカデミックとは、元来プラトン哲学のように高度に論理的で、現実的な意味を持たないものを意味している。

この他にも、言葉の中に残っている、他の古代の哲学者が教えを説いていた場所にも言及し、話はゼノン派のストイシズムにまで及ぶ。

小生は、言葉の裏に潜む「本来の意味」に興味を持ち、この本以外にも、『化学者たちのネームゲーム I・II』(A.Nickon、E.F.Silversmith著、大澤映二訳、化学同人)、『化学語源ものがたり 正・続』(竹本喜一他著、化学同人)、『元素の小事典』(高木仁三郎著、岩波ジュニア新書)、『元素発見の歴史』全三巻(ウィークス他著、大沼正則監訳、朝倉書店)、『単位のいま・むかし』(小泉袈裟勝著、日本規格協会)などを時折取り出しては眺めている。

執筆者紹介

丸山 一典

本学非常勤講師。長岡工業高等専門学校教授。平成18年3月まで本学に在職。専門領域は、物理化学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

科学随筆文庫全40巻 学生社 1977-1978年 品切・絶版

『新訳ダンネマン大自然科学史』全12巻 ダンネマン著(安田徳太郎) 三省堂
1977-1980年 品切・絶版

『科学の語源250』 正・続 I. アシモフ著（東洋恵） 共立出版 1972-1974年 品切・絶版

『化学者たちのネームゲーム 名付け親たちの語るドラマ』 全2巻 A. Nickon, E. F. Silversmith 著（大澤映二） 化学同人 1990-1991年 品切・絶版

『化学語源ものがたり part 1』 竹本喜一、金岡喜久子著 化学同人 1986年 品切・絶版

『化学語源ものがたり part 2』 竹本喜一、金岡喜久子著 化学同人 1990年 1,050円

『元素の小事典』 高木仁三郎著 岩波ジュニア新書 1999年 819円

『元素発見の歴史』 全3巻 ウィークス、レスター著（大沼正則） 朝倉書店 2008年 17,325円

『単位のいま・むかし』 正・続 小泉袈裟勝著 日本規格協会 1992年 2,852円

[ブックガイド目次へ](#)

『深夜特急』

沢木耕太郎著／新潮文庫

学生時代に読んだ本の中で最も熱中し、最も印象に残っているものは、沢木耕太郎著の『深夜特急』です。同書は1986年から1992年にかけて順次刊行された四六判で3冊、文庫版では6冊におよぶ長編の海外旅行の記録であり、旅行後に著者が客観的に当時を振り返り、内容を整理した形で書かれています。対象となる旅は、大学を卒業し数年たった26歳の著者が、乗り合いバスでインドのデリーからイギリスのロンドンを目指す旅です。同書を本屋で見かけた際には、題名から夜行列車による旅を綴ったものだと勘違いしていたことが懐かしく思い出されます。

この旅は、乗り合いバスでインドのデリーからイギリスのロンドンまで行くことは可能か否かについての友人との賭けから始まっています。ほとんどの友人が不可能というところを、26歳の著者は可能であるとし、そのことを確かめるために旅立ちます。しかし、実際はデリーからロンドンまでの行程について綿密な計画をたてるわけではなく、バスやホテル等の予約は一切せず、予定・計画などは全くなし。所持品は、机の中の小銭までかき集めて作った2000ドル弱のお金、3日分の下着、長袖・半袖の服がそれぞれ1着、抗生物質と正露丸、アジアとヨーロッパの地図がそれぞれ1枚、3冊の本といったもの。これでアジアからヨーロッパを巡る旅になります。無計画なため、日本を出てから、本来の目的となる旅の発地であるデリーに着くまでの間にも、香港、マカオ、バンコク、シンガポールなどアジアの都市で多くの時間を費やし、そのときの体験も併せて綴られています。

この本の最大の魅力は、ノンフィクションであるはずなのに、通常ではあり得ない体験が多く描かれている点にあると思います。実際に、このような旅を行った人がいると知った多くの若者が、同書に触発され、自分も体験してみようと、読んだ直後に成田空港から香港、マカオに飛び立ったという伝説もっています。実際に私の身近にも、同書を読んでインドに向かい、長期間同地で過ごした人がいました。要は、若者の旅の魅力がいっぱいなのです。

私の読後感は、自分には到底このような旅はできないというものでした。それでも、何も知らないところに、言葉が話せるでもなく、余分なお金があるわけで

もない状態で行くことのできる勇気（蛮勇というべきものか）には、強いあこがれを感じたものです。読後10年以上経過しましたが、今でもたまに深夜特急のような旅をしたくなる衝動にかられます。そのくらい印象に残る一冊です。

執筆者紹介

田浦 裕生

機械系助教。専門領域は、トライボロジー、ロータダイナミクス。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『深夜特急』全6巻 沢木耕太郎著 新潮文庫 1994年 2,600円

[ブックガイド目次へ](#)

Jurassic Park

Michael Crichton 著／Ballantine Books, New York

研究者や技術者にはひらめきが必要である。ひらめきを生むためにはその材料になる知識が必要となる。従ってひらめきを生むためにはたくさんの知識を脳にしまっておくことが重要である。学生時代にこれをやっておくことが非常に大事なことは疑いの余地がない。しかしほとんどの人はやることが多すぎて時間がとれないのではないだろうか。最近は新しい資料の整理術などがあるから（たとえば野口悠紀雄『「超」整理法』）、やり方次第であなたの勉強や仕事は数倍速くなるかもしれない。しかしそれは数倍のレベルの話だ。もしあなたの勉強や仕事を10倍速くする方法があれば、あなたの持つ時間は著しく増える。そのような魔法の方法が実際にある。それは英文を速読する技術である。現代ではほとんどの新しい情報は英語で入るのだ。もし他の人が読むと2日かかる論文や資料を、あなたが2時間で読めるとすればどうだろう。また普通の人が時間がかかりすぎるために読むことすらできない書類を、あなたが短時間で理解できたらどうだろう。あなたはもう自分で自由にできる時間をいくらでも作り出すことができるようになっていくことに気づくだろう。

さて私が学生時代のことで大変後悔していることがある。それは英語の小説を読まなかったことだ。今になって考えると、このできなかったことが前述の魔法の方法だったのである。英語と日本語とでは単語の並びに大きな違いがあり、これが複雑な文章をさっと理解できない主な原因である。では英文の速読のためには何をすればいいのだろうか？ 答えは簡単で、面白い本をたくさん読めばいいのである。ここに本稿で紹介する*Jurassic Park*が登場する。

本書を始め*The Andromeda Strain*などいくつかの映画化された有名な小説を残して、Michael Crichtonは昨年（2008年）11月にその生涯を閉じた。クライトンはハーバード大学医学部の出で、彼の生物学の知識には驚嘆すべきものがある。家の本棚に、昔少し実験を教えたことのある研究者よりお礼に送られたペーパーバックの*Jurassic Park*がある。久しぶりに開いてみると“Toru, This book gives a unique & ironic view of molecular biology in our time…”で始まる彼女の書き込みとサインが目に入った。この小説が映画化された時、*Nature*誌のニュース欄に卵から孵化する恐竜の写真が“A dinosaur is born at the Jurassic Park”という見

出しと共に載っていたのを思い出した。*Nature*誌にフィクションの記事が載るのは実に珍しい。この映画が当時かなりのインパクトを持って迎えられたことを示すものであろう。iPS細胞の時代である現在から考えると、動物のクローニングは実はあまり簡単ではなかった。しかし生物に興味がある人が原作を読めばかなりのメリットがあるだろう。本書には生物についての正確な記述が至る所に見いだされる。暑い砂浜にどうして毒蛇が出ないのか、砂囊の働きは何か、恐竜は砂囊を持っていたのかなどの情報が豊富である。映画のおかげでストーリーはよく知られているが、話を知っている方が英語は理解しやすい。本は映画とは量が違う。本書を読み終えれば得られるものは非常に大きい。

本書を読む目的は2つある。第1に英語を読むことへの抵抗感をなくしてしまうこと、第2に英単語を知らないということへの意識をなくしてしまうことである。長い英文の意味をすばやく理解するにはコツがある。それは訳さないことである。そうすれば英語の語順のままで意味を理解することができるようになる。辞書は引かなくて良い。日本語の本を読むときは、知らない単語の意味は過去に学んだエピソードから類推するのが普通だ。茂木健一郎によれば、学校で勉強したはずなのに英語が苦手なのは、エピソード記憶が少ないままに、言葉の意味を、辞書を引くなどして少ない事例から理解しようとしているからだという（『ひらめき脳』p.125）。

本書はおもしろい。でも一度にたくさん読むと眠くなるかもしれない。長く読み続けるために大事なことが3つある。まず夜に読むはいけない。眠くなるだけである。もっとも、眠くなるのが読書の目的ならいいのだが、英語の勉強にはならない。読書を勉強としてとらえるなら早朝に読むのがよい。第2に日本語の本も入れて、読む本を5～10冊そろえる。本書より面白い本は入れてはいけない。これらを毎朝、数ページずつ読むのである。読み進めるコツの3つ目は「ごちゃごちゃ言わない」ことである。いろいろ理由をつけて遅らせたりやめたりしてはいけない。さっさと最後まで読めばいいのだ。5～10冊中のたったの1冊なのだから。

最後にもう一つ大事なことがある。今では多くの企業のエグゼクティブが取り

入れているGTD法という仕事の能率を上げる方法がある（David Allen, *Getting Things DONE: The Art of Stress-Free Productivity*）。この本に関する感想で一番多かったのは当たり前のことが書いてあるということであったという話を聞いたことがある。大事なことは実は当たり前のことが多い。しかしながらその実行方法を確認するのは簡単ではない。だからここに記した方法は誰にも伝えてはいけない。もし他の人にばれてしまえば、英文の速読という一見難しそうなことが、実は当たり前のように簡単にできることがわかってしまう。そうなるとあなたはせっかくこの文章を読んで得た優位性を一瞬にして失ってしまうだろう。

執筆者紹介

三木 徹

生物系教授。専門領域は、分子細胞生物学。

『書名』 著者名（翻訳者名） 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『*Jurassic Park*』 Michael Crichton 著 Ballantine Books 1991年 842円

[ブックガイド目次へ](#)

『新々英文解釈研究』

山崎貞著

『人を動かす』

デール・カーネギー著

『あなたの英語診断辞書－英語における日本人共通の誤り－』

松本安弘・アイリン著

2008年の年の暮れ、日本経済新聞第一面下方に掲載される書物広告欄をみて目を見張りました。懐かしい書物のタイトルを見つけたのです。その本はかの有名な書、山崎貞著『新々英文解釈研究』でした。すぐに注文しました。この本は、私が高校時代、英語の授業で使われた参考書です。授業ではこの本を徹底的に勉強させられました。1年生の時でした。その後、しばらくして絶版になりましたが、大学に進学してからも大切に保管し、時々、英文に自信がない時などに参照していました。社会に出てからも同様でした。その後、結婚して子どもが生まれ受験期にさしかかった頃、息子たちに貸しました。長い間、私の下を離れているうちに、行方不明になりました。類似の本を探し、数年前に2種類ほど買い求めましたが、「山貞の英文解釈」ほどに簡潔明解ではなく、不満に思っていたところでした。注文した「山貞の英文解釈」が届いた時には、懐かしい刎頸の友に再会した時のように胸が高鳴りました。現在、私の研究室の学生たちが英文表現に自信が持てない時に参照するよう勧めています。いつも私のそばにいて私を助けてくれるかけがえのない名著です。

次に紹介したい本は、デール・カーネギー著『人を動かす』です。この本との出会いは今から約40年前にさかのぼります。就職が内定した日本IBM社から内定者に対して配布された本の一冊がこの本だったのです。当時、研究一筋だった大学院生の私には全く異なる分野の本でした。読んでみて一番印象に残った言葉は「人を説得するにはその人が説得する方法でせよ。」でした。他にも「議論に負けてもその人の意見は変わらない。」があります。この本は今でも世界中の多くの人に読まれています。この本には5つの章があります。第1章「人を動かす3原則」、第2章「人に好かれる6原則」、第3章「人を説得する12原則」、第4章「人を変える9原則」そして「幸福な家庭をつくる7原則」で終わります。

最後に紹介しておきたい本は、実践的な本です。松本安弘・アイリン共著『あ

なたの英語診断辞書－英語における日本人共通の誤り－』です。著者は夫婦の間柄です。この本と出会ったのは私が35歳くらいの時でした。この本との出会いで私のTOEICスコアは一挙に100点ほど上がりました。私たちが書いた英語の論文などをネイティブ・スピーカーにチェックしてもらうことがあります。多くの人はネイティブ・チェックをパスすると安心してしまいがちですが、これは危険です。なぜならそのネイティブ・チェッカーは、依頼者が言いたいことを正しく理解しているとは限らないからです。正しい英文で間違っただけを伝えてしまっているかもしれないのです。このことは依頼者である著者もネイティブ・チェッカーも気づいていないのです。ましてや読者はそのことに気づきません。恐ろしいことです。この「辞書」は、この問題を解決してくれます。論文の著者自身が正しい英文が書けるよう日本人の夫とアメリカ人の妻とが協力して著した傑作です。TOEICスコアが気になり始めた人には必読の書です。例を挙げると、

WRONG : No more Hiroshima !

RIGHT : No more Hiroshimas !

などがあります。前者がどのような意味になるかはTOEICスコアが700点以上の人であればすぐに分かると思います。他にも紹介したい本は沢山ありますが、今回はこのあたりで筆を置きます。いずれにしても書物との出会いは人との出会いと同じように大切です。人との出会いはいずれ別れなければならない時が来ます。しかし、書物との出会いはいつも一緒に生涯連れ添うことが出来ます。出会いを大切にしていきたいものです。

執筆者紹介

浅井 達雄

本学副学長（広報・情報担当）、経営情報系教授。専門領域は、情報システム計画学、産業デザイン学、情報セキュリティ論、マルチメディア情報学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『新々英文解釈研究 復刻版』 山崎貞著 研究社 2008年 3,150円

『人を動かす』 デール・カーネギー著(山口博) 創元社 1999年 1,575円

『あなたの英語診断辞書 英語における日本人共通の誤り』 松本安弘、松本アイリン著 北星堂書店 1976年 3,570円

[ブックガイド目次へ](#)

『中世の秋』

ヨハン・ホイジンガ著、堀越孝一訳／中公文庫

この本をご存じない方も、本の副題が、「フランスとネーデルランドにおける十四、五世紀の生活と思考の諸形態についての研究」であるから、内容はおおよそ見当つく。ルネッサンスの用語をあまねく普及させた J. ミシュレ、ブルクハルト『イタリア・ルネッサンスの文化』（上下、同じく中公文庫）により、我々にも周知の事実となったルネッサンスの概念が再検討を迫られ、このタイトルの副題に与えられた地域・時代がどのようなものであったかを呈示してみせたものである。ホイジンガは緒言で書いている。「この書物を書いていたとき、視線はあたかも夕暮の空の深みに吸い込まれているかのようであった。ただし、その空は血の色に赤く、どんよりと鉛色の雲が重々しく、光はまがいできらきらする。」

この本を採り上げたのは、一つには、最近、新聞の「大切な本」という連載欄に、辻井喬氏が、孤立感を深めた時、心を癒してくれた、として書いた記事（2008.9.28朝日新聞）による。何とはなしに新聞に目を通していたとき、目にとまり、氏自身が語るところでは、記憶は定かでなく（60年安保闘争以後、70年代初めの間に違いないといっている）、暗中模索の状態にあるとき、題名に引かれて手にした、と述べている。私が初めてこの本を手にしたのも、大学生の頃、69-70年の学園紛争後、騒動が鎮静化した後であったことを思い出して、同じ頃、同じようにこの本を取り上げたという記事をみて、懐かしく感じられたのでこの本を紹介する次第である。（辻井喬氏の読んだ本は兼岩正夫・里見元一郎訳の創文社版）

いま一つは、たまたま少し前に L. フェーブル、P. プロードル『ミシュレとルネッサンス』という、L. フェーブルの講義録が翻訳されたもの（石川美子訳 新評論社）を読んだということにある。ルネッサンスという用語が生まれた状況を教えてくれる、1942年コレージュ・ド・フランスで行われた30回の講義録である。また、工学部であるから、このブックガイドには主として工学系に関する本が多く紹介されると思い、皆さんにはあまり手にする機会がない本を紹介しようと考えたことも理由の一つである。

『中世の秋』の内容の紹介は、中央公論社、世界の名著『ホイジンガ』に、堀米庸三氏が解説をほどこしているのを読むにしくはない。実に簡潔明瞭に紹介されている。一読者に過ぎない私では遠く及ばない。読後40年近くにもなろうという

ので、誤りがあっては、と確認のため、これを書くために図書館で久しぶりに中公バックスー世界の名著『ホイジンガ』を探し出してみた。本を読んで大分経った頃、フェルメールの絵を見、乾いた黴の匂いを振り払い、ブリュージュの淀んだ堀の脇に座り込み、しばらく思いを馳せて見たが、『中世の秋』の世界は夢にも現れず、薄く曇った青い空には何物も捕えがたく、呆然としたことを思い出した。当時、読んだ記憶がないのだが、付録の佐藤正英氏の紹介を読むと、氏は、『平家物語』を対象史料として、ホイジンガに倣って読んでみたら、云々、と書いている。同じような感慨を抱くものだったと思った。振り返ってみて、この本に登場する人物たちは、我々とは隔絶しているのか？あなたの隣人はいかが？と問われているような不気味さを秘めた不思議な森に迷い込む。今一度、ホイジンガの緒言を思い起こしてみよう。

同じような心境に至ったら、一読をお勧めする。背景を知りたいければ、マルク・ブロック『封建社会』（みすず書房）等を読んでみたらよい。私自身の欲を言えば、時折、本の紹介欄に、個人的な思い出が載っていることがあり、人それぞれで興味深く、読後感を多くの人にいろいろと聞いてみたい本なのだが、多分、面と向かって語り合うには、背景の理解が容易ではないに違いないから、会話が成立するのが難しかろう、などと考えて残念に思っている。

暇を見つけて読むことしか出来ないのも、門外漢の暇無し族には、翻訳ものありがたい。今少し時間を、と思う昨今、好きなだけ読める時間を持てる頃がうらやましい。遍歴は、机上にもある、と夢想できる時間を持てることがどれほど貴重なものであったことか。あなた方に接するたびに思う。

執筆者紹介

高橋 秀雄

教育開発系准教授。専門領域は、数学。

『書名』 著者名（翻訳者名） 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『中世の秋』上・下巻 ホイジンガ著（堀越孝一） 中公文庫 1976年 1,620円
『封建社会』1・2巻 マルク・ブロック著（新村猛・他） みすず書房 1973-1977年 7,980円

ブックガイド目次へ

『悪について』

中島義道著／岩波新書

昨年、秋葉原で大量無差別殺人事件が起こり、多くの関心を集めたことは記憶に新しく、そのような「悪」について詳細な検討がなされた本と想像されるかも知れませんが、全く違います。著者はそのようなタイプの「悪」については、本書において（他書においてさえ）殆ど言及することはありません。著者が矛先を向けている「悪」は、平々凡々、公明正大、時には小心翼翼とした一般市民の中にこそあります。例えば、身体の不自由な人とか老人が横断歩道の前で戸惑っているとき、人知れず手を引いて道路の横断をサポートし、名のることなく立ち去るという行為の中に著者は「悪」を見出す。この本はそれがなぜ「悪」に通じるのかを詳細に解説しています。もし、それが「悪」ならば、何をしたら「悪」になるじゃないか、と言い返したいところですが、その通りです。“我々は「悪」を成すことなくしては、何事をも成し遂げることができない”ということになるようです。従って、自分の行為には「悪」が一滴もないと思っている人（すなわち一般市民）こそ告発され、糾弾されるべきであるとの主張が展開されていきます。“自分には「悪」はない”とまで断言できる人もまた居ないでしょうが、しかし、“自分が行っている行為には「悪」は絶対にない”と断言できそうなケースはあります。前述した横断歩道の例もそうです。“気をつけよう、だれかを傷つけていないか”とか“バスのお降りの際にはお忘れものにご注意下さい。”などの放送もそうです。しかしこれらの行為はすべて自己愛というフィルターを通っているものであり、そのため「悪」に直結するということになるようです。これらの考えは著者が専門とするカント哲学から導き出されたものであり、本書でも難解な用語が数多く用いられて読みにくさは否めませんが、さりとて専門家だけを対象としているわけではありません。私はこの本に赤線を引きながら2回ぐらい読みましたがまだ十分理解できているわけではなく曲解しているところがあるかも知れません。またあと数回は読まなくてはと思っています。

著者の中島義道さんですが電気通信大学教授で、カント哲学の研究者であると同時にその実践者（すなわち哲学者）でもあり、日々、一般市民の中の「悪」を告発し続ける「戦う哲学者」と見なされている人です。戦う相手が一般市民であり、かつ氏が告発する対象が大部分の市民には承認されているものも多いです。

氏の主張は一見常識と正反対となることが多く、このため本人に対する批判もネット上で見ることができます。私は、平成20年の夏ごろ氏の別の著作を大学の売店で求めてパラパラと読んでいくうちにその内容に驚倒し、芋づる式に10冊ぐらい読みました。そのうちの1冊がこの『悪について』です。出版されている本はいずれも一般市民を告発するという意味で首尾一貫しており、どれを読んでもいいのですが、ここでは『悪について』を挙げさせてもらいました。他の著作では意図的に（営業用の）爆笑・哄笑を混ぜるような場合もありますが、この本は岩波新書だけあって笑いは少なく、難解な部類に属します。私も一般市民ですが、一般市民である皆様に是非一読をお勧めします。なお、氏をまねて哲学者になることはけしてお勧めできません。

執筆者紹介

細山田得三

環境・建設系准教授。専門領域は、水工学、流体力学、沿岸海洋学、海岸工学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『悪について』 中島義道著 岩波新書 2005年 735円

[ブックガイド目次へ](#)

『古代からの伝言』

八木荘司著／角川文庫

『古代からの伝言』全7巻の表題は以下の通り：

- 1 日本建国
- 2 民族の雄飛
- 3 悠久の大和
- 4 日出ずる国
- 5 水漬くかばね
- 6 壬申の乱
- 7 我が国家成る

日本は現在地球上に存在する国家の中で最も古い国であるが、このことは高校までの日本史では教えてくれない。その建国にも膨大な物語があるが、それも学校では教えてくれない。学校の日本史では、縄文、弥生時代があって、卑弥呼がチラッと見えて、いつの間にか統一国家ができて聖徳太子が現れる。『古事記』、『日本書紀』には神話と建国の物語が書かれているが、学校では「記紀」の存在だけ教えて、内容については「禁断の書」のように扱う。挙げ句には、『日本書紀』は天武持統朝の正当性と権威を高めるために書かれたものだから内容は創作であるとか、偽書であるとまで言う場合もある。これは戦前の皇国史観への反動と敗戦および占領のトラウマから来る「自虐史観」によるところが大きいであろう。

『日本書紀』が書かれたのは今から1300年近く前である。1300年の長きにわたって我々の先祖は「価値のない書物」あるいは「偽書」を現在まで伝えてきたのであろうか。長いときを越えた自らの歴史書が存在するにもかかわらず、我々は他国の歴史書で自国の歴史を語らねばならないのだろうか。

『古代からの伝言』は、『日本書紀』が可能な限り誠実に書かれた歴史書である、という立場を第一に取り、最近の考古学的成果や中国の歴史書も参考に、邪馬台国の話や神武東征の話から始めて律令国家の成立まで（神話部分は含まれていない）の日本古代史を、小説仕立てで書いた「史伝」である。『日本書紀』そのものは図書館に行けば見ることはできるが、漢文と読み下し文と膨大な注釈から成っており、読んでみようと思うにはハードルが高すぎる。『古代からの伝言』は『日本書紀』に登場する歴史上の人物が小説の登場人物のように喋り行動しながら古

代史を紡いでいくので、古文、漢文読解の煩わしさに悩まされることなく歴史物語を読み進めていくことができる。

邪馬台国と大和朝廷、日本古代史をちょっとでもかじった人間なら、その関係を不思議に思い、調べてみると様々な説が錯綜していて迷路に入ってしまうが、本書ではある程度トータルに話が纏まっている。

「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙なきや。云々」隋書倭国伝に遺されている、隋の煬帝に聖徳太子が送ったとされる国書は、世界帝国隋の皇帝に、東アジアの片隅の小国の君主が送った、身の程知らずなほど超強気な手紙、とされることが多いが、それほど彼我に国力の差や意識の差があったのか、実はそうでもなかったのではないか、との指摘には目から鱗が落ちた。

今年は皇紀（初代神武天皇の即位を元年と数える暦）2669年であるとされる（従って皇紀元年は西暦紀元前660年）。初期の天皇の寿命が超人的なまでに長ずることと、紀元前660年の建国は、考古学的にはあり得ないとされることから、『日本書紀』が創作であるとする説の根拠の一つとなっているのであるが、本書では仮説を立てて論証し、根拠を持って神武天皇の即位を西暦紀元後181年としている。どのような論証を行っているかは本書を読んでみて欲しい。

海外に出ると、日本の歴史、日本の皇室の存在感の大きさに気づかされる。日本は、先進国の中で唯一、神話の時代から続く皇室を戴く国である。機会があれば、自国の建国の物語を誇りを持って語って良いと思う。

執筆者紹介

内田 希

物質・材料系准教授。専門領域は、無機化学、量子化学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『古代からの伝言』全7巻 八木荘司著 角川文庫 2007年 4,420円

ブックガイド目次へ

『日本沈没』第一部

小松左京著／小学館文庫

『日本沈没』第二部

小松左京、谷甲州著／小学館文庫

第一部は1970年代、所謂「高度経済成長期」の末期に書かれ、第二部は第一部から33年経つポストバブル時代に書かれている。

私は、第一部を札幌オリンピックの後、中学生の頃に読んだ。本当にベストセラーで、買いに行っても店頭には上巻が見あらず、仕方なく下巻から買ったことを覚えている。当時の最先端の地球物理学の知識を援用し、日本列島が数年という地球物理学的には極めて短期間でプレートごと日本海溝に引きずり込まれていく過程が記されており、「フォッサマグナが裂けていく」という台詞が印象的だった。SFが好きで、ハードSFを期待して読み進めた自分にとっては人間ドラマが多すぎちょっと当てが外れた気がしたが、それはまだ私が幼なかったからだろう。

今読むと第一部に登場する科学技術は、少々古くさく見えるかもしれない。しかし、当時は、人類が月に到達してまだ数年という時期であり、GPSもスーパーコンピュータも存在していなかったのだ（勿論、携帯電話、PC、インターネットも無い）。学生諸君にとっては、第一部を読むことによって、ご両親の若い頃の技術レベル、社会の雰囲気（1970年代は何だか社会が埃っぽかった）、世界情勢を知ると共に、この30年あまりの間の凄まじい技術の進歩を知る手掛かりとなるだろう。

第二部を読んだのは昨年。刊行から少し時間が経ってからであった。第一部のようなベストセラーにはならなかったようだが、第一部で日本列島の最後を看取った登場人物達のその後、国土を失って世界へ散った日本人たち、日本沈没にとどまらないその後の地球規模の変動、そしてラストシーン、は十分に読ませるものだった。第一部に比べると何となく暗い雰囲気を感じたのは、小松左京氏が原案で執筆したのが谷甲州氏だったからだろうか。

第二部において、世界に散った日本人はなお活力を失わず、分散国家として政府を維持し、地球シミュレータを開発して地球の未来に関する大規模シミュレーションを続け、そして驚愕の未来予測が…。となるのだが、これ以上はネタバレレ

になるので自分で読んで欲しい。読みながら、最近は少ないデータから全体像を復元するシミュレーション技術も発達しつつあるので、それを使えば作品中でのシミュレーションの精度も上がったろうにな、と思うのは、コンピュータ化学をやる人間のしょうもない感想か。

SFとして分類されるが、これは小松左京氏の「日本人論」として読んでも良いだろう。第一部、第二部共に日本の民族と歴史への愛惜の情の溢れる作品であり、もしこれを海外留学の前に読めば、背筋を伸ばして国際線の飛行機に乗り込む気になるだろうし、海外に長期滞在しているときに読んだら、胸が締め付けられるような気がして辺り構わず泣き出してしまうかもしれない。できれば、海外に出る前に読んで欲しい。

執筆者紹介

内田 希

物質・材料系准教授。専門領域は、無機化学、量子化学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『日本沈没 第1部』上・下巻 小松左京著 小学館文庫 2006年 1,200円

『日本沈没 第2部』上・下巻 小松左京、谷甲州著 小学館文庫 2008年
1,260円

ブックガイド目次へ

『源氏物語の女性たち』

瀬戸内寂聴著／NHK ライブラリー

『源氏に愛された女たち』

渡辺淳一著／集英社

『男だって子育て』

広岡守穂著／岩波新書

日本が誇る世界初の長編小説『源氏物語』は1008年に創作されて2008年11月に一千年を迎えます。高校・高専で古典が得意ではなかった本学の学生諸君にとっては紫式部の原文は苦手と思いますので、図書館にある谷崎潤一郎・与謝野晶子・瀬戸内寂聴・田辺聖子さんたちが翻訳された美しい現代語版を是非一読される事をお薦めします。源氏物語はよく知られています様に、絶世の貴公子光源氏の愛と栄華の物語（第1帖「桐壺」～第41帖「幻」）、そしてその息子の薫をめぐる匂宮と宇治3姉妹の愛の物語（第42帖「匂の宮」～第54帖「夢の浮橋」）の全54帖にわたる大長編ロマンですが、その全編を通じて作者が描いているのは、人生と男女の愛です。そしてそれは現代においてもそのまま通じるほどに普遍性を持った課題なのです。そのため諸大家達の現代語訳も、その人その人なりの解釈が見事に織込まれており、読み比べてみると面白いかと思います。

ただ今回ご紹介する三冊の本は、源氏物語の現代語訳そのものではなく、それに関連して現在の男女の恋愛と人としての生き方を考える上で大変参考になると思われる本です。

源氏物語の解説書はこれまで恐らく数十カ国語で数千冊が出版されていると思いますが、特に豊かな恋愛経験に基づき、透徹した人生観をにじませるものとして尼僧であられる瀬戸内寂聴さんの『源氏物語の女性たち』と、医師であられる渡辺淳一さんの『源氏に愛された女たち』を薦めたいと考えます。推薦者のくどくどしい説明よりは、これらの本からの抜書きを以下に掲げますので皆さんは自分で考えてみてください。

「源氏には常に仰ぎ見るような、自分より優れた女性が必要だった。p 62」「相手の女に恥をかかせるようなことはせず、どの女にも公平にやさしくして、女から怨みをかうようなことをしてはならない。p 65」「女が恋物語を好きなのは、成就

した恋のハッピーエンドに拍手するのではなく、恋に心が傷つき血を流す哀しさと美しさ感動するからです。遊びの浮気や肉欲だけの情事では心は傷つきません。本当の恋をしたとたん、人は喜びと同時に悲哀を味わい苦悩が始まるのです。p 89」「自分のように相当な身分の者が長年たった一人の妻を守って、どんなに世間の嗤い者になっていることか。そんな融通のきかない野暮な男に大事にされても自慢にもならないだろう。たくさんの夫の女の中で一番特別に扱われてこそ女冥利というものだろうに。p 170」

一瀬戸内寂聴『源氏物語の女性たち』NHKライブラリー 1997

「近代文明がこれだけ進んだというのに、男と女は相変わらずくだらぬ痴話喧嘩を繰り返し、少しの進歩もしていない。p 13」「男女のことはあくまでも知識ではなく、体験や実感をとうしてしか知りえない。p 16」「結婚は就職のようなもので、本当に好きな人との恋愛はその後でおこなう。p 55」「拒否することで存在を示す。それは確かに一時的には有効だが、所詮、生身の男と女がぶつかりあう、恋の王道における勝者とはなりえない。p 93」「性においてはことさらに構えたり、気取ることなど不要である。p 104」「セックスは思想や社会性などとは関係なく、互いの肌と肌が触れあう、極めて人間的な行為だと言うことである。p 105」「総ての恋は、最後にはメモリーとしてだけ残る。p 147」

一渡辺淳一『源氏に愛された女たち』集英社 1999

前述しましたが、源氏物語の人生観や恋愛観は現代に生きる人々にも強く影響を与えています。特にセクハラ・DV・離婚の増加等、女性の社会進出につれて様々な社会問題が明らかになって来ていますが、このような厳しい時代だからこそ、もう一度日本人が千年をかけて追求して来た、まさに男と女性がともに手を携えて幸せになろうとする「男女共同参画社会」を真剣に考えてみる必要があるのではないのでしょうか？その意味で、広岡守穂『男だって子育て』は、これから恋愛・結婚・子育てをする諸君達にとって考える材料を与えてくれる名著と思います。以下に若干の抜書きを示しますので、興味を持たれたら是非図書館で借りて読んでみられるとよいと考えます。

「恋愛や結婚と仕事や自活する能力とは別のものである。本当に愛する異性がいつ現われるかはだれにも分からない。学生時代に将来の人生の伴侶と恋に落ちたからといって、だれにも非難することはできない。愛し合っているもの同志が同居したり結婚したりしようとするのは自然なことである。p 4」「家事はたしかにむくわれることのない仕事である。家事はむしろ奉仕である。家族の生活をささえる無償の営みである。そしてそういう行為はなによりも自分自身の心をなごやかにし、豊かにする。しかし奉仕が人の心にうるおいを与えるのは、あくまでもそれが自発的に行われる時にだけである。p 9」「性差別はなぜ許されないか。それは性を理由にして「自己実現」の機会を奪ってはならないからだ。p 81」「管理や強制は責任意識が芽生えるのを妨げるだけだ。自由には責任が伴う。いや責任ある人間に成長するためには、まず自由でなければならない。責任意識は自尊心の産物である。相手から自由を取り上げておいて自尊心をもてといっても無理である。p 163」「家事、老父母との団らん、子育て、重荷どころか、そこには尽きぬ喜びがある。だから人間にはそのすべてを享受する権利がある。p 191」

—広岡守穂『男だって子育て』岩波新書 1990

執筆者紹介

福本 一朗

生物系教授。医師。専門領域は、医用生体工学、臨床工学、人間工学、プライマリアケア。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『源氏物語の女性たち』瀬戸内寂聴著 NHKライブラリー 1997年 品切・絶版
『源氏に愛された女たち』渡辺淳一著 集英社文庫 2002年 540円
『男だって子育て』広岡守穂著 岩波新書 1990年 品切・絶版

ブックガイド目次へ

『詩歌三国志』

松浦友久／新潮選書

学生の頃、恩師から言われた言葉で今もよく覚えているものがあります。「人は、若い時には科学に志し、齢を重ねると歴史に想いを馳せる」。当時は、漠然と聞いていたのですが、その年齢になると“なるほど”と納得するようになります。

私より年配の方ならば、三国志と言うだけで全てが通じるのではないかと思います。若い頃に、吉川英治の三国志を読み耽ったものです。現在では、北方謙三の三国志が文庫本で書店に並んでいますので、若い人にも知られているかもしれませんが、ローマ帝国の衰亡に関する歴史書は世界で最大のベストセラーと思いますが、日本においては、三国志が古代から教養人の必読書であったと思います。

三国志の時代は紀元180年頃から280年頃で、三国とは、当時興隆していた中国大陸での魏、呉、蜀です。その興亡を記録した歴史家陳寿の筆になるものが『三国志』と呼ばれ、以来、数多くの作者が三国志を手掛けています。ウィキペディアによれば、760年に成立した『藤氏家伝』大織冠伝（藤原鎌足についての伝記）に関連する記述があるとのことなので、すでに日本にも伝わっていたと思われます。

ここで紹介する本は、詩歌の分野で扱われた三国志の中で、土井晩翠（1871-1952）の「星落秋風五丈原」を取り上げ、その背景にある唐代の詩人、李白（701-762）や杜甫（712-770）等の漢詩をからめて1冊の書物にまとめ、解説したものです。晩翠の詩の主題は、云わずと知れた蜀の丞相“諸葛亮（孔明）”の生涯です。晩翠はこの長編詩を28歳の時に発表しているとのことでした。漢詩に通じ、三国志を愛して詩歌に結晶させた才能には、ただただ畏れ入るしかありません。

詩の醍醐味は言葉の響き、リズムとイメージを膨らませる言葉使いです。意味が多少分らなくても、響きがよくリズムカルな句は右脳に溶け込みます。短い表現でも、瞬時に情景が目に見え、イメージが膨らんで行きます。私もナツメロ世代に入っていますが、昔流行ったメロディを聴くと当時の気分が瞬時に甦ってきます。詩もそれと同じです。

「星落秋風五丈原」は7章、44節で計349行に及ぶ長編詩です。内容は、数巻に及ぶ物語を凝縮していて、以下の句で幕が開きます。

キザン 祁山悲秋の風更けて	(キザンヒシュウノカゼフケテ)
ジンウン 陣雲暗し五丈原	(ジンウンクラシゴジョウゲン)
レイロ アヤ 零露の文は繁くして	(レイロノアヤハシゲクシテ)
草枯れ馬は肥ゆれども	(クサカレウマハコユレドモ)
蜀軍の旗光無く	(ショクゲンノハタヒカリナク)
コカク 鼓角の音も今しずか	(コカクノオトモイマシズカ)
ジョウショウ 丞相病あつまりき	(ジョウショウヤマイアツカリキ)

何やら悲愴なイメージです。実は、諸葛亮（孔明）の臨終の場面から始まります。序章の52行は7つの節で構成されていますが、各節の最後は『丞相病あつまりき』の句の繰り返しで切迫感を出しています。孔明は臨終を魏との戦いの場（五丈原）で迎えています。蜀軍の状況描写から始まり、孔明の来し方が走馬灯のように回り始める序章となっています。第7節の最後には、孔明の偉大さと比較する人物として

カンチュウ 管仲去りて九百年	(カンチュウサリテキュウヒャクネン)
ガッキ 樂毅滅びて四百年	(ガッキホロビテヨンヒャクネン)
タレ 誰か王者の治を思ふ	(タレカオウジャノチヲオモウ)

と中国では歴史上の名宰相管仲や名将樂毅が出てきます。実は、名前だけは聞いたことがあったのですが、両名の人物像が分からなかったので、早速、書店でそれぞれを扱った小説を買って読みました。

第2章は、青年孔明が蜀王劉備玄德から三顧の礼で迎えられる場面の描写です。

ウセンカンキン カ 羽扇綸巾風輕ろき	(ウセンカンキンカゼカロキ)
姿は替へで立ちいづる	(スガタハカエデタチイヅル)
ソウロ 草廬あしたのぬしやたれ	(ソウロアシタノヌシヤタレ)

まさに、若き孔明が颯爽として旧居を後にする姿が目には浮かびます。この章以降は経時的にストーリーが進みます。孔明が鬼神の智謀を発揮し、小説でも名場面となっている「赤壁の戦い」、「出師の表」などが格調高く吟じられ、蜀の興隆のために捧げた赤誠の遍歴を辿って、再び五丈原の戦場に戻ってきます。そして、終章の最後の節は、詩人晩翠が孔明に捧げる万感の想いとして、以下のように詠いあげられています。

高き尊きたぐひなき	(タカキトウトキタグイナキ)
「悲運」 ^{シヤ} を君よ天に謝せ、	(ヒウンラキミヨテンニシャセ)
青史の照らし見るところ	(セイシノテラシミルトコロ)
管仲 ^{カンチュウガツキ} 樂毅たそや彼、	(カンチュウガツキタソヤカレ)
伊呂 ^{イロ} の伯仲眺むれば	(イロノハクチュウナガムレバ)
「萬古 ^{バンコ} の霄 ^{ソラ} の一羽毛」	(バンコノソラノイチウモウ)
千仞 ^{センジンカク} 翔る鳳 ^{ホウ} の影、	(センジンカクルホウノカゲ)
草廬 ^{ソウロ} にありて龍と臥し	(ソウロニアリテリュウトフシ)
四海に出でて龍と飛ぶ	(シカイニイデテリュウトブ)
千載の末今も尚	(センザイノスエイマモナオ)
名はかんばしき諸葛亮。	(ナハカンバシキショカツリョウ)

執筆者紹介

丸山 久一

本学理事・副学長（研究・入試・学生担当）。専門領域は、コンクリート工学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『詩歌三国志』 松浦友久著 新潮社 1998年 1,260円

ブックガイド目次へ

一日中本を読んでいてもいい学部に進学したい、と高校生の頃、苦手な数学や物理の勉強をするたびに思っていた。念願かなって文学部に入学、本を読む日々が続く。周囲にも読書が嫌いという人は皆無だった。ところが世の中そんな人種ばかりではないと、結婚して少し驚いた。夫は工学部出身で、本というものを、とりわけ小説を読まないのである。向こうも驚いていたらしい。なぜ絵空事に泣いたり笑ったりするのか、なぜ一度読み終えた本を再び読むのか、と。おもしろい小説を読むと、力が湧いてくる気がする。滋養のある食べ物で身体が回復するのも似ているし、薬効成分の豊かな温泉に入るようでもある。ただし、万人に効く小説はない。どの小説をおもしろいと思うか、人それぞれであるから。小説を読む妻を異星人のように見ていた夫にも、おもしろいと思う小説が現れた。その本を手はじめに、私にとっての常備薬をいくつか紹介したい。この稿を読んだ方が1冊でも効き目を感じる本があれば紹介者にとって大きな喜びである。

『夜のピクニック』新潮社 『上と外』幻冬舎 恩田陸

おもしろいと夫が言ったのは『夜のピクニック』という小説だった。主人公は高校生、全校で一昼夜歩き続ける「歩行祭」という学校行事を背景に物語は進行する。よく晴れた秋の日の乾いた風、夕暮れの光る空、露で湿った夜道を歩く高校生たちの会話と心の中。夫と私は同窓生である。母校にこんな行事はなかった。にもかかわらず、読んでいる最中に何度も高校時代と同じ匂いの空気を感じた。平明な文章で読みやすい、第2回本屋大賞受賞作である。『上と外』は『夜のピクニック』とまた違ったタイプの作品である。ただ共通するのは主人公（こちらは中学生）がよく歩き、足に豆を作らないための方法を熟知していること。この小説の私にとっての魅力は、金型工場の技術者であり経営者である主人公の祖父が、ものづくりについて語っている箇所である。工学という知らない世界を垣間見た気分になる。東工大の金属学研究室の教授も登場し、工学的な雰囲気を増幅してくれる。そんな細部には興味のない人も、ダイナミックかつ精緻な話の展開には一気に引き込まれるのではないだろうか。

『風が強く吹いている』 三浦しをん 新潮社

運動は苦手だが、不思議と走ることについての作品に興味がある。村上春樹のマラソンについてのエッセイしかり、佐藤多佳子の『一瞬の風になれ』しかり、良い作品が多い。その中でも一等好きなのが、『風が強く吹いている』である。都内のぼろアパートに住んでいる10人の大学生（うち8人は長距離初心者）が箱根駅伝を目指す話で、その設定自体は全くの絵空事なのに不思議とリアリティがある。入学式前の4月の夜から始まり、春の明るい朝の町を、夏合宿の白樺湖を、秋の予選会を、そして正月の箱根を走る10人の言動の一つ一つが心に鮮やかに刻み込まれ、読んでいる間も読み終わった時も、しあわせな気持ちが湧き上がる小説である。

『坂上の雲』 司馬遼太郎 文芸春秋

日露戦争でロシア軍のコサック騎兵を破った陸軍の秋山好古、その弟で日本海海戦の参謀として「天気晴朗なれども浪高し」を起草した海軍の秋山真之、真之の友人で俳句に近代の光をあてた文学者正岡子規の3人が主人公である。徳川幕府が瓦解した後、全国の無数の若者が志を高く日本という国を支えてゆく。その中で作者はこの3人に焦点を絞り、日本とは何か、日本人とは何か、国家とは何かについて、膨大な史料を用い描き出している。『坂上の雲』だけではない。司馬作品の根底にはどれも日本について、日本人について明らかにしたいという思いが流れている。技術者として社会に旅立つ前に、是非一読を薦めたい作家の一人である。

『青年のための読書クラブ』 桜庭一樹 新潮社

女子高や女子大などの女の園には一度も足を踏み入れたことがなく、どんな世界なのかと思っていた。この小説を読めばある程度の疑似体験ができるのではないだろうか。伝統あるミッション系女子高が物語の舞台である。その閉ざされた乙女の楽園で、決して正史には記されない影の部分を読書クラブの部員がクラブ誌に綴っていく。華やかな園の片隅で埃にまみれて毎日本を読み暮らす彼女らは

マイノリティだが、変人の少数派ゆえに書き残せるものがあるという設定が読書好きには小気味よい。安保の頃の昭和から平成の未来まで、更に学園の創設者であるフランス人修道女のいた100年前のパリについて描いている縦の時間軸がしっかりとしており、ゆるぎない構成の小説となっている。

『ゲド戦記』 アーシュラ・K・ル＝グウィン作 清水真砂子訳 岩波書店

2006年に公開されたジブリ映画の「ゲド戦記」は観ていない。活字から思い描いてきた世界を壊されるのが怖かったからである。映画は3巻目の『さいはての島へ』を中心に描いているそうだが、小説は外伝も含めて全6巻あり、初めから読み進めてゆくと広大な物語世界を感じることができる。魔法を教える学院にゲドが入学する頃から話が始まるが、同様な設定でありながら、ハリー・ポッターとはかなり違う。ごつごつとした岩山を一步步登ってゆくようなファンタジー作品である。

古今東西あまたの作家によって無数の本が記されてきた。書店でも図書館でも、書架の前を散策して、気に入った本があれば手にとってみよう。長いようで短い学生時代、心を動かす本に1冊でも多く出会えますように。

執筆者紹介

安原 明子

本学学術情報課学術資料係長。担当事務は、図書館資料の受入、管理、分類等。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『上と外』 上・下巻 恩田陸著 幻冬舎文庫 2007年 1,400円

『夜のピクニック』 恩田陸著 新潮文庫 2006年 660円

『風が強く吹いている』 三浦しをん著 新潮社 2006年 1,890円

『坂上の雲』 全8巻 司馬遼太郎著 文春文庫 1999年 5,360円

『青年のための読書クラブ』 桜庭一樹著 新潮社 2007年 1,470円

『ゲド戦記』 全6巻 アーシュラ・K・ル＝グウィン著（清水真砂子） 岩波少年文庫 2009年 4,830円

[ブックガイド目次へ](#)

『自壊する帝国』

佐藤優著／新潮文庫

『資本主義はなぜ自壊したのかー日本再生への提言』

中谷巖著／集英社インターナショナル

まずクイズを一つ。今年はベルリンの壁崩壊20周年だが、この歴史的イベントから20年間で欧州を中心にいくつの国家が消滅し、誕生したであろうか。（答えは註1参照）。

ノンキャリアの外交官で、現在起訴休職中の佐藤優が『自壊する帝国』（新潮文庫）の中で描いたのは、モスクワ日本大使館の三等書記官としてつぶさに見た、悪の帝国（レーガン元米大統領はこう呼んでいた）ソ連の崩壊に至る過程とそれにより誕生したロシアの混乱の模様だ。

佐藤は、当初、通っていたモスクワ大学で友だちとなったラトビア人サーシャの導きで、陰謀が渦巻く政界、官界に友人の輪を広げていくが、そのうち多くの友人はソ連の将来に悲観していた。

例えば、守旧派の共産党幹部、シュベードは1990年秋（ソ連崩壊の約1年前）、

「ゴルバチョフ（註2）はカスだ。エリツィン（註3）は権力の亡者だ。
この国は腐り切っている。国民も腐り切っている。俺も腐っている」

と悪酔いして佐藤に絶望感をぶちまける。

筆者（村上）は、90年の夏休みにモスクワ、レニングラード（現在はサンクトペテルブルク）を訪れた際、レストランに入っても野菜がほとんど出ないことに示される深刻な食糧不足や、道端で靴を片足用だけ平気で売っていることから推測される日用品不足、そしてルーブルが暴落し、市民の間では通貨の役目を米国の紙巻タバコ「マールボロ」赤ラベルが代わりに果たしている状況をみて、ソ連は末期症状を呈していると痛感した。ソ連の崩壊は91年12月末。筆者はそれに先立つ同月第1週にはオランダのマーストリヒトで3日間にわたって開かれた欧州共同体（EC）首脳会議取材していたが、会議の主要議題は欧州統合と並んで、対ソ支援だった。ソ連は消え去り、ロシアをはじめとする12カ国で構成する独立国家共同体（CIS）が誕生したが、その当時、ECは12カ国でより緊密な統合を目

指しており、国家の崩壊と「統合推進による国家を超えることの模索」という全く逆のベクトルが欧州で作用している状況が印象的だった。ソ連の崩壊は「権力は腐敗しがちであり、絶対権力は絶対的に腐敗する」という英国の歴史家アクトン卿の金言を地でいったようなものだ。

『自壊する帝國』は政治など硬い話ばかりではない。ウオトカの正しい飲み方、ロシア宮廷料理の微細にわたる説明、にわかには信じがたいロシア人の性生活と肥満の関係など興味深い話題も満載で、エンタテインメント的色彩も濃い。本書は大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した。ところで、佐藤が外交官としての経験に基づいて語っているインテリジェンス（情報、諜報）論はKGBやCIA（註4）を想起させ、筆者は余り興味がない。

共通キーワード自壊で強引に結びつけたもう1冊が中谷巖著『資本主義はなぜ自壊したのかー日本再生への提言』（集英社インターナショナル）だ。佐藤の著作が「（ソ連）共産主義の死」を描いたのに対し、中谷の本は（米国型グローバル）資本主義の終焉を論じてみせたとも言えるだろう。後者は、小渕内閣時代、経済戦略会議の議長代理を務め、新自由主義に基づく改革推進の旗手であった中谷が、2008年の世界金融危機勃発による同時不況に直面して、自らの過ちを認める懺悔の書だ。09年1月にNHK総合テレビのニュースウオッチ9で紹介され、話題となった。中谷は雇用問題などで市民の連帯の必要性を強調していた。序文で、

グローバル資本主義は、世界経済活性化の切り札であると同時に、世界経済の不安定化、所得や富の格差拡大、地球環境破壊など、人間社会にさまざまな負の効果をもたらす主犯人でもある。そして、グローバル資本が自由を獲得すればするほど、この傾向は助長される。

（中略）

一時、日本を風靡した改革なくして成長なしというスローガンは、財政投融资制度にくさびを打ち込むなど、大きな成果を上げたが、他方、新

自由主義の行き過ぎから来る日本社会の劣化をもたらしたように思われる。例えば、この20年間に於ける貧困の急激な上昇は日本社会にさまざまな歪みをもたらした。あるいは、救急難民や異常犯罪の増加もその負の効果かもしれない。

と述べている。新自由主義は、1980年にレーガンが米大統領に就任して以来、西側資本主義世界で主流となったイデオロギーだ。それを周回後れで採用した日本ではついこの間まで政官財学の各界で幅を利かせていたように思える。また、異常犯罪の増加についてはおそらく2008年6月の秋葉原無差別殺傷事件を念頭に置いたのであろう。

そして中谷は終章で、

本書のタイトル『資本主義はなぜ自壊したか』は過去形の表現になっているが、もちろん、資本主義が全面的に自壊してしまったわけではない。しかし、自由を満喫したグローバル資本が世界経済を不安定化させ、所得格差拡大で不幸な人々を大量に生産し、また、地球環境をもはや修復不可能に近いところまで汚染してしまったという意味で、資本主義の自壊作用はすでに始まっているというべきである。

と強調する。

やや歯切れは悪いが、中谷の言わんとするところは十分伝わるはずだ。もちろん、自壊するとすれば、資本主義というイデオロギーではなく、資本主義システムであるのは言うまでもない。中谷の主張に対しては、資本主義自体を否定することへの反発（前述のNHKニュース番組での勉強会参加者のコメント）なども出ている。



日本の政治の閉塞状況が続き、金融・経済危機で再び「就職氷河期が訪れよう」としている現在、技大に入学する皆さんには、近過去の歴史と現在の政治社会状況をどのようにとらえるのか、広くアンテナを張って欲しいと考え2冊を選んだ。

- 註1) 消滅した国 ソ連、東ドイツ、ユーゴスラビア連邦、チェコスロバキア
誕生した国 ロシアやウクライナなどCIS12カ国、ドイツ（西ドイツを承継）、
チェコ、スロバキア、ラトビア、リトアニア、エストニア、スロベニア、クロアチア、
ボスニアヘルツェゴビナ、マケドニア、モンテネグロ、セルビア、コソボ、グルジア
- 註2) 当時のソ連大統領
- 註3) ソ連崩壊後のロシア初代大統領
- 註4) KGBはソ連時代の秘密警察、CIAは米中央情報局

執筆者紹介

村上 直久

経営情報系准教授。専門領域は、国際関係論、メディア英語論。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『自壊する帝国』 佐藤優著 新潮文庫 2008年 820円

『資本主義はなぜ自壊したのか「日本」再生への提言』 中谷巖著 集英社インターナショナル 2008年 1,785円

ブックガイド目次へ

『原初的な未来の建築』

藤本壮介著／INAX 出版

この本は建築家である著者がこれまで施行した建築物の紹介を通じて、建築に対する彼の思想を紹介した本である。英語と日本語の二言語で書かれており、出版から1年足らずで既に2版3刷されたちょっとしたベストセラーである。彼の建てる建築物は一般の建築物とは明らかに異なる。そこには一つの明確な挑戦－境界への挑戦－が感じられる。それはあるときは空間と物体の境界であり、家と町との境界であり、自然と人工物の境界であるのだが、そのあたりをデジタルに切り分けてしまう「通常の」建築から可能な限り曖昧に混在する建築を試みる。彼はそれを「弱い建築」という。

一つの好例がHOUSE-Nと呼ばれる建築物である。三層の四角い穴だらけの白い箱による入れ子型構造をなしているこの家はどこからがソトで、どこからがウチかが一見ただけではわからない。実際は一番奥の箱にリビングとダイニング、真ん中の箱にキッチン、お風呂、寝室などがあり、最後の箱は庭である。そして箱の中の木は近々生い茂り、穴からあふれ出ることになっている（写真参照*）。

彼は著書の中で次のように語っている。

外部は建築ではない。内部も建築ではない。外部と内部がどのように接続されているか、が建築である。

壁を立てることは、空間を0か1かにわけてしまう。

でも本当は、空間には、0と1の間のグラデーションの豊かさがあるはずだ。

こうした記述は、建築に限らず、さまざまな分野とつながるのではないだろうか。私がこの本を読んで真っ先に思い出したのは、学生時代に学んだ認知言語学である。認知言語学と聞いてイメージが浮かばない人も多いと思うが、ルビンの壺を知っている人は多いだろう。正面の白い部分を見れば壺にみえるが、黒い部分を見れば人が向かい合っているように見える。通常人間は中心にあるものを図と見て、周辺にあるものを地と見ようとする。ルビンの壺はこの認知傾向を利用した図だ。認知言語学はこのように何を地と見て、何



を図と見ようとするか、そういった自然な人間の認知のありかたは、図形に限らず、言語表現にも反映されているという発想である。彼の建築は、こうしたルビンの壺のような、図と地が曖昧なバランスで存在する建築のように思える。もちろんこうしたことも、本書を読んで感じることはあるのだが、認知言語学を思い出したのは、むしろ別の理由からである。

言語学には二つの立場があるといわれている。それは、言語を人間の外側にあるととらえる立場（生成文法等）と、言語は人間の内側にあるととらえる立場（認知言語学）、である。前者の立場に立つ人は、言語には自然法則のような普遍的な法則のようなものがあり、その法則の表層的な現れとして各国語のバリエーションがあると考え、そしてその普遍的な法則を可能なかぎり追求しようとする。そこには当然説明できない現象が存在するが、普遍的な法則にあわないものは例外として排除しようとする。後者の立場に立つ人は、言葉の製造を司る人間の内側（認知機能）をできるだけ明らかにし、あらゆる言語現象を認知のあり方に基づいて説明しようとする。しかし、その分析は法則性を追及する立場の人間からはいささか周辺的で、一貫性を欠き、説明も「お絵かき」のように見える。（今はどうか知らないが）お互いの学問的立場は対立している様子であった。

私自身は、言語は人間のウチとソトのどちらでもなく、あえていえば境界にあると思っている。その根拠を示すことは紙面と能力の問題で割愛するが、大事なことはそうしたウチかソトかのどちらかを前提として議論するのではなく、曖昧な境界性を有するものとして率直に対峙することであり、その境界に対する感受性は、どの分野でも普遍的な重要性を持っているのではないか、ということである。

この本の著者は建築を通してそうしたウチとソトの境界に意欲的に向き合っている。彼の建築が多数写真で紹介されているので、写真集のように本を見ることが楽しみの一つだが、書かれていることも非常に示唆的である。彼は間違いなく境界領域に対する稀有な感受性を有する建築家である。作品を通じて実現しようとするウチとソトの境界の広がり、豊かさは、決して建築にとどまることなく、いろいろな研究分野、あるいは生き方に心地よいインスピレーションを与えてく

れるだろう。

(*) [http://www.iwan.com/photo House N Sou Fujimoto.php?
plaat=House-N-Fujimoto-4267.jpg](http://www.iwan.com/photo/House%20N%20Sou%20Fujimoto.php?plaat=House-N-Fujimoto-4267.jpg)

執筆者紹介

松田真希子

教育開発系講師。専門領域は、日本語教育、留学生教育、異文化間コミュニケーション。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『藤本壮介 原初的な未来の建築』藤本壮介・他著 INAX出版 2008年 1,890円

ブックガイド目次へ

『凡事徹底』

鍵山秀三郎著／致知出版社

皆さんの中にも掃除が苦手、嫌いな人も多いと思います。かくいう私も掃除が大の苦手です。この本は、鍵山秀三郎というイエローハットの元社長が掃除について執筆したものです。しかし、掃除の方法について書かれたものではなく掃除という行動（凡事）を通じて人間の生き方、会社のあり方まで掘り下げ、簡単な人間哲学書となっています。著者は、整理、整頓、清潔をモットーに道路や公衆便所などの清掃活動を行い、要望があれば掃除の研修を実施しながらイエローハットという会社経営に手腕を振るわれた社長としても有名です。企業トップが誰よりも早く出勤、便器を素手で磨いて社員に使わせる、しかも三十年間、一日も休まず続けているなど、想定外の行動がメディアに取り上げられたこともありました。

掃除という一見簡単なこと、単純なことを極めていくこと、やれば誰にでもできることを徹底して行い、その中で差をつけていくことは大学生活の勉学や研究活動と大変似ていると実感いたしました。誰にでも出来ることをやっていたって、この競争社会の中で勝ち抜くことはできない、と一見矛盾しているように考えがちですが、この本の中にその答えがあります。著者は、平凡なことを非凡に努め、微差、僅差の積み重ねが大差となると説いています。

また、掃除という行為自体は単純であり「打算があったら続かない」と著者は言います。現代は、何かをやればすぐに見返りが欲しい、これをやったらどうしてくれるというという打算を持って行動する人が多いようですが、打算やすぐの見返りを求めず、続けることが大事だと思います。勉強でも直ぐに答えが分かる問題、研究では直ぐに結果が出る実験と考えがちですが、大学時代に何年もかけて研究する題材としては、直ぐに結果が出る課題が必ずしも良いとは限りません。私は学生時代は自分の課題を自分で決めて考え抜いて仮説を立て、それを検証する方法を考える。その実践と方法を習得すれば、華々しい成果が上がりなくても十分だと考えています。その際には、必ずしも自分の思った研究テーマ、研究手法で研究を実施できるとは限りません。思った方法で実践出来ない方が多いかもしれません。このようなある制約条件化で自分のベストを尽くすことも工学や技学では大変重要です。

本書の中で、掃除を行っているときに悪事を考える人はいないという件がありますが、自分を振り返ってみても掃除をしているときには不純なことは頭に浮かびません。本当に一生懸命に掃除をしているときは一心不乱に掃除をしています。これは、勉強や実験に集中し没頭しているときと似ています。毎日掃除をすることでそのような状態を作り上げる鍛錬をしていると考えることもできます。

著者は、本書の他にも同様な書籍を出版しており、どれを読まれても良いと思います。本書は口語体で書かれており、著者が読者に語りかけるように書かれているため読みやすくなっています。数時間で一気に読めてしまう本ですので、これから大学生活を充実したものにしたいと考えている人、自分の興味のある研究テーマについて深く掘り下げたいと考えている人にお勧めできる一冊です。

執筆者紹介

姫野 修司

環境・建設系准教授。専門領域は、環境工学、化学工学、分析化学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『凡事徹底 平凡を非凡に努める』 鍵山秀三郎著 致知出版社 1994年 1,050円

[ブックガイド目次へ](#)

『泥の河・蛍川・道頓堀川』

宮本輝著／ちくま文庫

『とり残されて』

宮部みゆき著／文春文庫

『まだ人間じゃない』

フィリップ・K・ディック著／ハヤカワ文庫 SF

10代後半から20代初めにかけて、凡そ小説と名のつくものは読まなかった。理系の勉強には関係ないものだと思っていた。研究室に入って、卒論に苦勞した。理系の方が文系よりも文章を書かねばいけないらしいと気がついた。何か読んで言葉を勉強しようと思った。

ふと手にしたのが、宮本輝の「泥の河」「蛍川」「道頓堀川」のいわゆる川三部作である。泥の河の冒頭、荷物を曳いた馬が必死になって太鼓橋を上ろうとするが、力尽きて後ずさりして御者を轢いてしまうシーンを鮮烈に思い出す。蛍川は、少年達の周りを、見渡す限り無数の蛍が乱舞するのが美しい。青年になって大阪に戻ると、生活の背景には道頓堀川。読者一人一人に映画のワンシーンの様な印象を残す物語小説である。川三部作は、ちくま文庫から一冊にまとめられて出版されている。

易しい短い言葉を連ねていて簡単そうで、真似出来ないのが宮本輝の小説の凄いところである。同じく言葉が易しい現代の物語作家が宮部みゆきである。最初に知ったのは、文芸春秋の対談記事であった。小説が書けなくなって精神科の診断を受けたら、一ヶ月休みなさいとのこと。暇だから、ゲームを始めたらはまった、という内容であった。が内容より驚いたのが、「ミヤベ」と自分のことを書くこと。「何だこの軽い作家は」と半分馬鹿にしながら、短編小説を手にした。

読んだ瞬間驚いた。そこには「軽さ」は微塵も無かった。決して緻密では無いが、生き生きとした表現があった。ミステリーから時代小説まで幅広い作家だが、ここでは、短編集『とり残されて』から一作紹介する。

「たった一人」は、時空の歪によって巡り合った男女が、歪の消滅によって二度と逢えなくなる切ない小説である。時空の歪の消滅とともに、恋した男性は元々存在しなかったことになり、記憶も失われる筈である。が、主人公の女性は、忘れぬ人に逢ったという思いを残した。お互いが恋しながら、しかし、二度と逢

うことが出来ない生き別れ。学生の皆さんはこれから何度か体験するのも知れない。それもまた、人としての成長の過程なのだろう。

翻訳物は、日本語の美しさを学ぶのは難しいが、優れた物語は数多くある。SFに分類されるが、フィリップ・K・ディックの小説が面白い。バーチャルリアリティという言葉が一昔前にはやったが、ディックの小説は遥かその上をいつている。バーチャルリアリティは、存在しないものが本物らしく見える、つまり、見ている人は現実でないことを知っている。一方、ディックの小説は、「自分が住んでいる世界は本物だと思っていた。がある時、それは存在しない虚の世界だと気がつく」というもの。現実の不確かさ、不安定さを描き出す。地下室でジオラマを作っていた夫が、ある日、ジオラマの住人になってしまい、二度と地下室から戻ることのなかった「小さな町」（短編集『まだ人間じゃない』に所収）はその一つ。読んだ後、ゾクとした恐怖を感じる。読後が何とも不安な気分になるので、気持ちが落ち着いている時に読むのをオススメする。

三氏の作品は、共に幾つかが映画化されている。読んだ時のイメージが、映像で十分表現されているかどうか。一度ゆっくり観てみたい。

執筆者紹介

木村 悟隆

生物系准教授。専門領域は、高分子物性、天然由来分子の液晶形成挙動、高分子の固体NMR。

『書名』 著者名（翻訳者名） 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『泥の河 蛍川 道頓堀川 川三部作』 宮本輝著 ちくま文庫 1986年 840円
『とり残されて』 宮部みゆき著 文春文庫 1995年 570円
『まだ人間じゃない』 フィリップ・K・ディック著（浅倉久志） ハヤカワ文庫
2008年 777円

ブックガイド目次へ

『遠き落日』

渡辺淳一著／角川文庫

誰でも小学生のときに、図書館にある野口英世の伝記を手にしたことと思う。小学生の純粋な心に偉大な科学者としての野口英世が突き刺さり、そして将来の科学者を夢見た人も少なからずいるだろう。かくいう私もそのうちの一人で、感化の度合いは人一倍強かったように思う。通っていた神奈川県海老名市立大谷小学校の図書室に並べてあった伝記シリーズの中で、もっとも回数多く読み返していたのが、野口英世であった。

野口英世は1876年に猪苗代湖畔で生まれ、小さい頃に負った手の火傷を気にしながらも努力し医師となり、そしてアメリカに渡り医学の研究で立派な業績を挙げ、さらに黄熱病の解明のためにアフリカに飛び、最後は自らが黄熱病におかされてアクラの地にて果てる。このような一生は、小学生の純粋な心を刺激するのに十分すぎるほどの伝記の題材となった。

ここで紹介する渡辺淳一著の『遠き落日』は、大人の目でみた、大人のための野口英世の伝記といってよい。野口の人生のすべてについて、綿密な調査により描かれている。純粋な小学生が小学校の図書室にある子ども向けの伝記を読んだ直後にこの『遠き落日』を読んだら、ショックをおこしてしまうだろう。野口の人生がそれくらい詳細に描かれている。幸いなのは、私自身これを読んだのが、小学生の純粋な心とはすでに縁遠い、大学院に入学したての頃であったことだ。さらに、これを研究者として生きている今読むと、野口の生き方が理解できるから、また面白い。

小学生のときに読んだ伝記の内容を思い出し、『遠き落日』と比較しながら、簡単に内容を解説しよう。

野口英世の出生後の名前は清作であった。伝記では、小さいころに囲炉裏に落ちて左手に大きな火傷を負ったと書いてあった。それが『遠き落日』ではかなり詳細に描かれている。それによると、2歳半で囲炉裏に落ちて、左手が直接燃えている薪に張り付き、直後に母シカにより助け出されたが、火傷は真皮から皮下組織に達し、最終的には拇指と中指が掌面に癒着し、他の指もそれぞれ曲がった形で縮んでしまった。それがすりこ木に似ているため、「手ん棒」とあだ名がついた。

その後、勉学を重ねて医学開業試験に合格した野口清作は23歳で北里研究所に勤める。「研究所」という言葉が小学生の心をくすぐる。そして伝記では、野口清作によく似た名前の医学生、野々口精作が東京で遊びまわる姿を描いた小説を読んで、改名したと書いてあった。小学生でも、「きっと後ろめたいところがあったのだろう」と容易に想像つくところが面白い下りであった。そして、昔の人は簡単に名前を変えることができた、と思い込んでいた。

ところが、『遠き落日』を読んだら、ここのあたりの野口英世の人生はもっと奥が深いことに気がついた。まず、野々口精作が東京で遊びまわる姿を描いた小説は坪内逍遙の「当世書生気質」という流行小説だった。なかなかの大作家の作だったので社会にかなりの影響があった。そして野々口精作の遊びが、まさに自分の遊びにそっくりだと思い込んだ野口が恩師に相談したところ、恩師は英世という名前に改名するとよいと野口に提案するのである。しかしながら、実際には当時でも改名は容易ではなかった。改名のための条件があって、たとえば同じ村に同じ名前の人が複数いるときには、郵便配達で不便が生じるので、改名できるという具合だ。野口は翌年、同じ村の野口家に子どもが生まれると知って、「清作」と名づけるようにその家に勧め、計画を果たすことができた。これで同じ村に二人の野口清作が存在することになり、野口は英世に改名することができたという。

野口の死後、恩師は坪内逍遙に書簡を送り、当世書生気質のモデルが野口英世だったかどうか、尋ねている。逍遙からの返信の中で、当世書生気質は野口博士が9歳か10歳ころに起稿、出版したもので、まったくそのような事実はないと答えている。このようなやり取りを証拠としてそろえて、この『遠き落日』が執筆されているのである。やはり大人の読み物である。

野口英世24歳にて、米国ペンシルベニア大学に渡り、立派な研究を修める。アメリカの大学で世界的権威として活躍し、そして一時帰国したら日本中が騒ぎになることは、小学生にも容易に想像がつく。きわめてカッコいい。ところが、野口はペンシルベニア大学のフレクスナー教授をいきなり訪ね、雇用してほしいと頼んだのが実情のようである。フレクスナー教授は驚いて拒否するが、野口は日本にてフレクスナー教授に招聘されたと見栄を張ってきた手前、そのまま帰国す

るわけにいなかった。確かにこのようなやり方は、昔も今も常識はずれで、普通では雇用しないだろう。ただ、私のところに新米研究者のこのような飛び込みがあって、それが野口のようにであったら、フレクスナー教授のように雇うかもしれない。野口の見栄は、才能と努力で裏打ちされていたのだ。

その才能と努力の例については、ぜひ『遠き落日』を読破して知ってほしい。簡単に述べると、卓越した語学力と寝る間を惜しんで実験をおこなう姿勢である。その一方で、ペンシルベニア大学やその後のロックフェラー研究所に提出した履歴書では、東京医学校卒と学歴を偽っていたりもする。偉大な科学者の人生における陽と陰を感じながら、人生にはプラスがあればマイナスも必ずあるという、人生哲学にたどり着くのもよからう。

執筆者紹介

斎藤 秀俊

物質材料系教授。専門領域は、機能材料工学、水難救助学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『遠き落日』上・下巻 渡辺淳一著 集英社文庫 1990年 1,229円

ブックガイド目次へ

我々は様々な音に囲まれ、その環境下で生きている。音と認識される人の可聴域は22kHzとされるが、それ以上の音が聞こえないからといって意味のない音であるわけではない。大橋力の『音と文明－音の環境学ことはじめ－』（岩波書店）によると、自然環境の中に存在する、音として認識されない可聴域を遥かに超える高周波数が耳ではなく体表面で感受され、自律神経系、免疫系などの基幹脳を活性化させ、プラスの効果をもたらすというのである。自然環境から引き離され、貧弱となった現代文明の音環境の中に住んでいる我々の身体と音と環境との関係を見直すきっかけとなる書。

偏った音環境を再考する書として藤枝守の『響きの考古学－音律の世界史からの冒険－』（平凡社ライブラリー）。現在我々が当たり前で聞いている音楽は平均律に基づくものである。平均律というのは、1オクターブを12等分した音律である。この音律は西洋において19世紀に普及し始めたものであり、一時代の一地域のものにすぎなかったのが、今やグローバリゼーションの進展により、音が世界的に均一化、標準化してしまい、歴史的、地域的に様々な音律が存在したことが忘れ去られるようになっていく。インド、アラブ、中国の音律や近代以前の西洋の音律との比較、廻行による音楽の豊かな可能性や多様性を耳に取り戻すための一冊。

音楽とことばの関係について考えるのなら、音楽学、考古学、人類学、神経科学、言語学の知識を動員してまとめられたスティーヴン・ミズンの『歌うネアンデルタール－音楽と言語から見るヒトの進化－』（早川書房）。音楽と言語の原型となった「HmMMM」（holistic, multi-modal, manipulative, musical）がヒトにおいては、そこから音楽と言語が分離し進化したが、ネアンデルタール人においては分離されず一体化したまま進化したという。要素の組み合わせからことばが生まれたと考えるのではなく、まとまりとしてのユニットを要素に分節化する過程にことばの起源を見出す。歌とことばの共通性と相違性を考えるのに格好の書。

ヒトや類人猿以外にも歌う種に鳥がある。岡ノ谷一夫の『小鳥の歌からヒトの言葉へ』（岩波科学ライブラリー）は、鳥の歌の持つ音パターンの構造の解明とそこから人間のことばの起源を性淘汰説に基づき探る書。なぜ歌を歌うのか、この

ことについてきつと理解が深まることであろう。

正高信男の『0歳児がことばを獲得するとき』（中公新書）は1歳になるまでの赤ん坊と母親との主に声を通じた相互作用による言語獲得を論じた書。我々が幼い頃に身につけたことばは、決して自然に何となく身につけたものではなく、周囲との相互作用なしでは獲得し得ないものであったことを教えてくれる。我々は周りの「声」なしでは何事もなし得ない。

ここに挙げたいずれの書も、我々の持つ身体と環境と音との豊かな関係性や多様性を解きほぐす導き手となってくれることであろう。

執筆者紹介

加納 満

教育開発系准教授。専門領域は、言語学、スリランカ手話、日本語教育。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『音と文明 音の環境学ことはじめ』大橋力著 岩波書店 2003年 4,620円
『響きの考古学 音律の世界史からの冒険』藤枝守著 平凡社ライブラリー 2007年 1,365円
『歌うネアンデルタール 音楽と言語から見るヒトの進化』ステイーヴン・ミズン著(熊谷淳子) 早川書房 2006年 2,310円
『小鳥の歌からヒトの言葉へ』岡ノ谷一夫著 岩波科学ライブラリー 2003年 1,155円
『0歳児がことばを獲得するとき 行動学からのアプローチ』正高信男著 中公新書 1993年 693円

ブックガイド目次へ

『臨床の知とは何か』

中村雄二郎著／岩波新書

私が哲学者、中村雄二郎氏のお話に直接触れたのは20年前のファジィ関連の学会の「新しい知としてのファジィ」に関する企画におけるご講演であった。当時、1965年にL.A.ザデーによって提唱されたファジィ理論は、人間の定性的な知による機械制御の方法を産業分野で製品やシステムに埋め込むのに有用なツールとして展開され、ブームになったが、本企画は、そのことの根源を人間の知における新たなパラダイムを開くための一つの突破口と考えたいという思いからであった。

当時、中村雄二郎氏は新しい科学認識論を「共通感覚」や「臨床の知」として展開されておられたのだが、「ファジィ」が提起した問題と深くかかわっていると考えられたとのことだった。ファジィ理論は「あいまい集合論」として登場し、厳密な帰属性を論ずる集合論、2値論理を基盤とする近代科学的な思考法に、疑問を投げかけたこととらえられたのかと思われる。

この招待講演の後、まもなく出版されたのが『臨床の知とは何か』であった。その著書の中で述べられている基本的な問題意識は、「近代技術文明を牽引してきた科学の知は、普遍主義（事物や自然を等質的とみなし、すべてを量的なものに還元することで、地域、文化、歴史を超えられる）、論理主義（事物や自然のうちに生ずる出来事は、すべて論理的な一義的因果関係で成り立っている）、客観主義（事物や自然を扱う際に、扱う者の側の主観性をまったく排除して、対象化してとらえる）の3つの原理に基づいていたが、それらが人類にもたらしたものは、自然破壊、環境汚染であり、人間の生活環境は、自然的にだけでなく、社会的にも精神的にも危険に充ちたものであった」との捉え方である。その上で、「臨床の知」として、科学の知の3原理と対をなす、「コスモロジー（場所や空間を、一つ一つが有機的な秩序、意味をもった領界とみなす）」、「シンボリズム（物事をそのもつさまざまな側面から、一義的ではなく、多義的に捉え、表わす）」、「パフォーマンス（行為する当人のわが身に相手や自己を取り巻く環境からの働きかけを受けつつ、自己のうちに受動的、受苦的な在り様を含みつつ、相互作用的に行為し、行動する）」を構成原理としたもう一つの対照的な知を際立たせたのであった。

私自身、人間工学分野で研究してきたものであるが、この「臨床の知」に出合った当時、あいまいで主観性が鍵となる「感性工学」に関心を持ち、快適性や質的

印象などを重視するモノ造りやモノの選択支援システムの研究に取り組んだ経験がある。最近では地球温暖化問題はもちろん、脆弱なネットワーク社会がもたらした新たなサイバー犯罪・社会不安、そして昨年秋に顕在化した金融危機などに対して、地域や文化の固有性を尊重し、人間の多様な見方、主観的な叡知を生かした、問題解決の道筋をクローズアップすることが不可欠と考えている。身体を介したヒト・モノとの相互作用や経験を通して獲得した暗黙知を踏まえ、「臨床の知」の諸原理に着目し、それを人間の感性的な諸相でとらえて工学的なアプローチに埋め込めないかと考え始めているところである。

大学という知の最高学府に身をおく機会を得た学生のみなさんにも、「現代に求められる知」とはどのようなものなのか、本書をきっかけに考えてもらえれば望外の喜びである。

執筆者紹介

中村 和男

経営情報系教授。専門領域は、行動科学、人間工学、認知心理、システム科学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『臨床の知とは何か』 中村雄二郎著 岩波新書 1992年 777円

ブックガイド目次へ

『発想法－創造性開発のために』

川喜田二郎著／中公新書

もう丸々30年も昔の話ですが、中学生になった私は千葉県の自宅から都内の学校へ電車通学を始めました。片道90分です。往路は朝のラッシュの真最中で身動きが全くとれないばかりか、ヤワな体が潰されてしまわないようにひたすら耐えるばかりです。窓ガラスが割れたりもしました。しかし、部活のない日の授業は午後3時前に終わり、復路90分をずっと座って行くことができました。車内の友といえ、最近では携帯電話ほかの情報端末がダントツと思いますが、当時は、やはり、「本」でした。電車の中は、いろいろと行動が制限されるため、かえって邪魔されずに本に集中するのに良い環境になっています。その頃、とても嬉しい出来事がありました。通学経路上の東京駅すぐそばに、日本最大級の本屋が開業したのです。普通の駅にある大きな書店と同じ面積が（当時、確か）4フロアも積み重なっています。文字に飢えた少年の私は、この本屋にあまり売り上げをもたらさない、立ち読みの常連となりました。

当時のクラスメイトの間にあった雰囲気は「銜学」、つまり小難しいちょっと背伸びした本を読んで評論をぶったり知識をひけらかしたりする空気が流れていました。「タメになる」とか「楽しい」とかの他に「彼奴を凹ます」「バカにされまい」というちょっと不純なワルい動機で本を読んでいた。今となっては恥ずかしくほろ甘苦く当時のことを思い返しますが、身になったかどうかはさておき、知識のがぶ呑みを強いるこの風潮は割に良いものだったと思います。さて、「ちょっと進んだ僕」を演出するには、「文庫」すなわち文芸作品だけを読むのでは心もとなく、「新書」すなわち各種学問の入門的解説を読みこなして武装する必要があります。東京駅途中下車立読ルートには第一経由地として新書コーナーが組み込まれました。

ある日、普段あまり行かない中公新書のコーナーに行くと「発想法」という実にシンプルなタイトルが目に入りました。中学生の私も、さすがに発想という言葉は知っています。何か新しく思い付くことだろ。ところで、その下に「法」とついてあります。新しいことをどんどん思い付く方法が書いてあればそれは大変だ！勝利のための秘伝の巻き物か？開けて読んで見ると、いわゆる頭のトレーニングの類ではなさそうです。また、文字の書いてある小さい長方形が多数ちりばめら

れて、それがベン図のように囲まれたり、相互に線が引かれたり、と意味ありげな図式が描かれていました。これは、絶対持って帰るべきだ、とこの日ばかりは少し売上に寄与しました。

この本は、有名な発想支援技法の「KJ法」について記したものです。KJは著者の名前に由来します。荒っぽく私なりに説明すると、ある主題について何かまとめたり、新たな知見を得たいという時に次のような手続きを行うというものです。(1)そのことについて調べてわかったこと、または思い付いたことを、一つ一つラベルという小さな長方形の紙に書く。瞬間を逃がさず躊躇なく書き留める。(2)集積されたラベルをかるたのようにひろげて、何となく「近い」もの同士を寄せ集めていく。データをして語らしめよ。先入観で分類してはいけない。(3)前段で寄せ集まったラベルの一山には、それらが寄せ集まった理由というか、それを近いと思った「情念」があるはずである。そこを良く良く考え、一山のラベルの意見を代表するような「表札」を新たなラベルに起こし、それを表紙にして他のラベルを輪ゴムで束ねてしまう。(4)表札たちをはじめのラベルと思い、(2)(3)を再帰的に繰り返す。(5)充分に数が減ったところで、近さや関係を尊重して模造紙に展開していく。表札が配置できたら輪ゴムを一段階ほどして、中身を配置する。中身の複数のラベルはベン図のように囲み、その集合の標題として表札をつける。また、表札ないしラベル相互の関係を表わす線を引く。(6)これを繰り返していけばすべてのラベルが模造紙の上に露出して、その相互関係が模造紙上のベン図や線で記されている。ラベルを模造紙に糊で固定すれば、それが主題に関して調べたこと考えたことの図式的表現になっている。(7)この図式の全体を漏らさず、文章化する。「情念」によるラベルの結び付きの背景に隠れた論理の糸を一所懸命掘り出す。この過程により、単なる思い付きを超えた「発想」が生まれる。

中学生の頭でも、極めて理にかなっていると思いました。今でもそう思っています。そう思う根拠を書き尽す力がないのですが、ひとつだけ挙げます。何か考えをまとめよう、新しい考えを創ろう、というとき、とにかく書き留めろ、というのは良く言われることです。頭の中だけで考えるよりずっと良いです。ただ、まとまった文章をいきなり頭から書き始めると、あることが障害になります(少

くとも私には)。文章には始まりがあり、終りがあり、それが1次元的に並んでいます。調べたこと、思いついたことの複雑な相互関係を整理するのにこの1次元構造はとても不便です。また、手近な論理的流れに乗ってくれない、実はそれこそが貴重な素材を無意識のうちに捨ててしまうことを助長します。空間配置や情念→論理の2段構えはこの点だけとっても有利です。

さて、「KJ法」が私の身について、何でも自在に発想できるようになったかは実は疑問です。ただ、いろいろな局面での具体的思考態度や技法には今も影響を受けています。そして、この本に教わった別の重要なポイントは、「物質とは無縁な方法もそれを究めることはすばらしく価値がある」ということでした。この本との出会いを境に、彼の中学生は「ちょっと進んだ僕」を卒業し、「方法論マニア」の一時代を迎えます。

執筆者紹介

武井 由智

電気系准教授。専門領域は、計算量理論とその応用、ランダム変数と独立性、デジタル信号処理。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『発想法』 正・統 川喜田二郎著 中公新書 1967年 1,554円

ブックガイド目次へ

『野性の実践』

ゲリー・スナイダー著、重松宗育、原成吉訳／山と溪谷社

私が最も影響を受け、そして今尚支えられている詩人ゲリー・スナイダーについて紹介したいと思います。スナイダーは1930年サンフランシスコに生まれました。詩で「世界を100分の1インチ動かした」と呼ばれるビート詩人の一人であり、環境活動家、仏教徒、大学教授として今も精力的に活躍しています。1955年からおよそ10年間に渡って、京都大徳寺で禅の修行を行いました。その後、スナイダーは、日本で研鑽を積んだ仏教と科学の見地を融合して、独自の生態学思想を形成していきました。1975年、詩集『亀の島』は環境意識の視点が評価され、優れた報道、文学作品に与えられるピューリッツァ賞受賞となりました。この詩集は、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』と並ぶ環境文学の名著となっています。私は学部3年生のときに、スナイダーの作品を英語の先生に紹介してもらいました。アメリカでカウンターカルチャーのリーダー的な存在であったアメリカ人がなぜ、日本で禅を学びその後エコロジー運動をアメリカで中心となって行っていたのか、とても疑問に思いました。アメリカ文化文学を学ぶ学生であるからこそ、この疑問を私なりに解決してみたいと思うようになりました。1996年に『野性の実践』というエッセイが出版されました。一般読者だけでなく、エコロジー学専門のテキストとして、1990年代以降多くの大学の講義で読まれています。

誰でも、とくに若いときに悩まされるのは自分は何者か、自分は何をしているのか、何が起きているのか、という疑問です。私は北アメリカ北西部の太平洋岸にある小さな農場で育ちました。17歳のとき、「ウィルダネス協会」に入会しました。この会は今もいい仕事をしている全国的な組織です。20代には、働いたり、北米西部の山や林をあちこち旅行し、それから日本に行きました。私は、日本の山男たちと出会い、本州や北海道の険しい山々で、山歩きや登山の案内をしてもらいました。それに京都で礼儀作法や正式な修行を体験できたのは、本当に幸運なことでした。そして、最終的にアメリカに戻り、その巨大な空間を新たな目で見直しながら、私は、小さなグループのための教室や研究会を開いて、みんながもっと自然に親しむよう仕向ける努力をしました。様々な人と

語りあいました。こうして学び、教えた経験が、本書のエッセイになったという次第です。(序文より)

本書を読むと、環境保護運動を実践していく精神の根幹が、スナイダーが日本で学んだ仏教、特に道元の著作であること気づきます。日本人としてはその洞察の深さに驚かされます。本書の特徴は環境保護運動の根本が生態地域を意識した運動の展開にあると言明したことにあります。生態地域は行政地域とは著しく反したもので、森林を中心としたものの見方を提案するものです。このような大きな視点の転換をスナイダーは仏教から学んだのでした。のちに、生態地域主義運動は森林保護、河川の保全、市民の環境教育などの観点で社会的に高く評価されていくことになります。スナイダーのエコロジー思想は持続可能な社会の実現に欠かすことのできない環境倫理を教え導くものであります。

執筆者紹介

高橋 綾子

教育開発系准教授。専門領域は、アメリカ現代詩、環境文学、ゲーリー・スナイダー研究。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『野性の実践』ゲーリー・スナイダー著(重松宗育、原成吉) 山と溪谷社
2000年 2,100円
『亀の島』ゲーリー・スナイダー著(ナナオ・サカキ) 山口書店 1991年
2,039円

ブックガイド目次へ

私の3・4年生向け授業「日本語作文技術」では、例年、「技大生にすすめる一冊の本」という作文を学生に課している。400字詰め原稿用紙1枚半以上2枚以内で書く、図書・雑誌の推薦文である。課題の主旨は、もちろん、授業で教えた作文技法の習得を評価することにあるのだが、それとは別に、今回はいったいどんな本を推薦してくるだろうと、毎年興味津々で作文を読んでいる。

ここでは、「技大生がすすめる一冊の本」と題して、昨年度(2008年度)1、2学期に学生が推薦してきた主に小説を皆さんに紹介したい。併せて、推薦文が私の印象に残ったノンフィクション・エッセイも何冊か紹介しよう。

参考までに、昨年度の作文提出者は全部で199名であった。そのうち小説をとりあげた学生は40名あまりだからそれほど多くない。それでも、実にバラエティに富んだ本が推薦されてくる。その一端もお伝えできると思う。

全体を次の7項目に分ける。各項目の最初には、そこで取り上げる本を紹介順に列挙した(単行本刊行年月を示し、後に文庫化されたものには*を付す)。皆さんは、まずは関心のあるところだけを見てくれたらよい。

- (1)いま流行の作家・作品、(2)現代作家、(3)SF、ミステリー、
- (4)文学史上の作家、(5)少年少女向け文学、(6)ライトノベル、ノベライズ、
- (7)ノンフィクション・エッセイ

(1)いま流行の作家・作品(12タイトル・1シリーズ)

小説でも常に多く取り上げられるのが、いま流行の作家・作品である。

東野圭吾『聖女の救済』(08.10)、『流星の絆』(08.3)、『ある閉ざされた雪の山荘で』(92.3、*)、「探偵ガリレオ」シリーズ(第一作は『探偵ガリレオ』(98.5、*))、三浦しをん『風が強く吹いている』(06.9)、桜庭一樹『赤朽葉家の伝説』(06.12)、伊坂幸太郎『ゴールデンスランバー』(07.11)、『グラスホッパー』(04.7、*)、貴志祐介『新世界より』(08.1)、恩田陸『光の帝国』(97.10、*)、市川拓司『いま、会いにゆきます』(03.3、*)、中野独人『電車男』(04.10、*)、竹内真『カレーライフ』(01.3、*)

東野圭吾『聖女の救済』、「探偵ガリレオ」シリーズ

※「探偵ガリレオ」の連作はドラマ化（07年）・映画化（08年「容疑者Xの献身」直木賞（05年下半期）受賞作）され、福山雅治、柴咲コウなど人気俳優が起用された。東野圭吾は工学部電気工学科出身のもとエンジニアだから、作品世界には技大生になじみやすいところがあるのかもしれない。

（この※は若林のコメント。以下が学生の推薦文の要約・摘記。以下同様に記載していく。）

この連作の特徴は「犯人が科学技術を駆使して殺人を実行する」、「警察と一緒に物理学の教授がトリックを暴く」の2点。だから、科学技術の面白さや怖さを知ることができる。また、犯人である科学者や技術者の人生における苦悩や挫折、彼らを追い詰めた侮辱や差別などは自分達の将来に身近なことかもしれない。『聖女の救済』はこのシリーズの新作。天才物理学者湯川教授が今回は「虚数解」という不思議な真相を推理。物語の巧みな展開とともに読者もその推理を楽しめる。

『流星の絆』

小学生の時に両親を何者かに殺された三兄妹がその殺害犯に復讐する物語。今は詐欺で生計を立てている兄妹がある男に結婚詐欺を仕掛けようとした。その父親が、両親が殺されたとき店の裏口から出できた男と同一人物だった。詐欺ではなく復讐へ、その物語は「息もつかせぬ展開」で、「読めば読む程犯人がわからなくな」り、最後は「驚きの真相」。

『ある閉ざされた雪の山荘で』

役者になるという夢を持った人達がある山荘に閉じこもり、殺人事件の芝居をする。ところが、芝居をするうちに本当に殺人事件が起こってしまう。命を守るために芝居を降りるか、夢を叶えるために芝居を続けるか。「あくまで夢を追う姿」を見倣いたい。

※近年の直木賞作家では、ほかに桜庭一樹（07年下半年期）、三浦しをん（06年上半年期）の作品があがった。

三浦しをん『風が強く吹いている』

※直木賞受賞第一作。推薦文には、作品世界が自分の経験と重なる時、人はより深くフィクションを味わうことができるということがよく表れていた。

竹青荘に住む寛政大学の学生が箱根駅伝を目指すスポーツ小説。「風を切って走る陸上競技の躍動感やアスリートの微妙な心の変化を繊細、かつ魅力的に表現している。」長距離選手に対する一番の褒め言葉は「強い」、その言葉のように「心身ともに強くなっていく彼ら10人のアスリートの姿は読んでいて気持ちが良かった。」「物語の終盤である箱根駅伝においては、仲間のために一秒でも早く襷をつなぎたいという思いと共に、仲間を信頼し、誇りに思うまでの晴れやかな気持ちが良く伝わってきた。」「私は中学から陸上を始め、長距離選手として駅伝には何度か出場したことがある。その度に、個人種目でありながらチームワークが求められる駅伝の魅力を感じたが、本書でも同様に興奮と感動を覚えた。」

桜庭一樹『赤朽葉家の伝説』

第60回日本推理作家協会賞受賞作品。高度経済成長から現代に至る時代を背景にした、鳥取の旧家に生きる三代の女性の物語。優秀なエンターテインメントとしての側面ともに文学的側面も持ち合わせており、彩り豊かな文章による情景描写、時代の変遷と共に移りゆく人物の心象を丁寧に描いている。

伊坂幸太郎『ゴールデンスランバー』

※この作者の人気も高い。本作は2008年本屋大賞を受賞。

ハリウッド映画を思わせるエンターテインメントで、内容は、ある事件の犯人の逃亡劇。小説の面白さを教えてくれ、読書の楽しさを知ることができる。

『グラスホッパー』

「押し屋」と呼ばれる殺し屋をめぐり、三人の男たちの運命が交錯していくフィクション。「登場する人物一人一人の個性が際立っており、活字離れしがちな技大生でも飽きずに読み進められる」。

※考えさせられる作品として推薦されたのが次作。

貴志祐介『新世界より』

上下二冊で千頁を超える長編作品。超能力を持った人間が現われてから千年後の世界。物語の舞台となる町では、倫理委員会、教育委員会が子供達を管理している。子供達には知らされていないが、子供達に人権はなく、大人が不用や危険とされた者を間引いている。しかし、これは超能力の暴走や殺戮者を出さないための処置であり、子供達には可能な限り安全かつストレスのない環境が与えられている。主人公はこの事実を知って苦悩する。「管理社会を単純に否定・肯定するのではなく、そのどちらでもない姿を示している。」また、物語には、道具を新しく作り出せるほどの高い知能を持つバケネズミという生物が出てくる。人間に供物を差し出しすことで自治を認められているが、超能力を持たず、反抗したりすれば簡単に殺される立場にある。「彼らを見る人間の目を通して、読者は人間が繰り返してきた支配者と奴隷の姿を実感することができる。」「管理社会」や「支配者と奴隷」といった「既存のテーマを新しい視点から見ることができ、新しい発見」が得られる。

恩田陸『光の帝国』

※すでにいくつもの文学賞を受賞している実力派でもある。今回学生があげた作品は連続短編集で、01年にNHKでドラマ化された。

一話ごとに喜びや悲しみなど色々な感動があり、終わりがあがる、それでいて一話ごとの繋がりもある。そして、「最終話の大きな感動。」

※話題となった小説の映画化、ドラマ化の勢いが近年は著しい（アニメ化、コミック化というのも出てきている。「メディアミックス」と言われる）。以下の二作もそうだ。

市川拓司『いま、会いにゆきます』

妻を亡くした夫と障害を持ったその息子が、生前の約束通り雨の季節に帰ってきた妻と過ごした六週間の軌跡を描いた作品。「この本には人を想い合う気持ちがあふれている。」「主人公達の様に人を想い合えたらどれほど幸せか、願わずにはいられない。」「この本には愛する人を失った二人の悲しみが漂っている。」「涙なくして読めない。」

中野独人『電車男』

※「小説」の範疇には入らないかもしれないが、ここでとりあげよう。

自信も勇気もないオタク青年。ある事件をきっかけにある女性と知り合い、自分を変える決意をする。はじめは電話で会話することもままならなかったが、他の人達の応援と、自分自身を磨く努力により、自信を得る。そして食事、デートと段階を踏んでゆき、最終的にその女性に告白をし、その結果彼女ができる。ありがちなサクセスストーリーだが、主人公のリアルタイムな心境が生々しく書かれ、その「苦悩と焦り、それを乗り越えることによる成長」、また「主人公を応援する人達の心の温かさ」が伝わってくる。加えて、「オタクな現代人の実態も知ることができる」。

※こんなものもある。

竹内真『カレーライフ』

カレーを通じて成長し合う若者達を描いた作品で、原稿用紙1300枚に及ぶ長編。カレーに始まりカレーに終わるカレー尽くしの本で、読むと「必ずカレーが食べ

たくなる」。カレーのために国内や海外を飛び回っている作品なので、実際に旅行した気分が味わえる。「この本がきっかけで私は本を読むようになった。」

(2)現代作家（7タイトル）

現代の実力派作家の作品も推薦図書に並ぶ。

小川洋子『博士の愛した数式』（03.8、*）、村上龍『半島を出よ』（05.3、*）、山崎豊子『大地の子』（91.14、*）、帚木蓬生『三たびの海峡』（92.4、*）、吉村昭『光る壁画』（81.5、*）、阿刀田高『コーヒー党奇談』（01.8、*）、星新一『夜のかくれんぼ』（*）

小川洋子『博士の愛した数式』

交通事故による脳の損傷で記憶が80分しか持続しなくなってしまった元数学者「博士」と、家政婦である「私」、その息子「ルート」の心のふれあいを描いた作品。数学の奥深さや楽しさを再発見できる。物語の中では、素数を始め、「完全数」・「友愛数」など、数の美しい規則性が語られる。博士は、その時気づいたことを数学と結びつけてしまうのだ。たとえば、「私」の誕生日2月20日の220と、博士の学生時代の論文が学長賞をとった時にもらった時計のシリアルナンバー284という数字が友愛数であるとさざっと言い、実際に一緒に計算して「私」に理解させる。その極めつけが「博士の愛した数式」である「オイラーの公式（ $e^{i\pi} + 1 = 0$ ）」。 e も i も π も無理数にも関わらず、1を足すだけでゼロになるという美しさを博士は愛した。「オイラーの公式は機械創造工学課程ではたびたび使う数式だが、注意して数式を見なければその美しさには気づかない。だがこの本はその美しさに気づかせてくれる。もちろんオイラーの公式だけではない。この本を読めば、数学の教科書が美術の教科書にも見えてくるだろう。」数学に対して嫌なイメージを持っている読者やあまり知らない読者でも、一つの物語を読みつつ楽しく数学と向き合うことができる。

※次は私たちが生きている現代社会とその歴史に取り組む三作。

村上龍『半島を出よ』

近未来の福岡市が主舞台。「福岡ドームを占拠し九州を独立国にしようとする北朝鮮のテロリスト集団と、米国に見放され経済的にボロボロになり、テロリスト集団に対して弱腰な日本政府と、そんな日本政府の対策に憤った『イシハラグループ』と呼ばれる外れもの集団などが、綿密なストーリーの中で絡み合う作品。」「北朝鮮のテロリスト集団は、初めての福岡に当惑したり、日本では当たり前となっている」様なことを知らず、読者が「それを面白がりながら北朝鮮の現実について知る構成となっている。我々日本との違いが多く、とても考えさせられる。」また、「日本は世界から孤立し、」国が傾きかけており、「税金がはね上がっている。日本政府の対策の遅さも皮肉まじりで面白く書かれて」いて、日本の「政治・経済の脆弱性について考えさせられる。」それだけではない。『『イシハラグループ』には様々な集団から外れた者がいる。現在の日本でオタクと分類される者からヤンキーと分類される者たちまで様々な人々が互いを傷付けながら共に成長し、北朝鮮のテロリスト集団に立ち向かうまでになる」。そこには「彼らなりのやり方」があり、「彼らの生き様は、非常に考えさせられる。」

山崎豊子『大地の子』

中国残留孤児の半生を描いた物語。主人公がソ連軍の攻撃を受けて満州から逃げる場面、日本人であるため、文化大革命のとき皆に吊上げられ労働改造所に送り込まれる場面など、主人公の姿とともに激動の中国の様子を知ることができる。物語の後半では、日中共同プロジェクトとして中国に最新の製鉄所を造ることになり、主人公も携わる。その中で、日本と中国の技術者が対立する。互いの「文化の違いから、日中共同で仕事をするのは容易ではない。将来技術者になる技大生には読んで参考にしてもらいたい。」

帚木蓬生『三たびの海峡』

この作品は、韓國人を主人公として、ノンフィクションではないが、日韓史を重ね合わせて描く。主人公は、日本と韓国を隔てる海峡を三度渡る。一度目は戦時下の強制連行、二度目は日本女性との祖国への旅、三度目は受けた暴力と辱めの復讐のため。数多くの理不尽とやり場のない怒り、酷い仕打ちを受け、人権すら踏みにじられても、母国の誇りを失わない登場人物達には涙を禁じ得なかった。心にも何かを訴えてくる。感情を揺さぶるストーリー。

※技術者の人間像を描き出す作品の人气も根強い。

吉村昭『光る壁画』

これは、日本において世界で初めて胃カメラが発明されるまでを描いた物語。研究室に配属されたばかりの研究員が、医者である宇治の「胃の中を実際に覗いてみたい」という強い思いをきっかけに全く知識の無い生体の分野に取り掛かり試行錯誤を繰り返していく。発明までの道のりには失敗と挫折の繰り返しがあった。それでもあきらめずに原因を追及し改良していく。また、成功までの過程で様々なスペシャリストと達と携わり、協力しあっていく。カメラの重要部分であるランプ部の開発では今までつながりの無かったライフ電球という会社に依頼。常識的に考えると到底無理と思える要求にもライフ電球は真摯に取り組み続け、設計段階から装置として完成に至るまで何度も改良を加え続けた。研究は決して一人の力や考えだけで成すことが出来ず、共に協力し合っていく姿勢が大切だと再確認することができる。技術者としてのあるべき姿、研究開発のあり方を学べる。

※もちろん、小説の面白さは作品の長短に関わらない。

阿刀田高『コーヒー党奇談』

「ミステリー風の雰囲気の中で、自然や人の心を瑞々しく描く短編小説集」で

「全十二話からなる。」この短編集は「出会いというものの感動を思い出させてくれる」。それだけでなく、舞台がバラエティーに富んでいる。表題作はアムステルダム、第二話「霧を見た男」は北海道の摩周湖、第三話「橋のたもと」は新潟の万代橋。各物語はそれぞれ完全に独立していて、「まるで旅をしているような解放感を与えてくれ、読者を飽きさせない。」

星新一『夜のかくれんぼ』

※星新一（1926～1997）のショートショートはもっと短い。没後10年を記念して、NHKがアニメやドラマなどに仕立て、1回3編の10分番組として放映を始めている。

28作が収められていて、実に様々な物語がある。たとえば、「はじめての例」。とある一人の老人が悪魔を呼び出し、「3つの願いを叶える代わりに悪魔に魂を渡す」という契約をする。ところが、最後に、三番目の願いを放棄した老人は悪魔に魂を奪われず、永遠に生き続けてしまう！ほかに、「こんな時代が」は理想の近未来にいかにもありそうな弊害、「黒い服の男」は悪徳医者の話。「想像力を働かせる楽しみ」がある。

(3)SF、ミステリー（8タイトル2シリーズ）

このジャンルは、理工系学生のお手のものだろう。毎年何冊もあがってくる。

森博嗣『スカイ・クロラ』（01.6、*）、田中芳樹『銀河英雄伝説』（82.11-87.11、*）、有栖川有栖『双頭の悪魔』（92.2、*）、高野和明『幽霊人命救助隊』（04.4、*）、機本伸司『神様のパズル』（02.11、*）、松岡圭祐「千里眼」シリーズ（第一作は99.6、*）、三津田信三『厭魅（まじもの）の如き憑くもの』（06.2）、高田崇史『QED～ventus～御霊将門』（06.10）、ダン・ブラウン『ダ・ヴィンチ・コード』（04.5、*）、アーサー・コナン・ドイル「探偵ホームズ」シリーズ（*）

森博嗣『スカイ・クロラ』

※『すべてがFになる』(96.4、*)でデビューした作家。10年ほど前には、何人もの学生がこの作品を推薦していた。

戦争のない時代、そこに生きる人々が平和の実感を得るために「ショーとしての戦争」を求め、戦闘機による戦闘を繰り広げる。戦闘機に乗るのはキルドレと呼ばれる永遠の命をもった子どもたち。彼らは撃ち墜とされるまで戦い続けている。この本は、その戦闘員として新たに配属された一人の少年の物語。その物語とともに、理工系の人間が興味をそそられる面白さとして、戦闘機の仕組みやその戦闘に関する専門的な知識が自然に得られることがある。「戦闘時には読みながら戦闘機が頭の中を飛び交っていた。」

田中芳樹『銀河英雄伝説』

※これもまた何度も推薦文でお目にかかった。80年代に刊行されたロングセラー。

「銀河を分けて存在する2つの国同士の戦いを壮大に描き、その戦いに参じるたくさんの人達の考えや行動を細かく書いた長編」。同盟国（民主主義国家）側の主人公が、命をかけた戦いにも関わらず、いかに味方と相手の命を失わず戦いを終わらせるかということを第一に考えて戦っていたり、腐敗しきった政治を見て、「もし民主主義国家の大多数が独裁主義を望むならば、その矛盾はどう解決するのか」と思ったりする場面がある。登場人物の考えや行動は考えさせられる。

有栖川有栖『双頭の悪魔』

ある大学のミステリー研究サークルのメンバーが事件に巻き込まれ、その真相を究明していく推理小説。事件編と解決編から構成されていて、謎解きに必要ない情報は全て挙げられ、物語の探偵役と全く対等な条件で謎解きに挑むことができる。一つの事件が解決したかと思えば、また新たな事件が起こり、最後の最後まで

で読者を飽きさせない。「特に、物語の真相の意外さには読者の誰もが驚愕することになるだろう。」「この小説ほど読書後に充実感を覚えるものはそうはない。」

高野和明『幽霊人命救助隊』

自殺した裕一という名の青年が三人の仲間の幽霊と共に地上に戻り、百人の自殺志願者の命を救うという物語。生真面目なサラリーマンがうつになり、会社内や家庭内で孤立して自殺を志願するようになる。独り暮らしの老人が、その寂しさと身体の老いから自殺を考えるようになる。そんな人達に、主人公達は時間をかけて救済法を考え出す。「自殺志願者の心理がどのように変化するのか」が、「その人物をとりまく人々の行動や心理も含めて」描かれている。彼らはどのようなことを考えて自殺を志願するに至ったのか、また、自分がそのような心理状態になった場合にどうすればよいか。「いざというときに自分を救うことができるようになる。」

機本伸司『神様のパズル』

二人の大学生が「宇宙は作ることができるのか？」という疑問の答えを探るSF。「宇宙が本当に無から生まれたのであれば、自分たちで作ることも可能なのではないか、この発想から実際にどうすれば作れるのか話が進んでいく。」ソフトウェア上でのシミュレーションや宇宙を構成する粒子の存在を加速器を用いて確かめるなど専門的な話も多く含まれている。だが、主人公の一人、留年寸前の学生の視点で描かれ、この学生が分かるように説明されるので、読者も理解できる。また、「ゼミでのディベートの場面では、複数の視点から宇宙とはなんであるかを議論しており、これも読者の理解を深めるのに役立つ。」「宇宙に対する疑問を抱き、登場人物達と共に考えることができる。」

松岡圭祐「千里眼」シリーズ

このシリーズは、臨床心理士で元航空自衛官の押美由紀を主人公としたミステリー・エンターテインメント作品で、25冊以上もの文庫本が発売されている。全体

的にSF的な味付けが施されながら、現実社会の問題を取り上げていて時事性もある。サイコサスペンシブな作品、スプラッタ・ホラー的なもの、社会派サスペンスの妙味とリアリティにあふれた、深みのある人間模様を描いた作品など、「一話ずつ趣向を変えて書かれているため、あきがこない。」

三津田信三『魘魅（まじもの）の如き憑くもの』

「昭和三十年代の因習に閉ざされた村を舞台に民俗ホラーと本格ミステリーが禍々しく結集した長編である。」複数の視点人物それぞれが体験した恐怖を読者に伝えるのだが、怪奇現象の描写が上手いのでとてつもない恐怖を覚える。また、「ラストの余韻が素晴らしく、読んでいる間はもちろんのこと、読み終えても、鳥肌が立っていた。」それとともに、霊や憑き物の仕業としか思えない怪異や死をどのように合理的に解釈し、解決するのか、「本格ミステリーとしても読み応えがある」。「ホラー小説が好きな人も、ミステリー小説が好きな人も最後の最後まで楽しめることは間違いないだろう。」

高田崇史『QED～ventus～御霊将門』

シリーズ番外編第三巻。「平将門に関する歴史や民話を時代背景をもとに読み解き、また、将門に関連して起きた事件と結びつけて解釈する推理小説だ。」例えば、将門がなぜ日本三大怨霊や日本三大悪党と呼ばれるに至ったか。また、将門が「瞎目（かため）明神」（『寛明事跡録』）、「目奇（かため）明神」（『将門純友東西軍記』）として祀られているという記録は何を意味しているのか。将門と古代タタラ製鉄、タタラ場を支配しようとする朝廷、そして朝廷に刃向かった将門。これらの結びつきが解明される。「教科書では書かれていないような歴史に触れることができる。」

※海外の人気作品が二つ。

ダン・ブラウン『ダ・ヴィンチ・コード』

「ヨーロッパを舞台に主人公のハーヴァード大学教授ロバート・ラングドンが難解な殺人事件を豊富な知識を用いて解決していく小説」。主人公は宗教象徴学が専門であるが、宗教史学者や美術史に精通する人物も登場し、事件を推理する過程で様々な知識を披露する。「著者はダ・ヴィンチの美術作品などに様々な暗号を隠しており、読者が推理せずにはいられない展開となっている。」さらに、「アナグラムを用いなければ解読できない暗号になって」おり、それを解くためには多くの知識が必要。「読者にはぜひ一度読むことを止め、暗号解読に挑戦してほしい。」この本は、「物語を楽しみながら」、「美術史や西洋史の豊富な知識」が得られる。

アーサー・コナン・ドイル「探偵ホームズ」シリーズ

物語の展開が早く、飽きることがない。一話一話に「すぐに読み切ってしまうほどのおもしろさがある。」「私が一番おもしろいと感じるのは、解決編でのホームズとワトソン、二人の登場人物の掛け合いである。』『まだらの紐』など短編集も数多く揃っていて、『恐怖の谷』などの長編もある。「空いた時間に合わせて」「長編・短編と読み分けられる」。

(4)文学史上の作家(4タイトル)

多くの推薦文を読んでいるさなか、懐かしい顔に出会ったような気に、時々させてくれる。小説以外にも含めて紹介する。

太宰治「貧の意地」(*、「新釈諸国噺」中の一編)、坂口安吾『墮落論』(*)、石川啄木『一握の砂』(*)、エミリー・ブロンテ『嵐が丘』(*)

※このうち日本作家の三作品は「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>)で読むこともできる。

太宰治「貧の意地」

時は江戸時代。「原田内助は武士ではあるが、剣は駄目だし学においても書を広

げればすぐ寝てしまう有り様。その上気弱で情に厚く、それゆえ人に騙されるといった具合である。」そんな駄目男で貧しい生活を送る主人公、せっかく親戚が用意してくれた十枚の小判を恐がり、『『このまま使っては、果報負けがして、わしは死ぬかもしれない』』と、同じ貧乏な仲間を集めて酒をふるまう。「自ら得たお金を他人と喜びを分かち合うために使っている」ところに感心する。その酒の席で小判が一枚無くなる。ところが、大騒ぎの中でひょいと小判が見つかり、さらに、もう一枚を女房が台所で見つけた。最初の一枚は仲間の厚意に違いないが誰も申し出ない。原田もこの十一枚の小判をどうしても収めようとしない。「この部分では駄目男とはいえ、武士としての性根が確かに感じられる。」物語は窮余の一策、原田の思いつきでめでたく結末を迎える。資本主義社会に生きる現代人の利益傾倒的な考え方に対し、「今は無き武士の心意気を垣間見ることのできる短編小説である。」

坂口安吾『墮落論』 ※これはエッセイ。

人はいかに考えを曲げて墮落しやすいものであるか、さらに、法律や規則で規制したところで人の墮落を止めることはできない。人は誰しもが墮落するものであるが、墮落しきることによって結果的に自分を救済する術を発見する。「この本は決して墮落することを推奨する本ではない」。「技大生が勉強や研究、そしてその他のありとあらゆることで挫折を経験し墮落していても明朗な人生を謳歌するための発想が述べられている」。「負のイメージしかない墮落をここまで前向きに捉えた本はないはずである。」

石川啄木『一握の砂』 ※これは歌集。

石川啄木の日常が淡々と詠まれる。この歌集には暗い歌が多い。「事実、彼は父親の失業を機に家族全員を養わなくてはいけなくなり、天才と呼ばれた石川啄木が生きるためにどれだけ必死だったのかが痛いほど伝わってくる。」しかし、「苦勞を詠った歌だけではなく、非常に前向きな歌もある。」「高きより飛びおりるとき心もて この一生を 終るすべなきか」という歌は「高い所から飛び下りる

くらいの心意気で一生を終わらせるにはどうしたら良いだろう、と考えている様子がうかがえる。」「一瞬の危うさの中にも前を見据えて生きていこうという石川啄木の力強い意志を感じることができる。」「『一握の砂』を読んでいると、どんなに辛い逆境の中でも自分は絶対に負けない、という気持ちになってくる。」

エミリー・ブロンテ『嵐が丘』 ※本書の推薦文は、この文章の最後に回したい。

(5) 少年少女向け文学（4タイトル、1シリーズ）

大人が読んでも十分に面白い作品がたくさんある。

宮沢賢治『注文の多い料理店』（*）、サン・テグジュペリ『星の王子さま』（*）、ファビアー二『黒い手と金の心』（*）、ミヒャエル・エンデ『モモ』（*）、J・K・ローリング「ハリー・ポッター」シリーズ（99.12-08.7、ポケットサイズ版あり）

宮沢賢治『注文の多い料理店』

「童話の短編集なので、難しい話や長い本を読むのが苦手な人でもとても読みやすい」。表題作の内容は、「普段は狩りをしている2人の青年が食事をするために『西洋料理店』に入るが、そこは西洋料理を食べるお店ではなく、入った人を気付かないように食材として下ごしらえさせ、西洋料理として食べてしまう」店だったという「とても恐い話」。「活字離れといわれている我々の世代の人達が読書をするための入門編として適当な本」。

サン・テグジュペリ『星の王子さま』

私が一番心に残った真理は花とキツネ。『「きみたちは美しい。でも外見だけで、中身はからっぽだね。きみたちのためには死ねない。もちろんボクのバラだって、通りすがりの人が見れば、きみたちと同じだと思うだろう。』」たくさんのバラの花はすべて同じ顔をしているが、愛してしまったなら、この世で一輪だけの、か

けがえのない花になってしまう。『だって彼女はボクのバラだもの。』男女の愛について考えさせられる花のお話は「子供の頃にはわからなかったことだ。」「キツネは言った。『大切なことは目に見えない。』と。」「大人になって忘れてしまった純粋な気持ちを思い出してほしい」。

ファビアーニ『黒い手と金の心』

イタリアがオーストリアの占領下に苦しんでいた時代の物語。1848年のイタリア、ミラノ市での独立革命が舞台となっている。生活のために煙突掃除屋となって、仕事をしながらミラノへ向かう主人公。その主人公の率直な言動が物語の重大な要因として機能し、「心の素直さがどのように人に影響を与えるかを教えてくれる。」物語の後半では、ミラノでのオーストリアの弾圧や民衆が蜂起するまでの苦労が描かれている。主人公は、初め祖国が占領下にあることさえ知らないでいるが、この頃には、祖国をオーストリアから奪還するために仲間と協力して蜂起の準備をしている。戦争になっても主人公の素直な心が変わることはない。「どんな状況に陥っても変わらない心」の大切さ。ほかにも、「占領下における民衆の心情など、私たちが体験することがない様々なことを考える材料を与えてくれる。」

ミヒャエル・エンデ『モモ』

時間泥棒から時間を取り返してくれた女の子の、不思議な物語。いつも時間に追われている技大生がもう一度時間について考えるきっかけを得ることができるだろう。

J・K・ローリング「ハリー・ポッター」シリーズ ※今回は次の二巻があがった。

『ハリー・ポッターと死の秘宝』

第1巻の発売から10年、第7巻までであるシリーズの完結編。強大な闇の魔法使いヴェルデモードとハリーたちとの壮絶な最終決戦が繰り広げられる。「手に汗握る展開が魅力だ。」また、「魔法学校で起こる数々の事件を通じて、ロンやハーマ

イオニーたちと友情を深めてきたハリー、その絆の強さ」。「最終巻では、今まで隠されていた伏線が次々と明らかにされていく。それらを理解した上でもう一度最初から読み返してみると少し違った楽しみ方があるだろう。」「世界中で子どもだけでなく、大人にも親しまれてきたハリー・ポッターシリーズ。その結末をぜひその目で見てもらいたい。」

『ハリー・ポッターと賢者の石』

「この作品は、驚くほど描写が細かく、時には生々しい描写で読み手の想像力をかきたてる。」「序盤のハリーの悲惨な生活環境から魔法界での生活ぶり、不思議な道具達など、挿し絵はほとんどないが、とてもイメージしやすく描かれていて、いろいろ楽しく想像できる。」「それから、伏線の上手さと、意外な展開にはうなされる。」この第1巻では「伏線だけがさりりと書かれているようなこともあり、次巻への期待が膨らんでいく。」また、「各キャラクターがとにかく濃くて、曲者が多いのも楽しさの要因の一つだと思う。」「これらの効果によって読み手を飽きさせず、400ページを超える量にもかかわらず一気に読み進めてしまう。」

(6)ライトノベル（3タイトル、2シリーズ）、ノベライズ（1タイトル、1シリーズ）

近年、推薦文でもこの両ジャンルをみかけるようになってきた。最初から文庫として刊行された作品は（＊刊行年月）と表示した。

小野不由美『凶南の翼』（＊96.2）、支倉凍砂『狼と香辛料』（＊06.2）、野村美月「文学少女」シリーズ（＊06.5-）、古戸マチコ『やおろず』（07.12）、有川浩「図書館戦争」シリーズ（06.3-07.11。第一作が『図書館戦争』）夏原武『小説クロサギ』（＊08.2）、竜騎士07「ひぐらしのなく頃に」シリーズ（07.8-）

小野不由美『凶南の翼』

「若干十二歳の主人公が様々な経験をして王になるまでを描いた活劇小説である。」彼女は「大人でも困難だと言われることに挑戦し、悩み苦しみながらもあき

らめない」。その姿は読者の共感を呼ぶ。この本はシリーズものの番外編で、「このシリーズは「同じ世界」という共通の枠組があるものの、作品ごとに主人公が異なり、自分の好きな物語を選ぶことができる」。本文には会話文が多く含まれ、テンポよく読み進めることができるので、本に苦手意識を持っている人でも読みやすい。「技大生が小説の面白さに気づき、小説を継続的に読むきっかけとなると考える」。

支倉凍砂『狼と香辛料』

「行商人ロレンスと賢狼の少女ホロの旅を綴った長編ファンタジー。」多くの伏線が張られ、物語の展開を予測する楽しみがある。伏線はすべて結末につながっており、「読んだ後に誰もが『なるほど、そういうことだったのか』と感嘆するほどまとまっている。」また、ロレンスとホロが会話の主導権をめぐって駆け引きのようなやりとりをする。最後はいつも、ロレンスがホロに丸め込まれてしまうが、それでもロレンスは、諦めずに何度も挑んでいる。この二人の会話に重要な伏線が張られていることもあり、非常に面白い。難しい表現はなく、情景をイメージしやすい。「文学に触れたことのない人にも読みやすく書かれている。」

野村美月「文学少女」シリーズ

事件を日本文学や西洋文学になぞらえて解決してゆく推理もので、文庫本で八冊発売されている。例えば、『“文学少女”と死にたがりの道化（ピエロ）』は冒頭の書き出しが「恥の多い生涯を送って来ました」。これは太宰治の「人間失格」からの引用である。本を読むのが好きな文芸部長のヒロインと、その部員である主人公が登場。ある日、その二人のもとに一通の手紙が届く。その内容が「人間失格」に酷似していた。実は、太宰治は「人間失格」執筆後に自殺した。そのことに気づいた二人は差出人を探そうとするが見つからない。手紙は二人のもとに届き続け、「人間失格」の内容は進み続ける。そして、「やっとの思いで見つけた差出人を知った時、二人は嘆きの物語を知る」。このように、物語が日本文学や西洋文学によって進行する。ほかにも、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」やガストン・ルルー

「オペラ座の怪人」など。「日本文学や西洋文学に興味を持って、読むことに抵抗がなくなるだろう。私はこの本を読み終えた後に物語中に登場する本を何冊か読んだ。」文章量がそれほど多くなく表紙や挿絵にアニメ調のイラストを多用しているのでマンガ感覚で読むことができる。また、2、3時間で読み終えるので、「気軽に読み始めることができる。」

古戸マチコ『やおろず』

ネット小説、つまりインターネット上で公開していた小説を大幅に加筆・修正し、出版した作品。神様を題材としたライトノベルで、いくつかの短編で構成されている。「日本は昔、どんなものにも神は存在すると考えられ、それらは『八百万（やおよろず）の神々』と呼ばれるほど親しまれていた。この本でも、家を守る家神から便所の神、忌み神などたくさんの神が登場している。」「ただし、それらの神々は主人公である女の子からみた姿であるといった設定である。」例えば、「忌み神なのにガテン系の大工おやじに見えたり、節分に出てくる鬼が疲れた中年のサラリーマンに見えるなど」。でも、神様の役割自体は、著者が調べ、解釈したことが書かれている。この本を読むと、「あまりなじみのない日本の神様を理解し」、「身近に感じることができるだろう。」途中でイラストもはさんであり、気軽に読むことができる。

有川浩「図書館戦争」シリーズ

図書館戦争、内乱、危機、革命の全四部からなる。この架空の日本では「メディア良化法」が施行され、検閲が認められている。例えば、「床屋」という言葉が差別用語として規制されるのだが、「床屋」という職業に誇りを持っている職人が「理髪店」などに言い換えられたことに怒りを表す。「その言葉を使わないことで差別がなくなるのか」、「結局、言葉を使う方の品性の問題では無いのか」、「実際の日本と比較しても、メディアにタブー視されている事柄があったりと、考えさせられることは多い。」また、不当な検閲から本を守ろうとする図書館隊と良化委員が検閲対象を巡って武装して戦う。一方、話し合いでの解決を支持する人もい

て、「違う立場での食い違いや葛藤なども良く描かれている。」でも、「やはりこの本はラブコメディ」で、決して重たくならない。「男女比も技大と似ている図書館隊」には、技大生として共感することも多い。「表現の自由や戦争について考える」だけでなく、「楽しく読むことができる。」

夏原武『小説クロサギ』

※漫画『クロサギ』がドラマ化・映画化され、さらに漫画原案者によって小説化（ノベライズ）された。

「詐欺師を騙す詐欺師クロサギこと黒崎が、贈答詐欺と倒産詐欺に挑む、戦慄の詐欺サスペンスである。」本書は、詐欺師が一般人に贈答詐欺を仕掛けるところから始まる。初対面なので相手を全く信用していない一般人が、詐欺師の巧みな言葉使いにより徐々に気を許し、次に会う約束をしてしまう。そして、何回か会ううちに完全に相手を信用してしまい、あっさり詐欺に引っかかってしまう。「この一般人の心理状態の変化がリアルであるため、読者は思わず自分と重ね合わせてしまう。」また、詐欺師が相手をだます方法や手順が細かく記述されているので、読者の知的好奇心を満たしてくれ、詐欺の知識も得られる。さらに、詐欺師がクロサギこと黒崎を詐欺にかけようとする場面では、相手をだまそうとする詐欺師の心理が深いところまで分かる。だから、この小説からは「読者が詐欺の被害に遭わないための知恵」も学べる。

竜騎士07「ひぐらしのなく頃に」シリーズ

人気PCゲーム（同人ゲーム）のノベル版で、アニメ化、映画化もされているミステリー。小さな山村の日常と、そこで起こる祟りにどう立ち向かっていくかを描いた長編で、現在も最新作が順次発売されている。シリーズ各編ごとに事件の結末が異なり、また各編を順番に読み進めていくことで徐々に事件の真相が見えてくることもある。例えば、「鬼隠し編」で出てきた「監督」という言葉がここでは殺されたダム工事現場の「監督」だと思ったのに、「崇殺し編」で実は少年野

球チームの「監督」だったと分かる。また、シリーズの問題編で伏線を見つけ、解答編でその伏線を回収してゆくという形をとっているため、次の巻も読みたくなる。「本を読むのが苦手な人でも読みやすい。」

(7)ノンフィクション・エッセイ

このジャンルの本も毎年たくさんあがってくるのだが、今回は推薦文が私の印象に残った4冊を紹介する。

ヘンリー・クーパー Jr. 『アポロ13号奇跡の生還』(94.6、*)、サイモン・シン 『フェルマーの最終定理』(00.1、*)、島田洋七 『佐賀のがばいばあちゃん』(01.7、*)、白石昌則 『生協の白石さん』(05.11)

ヘンリー・クーパー Jr. 『アポロ13号奇跡の生還』

アポロ13号は月の手前で船体にトラブルを起こし、一瞬で危機的な状況に陥ってしまった。当初予定されていた月面着陸は中止。地球に無事帰還するにはどうすればいいのか、次々と発生するトラブルに対し、3人の乗組員とNASAの管制官達は意見をぶつけ合う。管制官達が意見をまとめ、様々なシミュレーションを行って一番良い解決法をアポロ13号に伝えるという形で、彼らは次々と困難を乗り越えていった。このような努力により、アポロ13号は地球に無事帰還することができた。本書は、この帰還までの息詰まる過程を忠実に描き出している。トラブルの解決法を模索する乗組員や管制官達の会話が多く書かれていることによって、様々な意見からどのように解決法が導かれていったのかもわかる。「危機的状況の解決法の見本として読んでみると、とても参考になると思う。」

サイモン・シン 『フェルマーの最終定理』

証明するのに約360年もの年月を要したフェルマーの最終定理がどのように証明されていったのかを描いたノンフィクション。ピタゴラスの定理に始まりワイルズに証明されるまでの流れを詳細に記している。その内容は数学者同士の情報の

やりとりや研究成果など。これは、「数学にも歴史が存在し、様々な数学者の人間模様が存在する中で公式などが証明されてきたということを示している。そのような歴史や人間模様を知ること、数学の考え方がより明確に理解できるようになる。」また、数学者と物理学者の考え方の違いを知ることができる。例えば、ある規則に従ってチェス盤のマスを全て埋め尽くすことができるかどうかを証明する問題。物理学者は実験的に全通りの方法を試し、その結果を成果とする。これに対し、数学者は論理的に証明しようとする。さらに、この本にはいくつかの証明問題が載っていて、数学の基本的な公式を学ぶことができる。「数学の勉強にも役立つ。」

島田洋七『佐賀のがばいばあちゃん』

昭和33年、広島から佐賀の田舎に預けられた八歳の昭広と、厳しい戦後を七人の子供を抱えて生き抜いた祖母との貧乏生活が語られるエッセイ。がばいばあちゃんは、家の裏にある川が「我が家のスーパーマーケットばい」と胸を張る。川上の市場から捨てられて流れてくる形の悪い野菜が川に渡してある棒に引っかかる、それを拾って食べているからである。「形が悪くても味や品質には無関係」なのに、「現代でもスーパーに見た目の悪い商品が並んでいることはない。」「がばいばあちゃんの節約術」は「現代人の日常生活を見直すきっかけをくれる」。また、がばいばあちゃんを始め、家族や近所の人々、昭広の学校の先生や友達などたくさんの登場人物たちが、皆、人を思いやる気持ちを持っていて、「温かな気持ちになることができる。」この本は、がばいばあちゃんが本当の“幸せ”について教えてくれる、「笑いあり、涙ありの感動作である。」

白石昌則『生協の白石さん』 ※ジャンル分けが難しい。ここで紹介する。

東京農工大学の生協職員である「白石さん」がひとことカードに寄せられた質問・要望に返答したものを集めた本。例えば、「単位がほしいです」には、「そうですね、単位、ほしいですか。私は、単車がほしいです。お互い、頑張りましょう!」。「普通であれば返答などされないと思えるものに、少しのユーモアを交ぜ

て真面目に返答してある」。「こんなやりとりに私は微笑ましくもなり、どこことなくホットしたのを感じた。」「質問を寄せているのは大学生なので、共感できるところも多くあった。」しかし、ユーモアだけでなく、心に響くものもある。「もういやだ死にたい」には、「生協という字は『生きる』と『協力する』(中略)生き続けて、見返しましょう!」とある。「ふざけているような内容の中にも、こうした真摯なメッセージが込められている」。この本は「一ページに質問と返答があるだけで」、「どこのページから読んでも大丈夫」。読みやすい本である。

※ では最後に、本にはこんな読み方もある。

エミリー・ブロンテ『嵐が丘』

「この本は主人公であるヒースクリフの復讐劇である。」

「一人の男が嵐が丘にある屋敷を訪れ、そこで長年勤める家政婦のエリーから館の主人のヒースクリフにまつわる話を聞く」。この館の前の主人が孤児であったヒースクリフを家に連れて帰った。ヒースクリフは主人とその娘キャシーからは良くされるが、その他の家族からはひどい虐待を受けていた。キャシーとヒースクリフは成長し、愛し合うようになる。だが、キャシーは他の裕福な男と結婚してしまい、ヒースクリフは家を出て行く。時が経ち、ヒースクリフは自分を傷つけたキャシーや家族に復讐するために帰ってくる。しかし、その後すぐにキャシーは死んでしまう。このことが原因でヒースクリフは精神が壊れてしまうが、ヒースクリフの復讐は終わらず、物語は続いていく。

「私はこの本を読んでいる時、どの登場人物にも感情移入できなかった。」「しかし、この本は読み終わった後、時間が経つごとにゆっくりと面白くなっていった。」「この本を読む前、私は自分が本の中に入り物語を登場人物たちと楽しむといった本の読み方をしていた。」だが、「自分には理解できない感情をわかろうとはせず、」「外からこの物語を眺め、自分の今までの経験や思考と比較することで面白さが出てきた」のである。

「この本に私は本の別の見方を教えてもらった。」

以上で紹介を終わる。

さて、「技大生がすすめる一冊の本」、数えてみるとここで紹介したのは全部で43タイトル・7シリーズ。これらのうちどの一冊でもいいから、興味を惹かれたものがあったら皆さんは手に取って見たらよい。もしかしたら、それが、そのあとあなたの何かにつながっていくかもしれない。

最後に、学生の推薦文の摘記・要約は、表記や文章を整え、その主旨に合うように表現を変え、あるいは補い、主旨を損なわない範囲で再構成している。また、複数名の推薦のあった作品については、それらの推薦文の一つにまとめた。

この文章の内容には正確を期したが、調べが行き届かなかった所があるかもしれない。文責はすべて私（若林）にある。

掲載図書紹介

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『聖女の救済』 東野圭吾著 文藝春秋 2008年 1,699円

『流星の絆』 東野圭吾著 講談社 2008年 1,785円

『ある閉ざされた雪の山荘で』 東野圭吾著 講談社文庫 1996年 559円

『風が強く吹いている』 三浦しをん著 新潮社 2006年 1,890円

『赤朽葉家の伝説』 桜庭一樹著 東京創元社 2006年 1,785円

『ゴールデンスランバー』 伊坂幸太郎著 新潮社 2007年 1,680円

『グラスホッパー』 伊坂幸太郎著 角川文庫 2007年 619円

『新世界より』 貴志祐介著 講談社 2008年 3,990円

『光の帝国』 恩田陸著 集英社文庫 2000年 519円

『いま、会いにゆきます』 市川拓司著 小学館文庫 2007年 599円

『電車男』 中野独人著 新潮文庫 2007年 579円

『カレーライフ』 竹内真著 集英社文庫 2005年 1,200円

『博士の愛した数式』小川洋子著 新潮文庫 2005年 459円
『半島を出よ』村上龍著 幻冬舎文庫 2007年 1,560円
『大地の子』全4巻 山崎豊子著 文春文庫 1994-1995年 2,440円
『三たびの海峡』帚木蓬生著 新潮文庫 1995年 660円
『光る壁画』吉村昭著 新潮文庫 1984年 499円
『コーヒー党奇談』阿刀田高著 講談社文庫 2004年 599円
『夜のかくれんぼ』星新一著 新潮文庫 1985年 499円
『スカイ・クロラ』森博嗣著 中公文庫 2004年 619円
『銀河英雄伝説』全10巻 田中芳樹著 創元SF文庫 2007-2008年 8,337円
『双頭の悪魔』有栖川有栖著 創元推理文庫 1999年 1,092円
『幽霊人命救助隊』高野和明著 文春文庫 2007年 720円
『神様のパズル』機本伸司著 ハルキ文庫 2006年 714円
『千里眼』シリーズ 松岡圭祐著 角川文庫 2007年-
『厭魅（まじもの）の如き憑くもの』三津田信三著 原書房 2006年 1,995円
『QED～ventus～御霊将門』高田崇史著 講談社 2006年 882円
『ダ・ヴィンチ・コード』上・中・下巻 ダン・ブラウン著（越前敏弥） 角川
文庫 2006年 1,737円
『新訳シャーロック・ホームズ全集』全9巻 アーサー・コナン・ドイル著（日
暮雅通） 光文社文庫 2006-2008年 6,356円
『お伽草子・新釈諸国断』太宰治著 岩波文庫 2004年 735円
『墮落論』坂口安吾著 岩波文庫 2008年 735円
『一握の砂』石川啄木著 朝日文庫 2008年 546円
『嵐が丘』上・下巻 エミリー・ブロンテ著（河島弘美） 岩波文庫 2004年
1,281円
『注文の多い料理店』宮沢賢治著 集英社文庫 1997年 439円
『星の王子さま』サン・テグジュペリ著（倉橋由美子） 宝島社文庫 2006年
499円
『黒い手と金の心』ファビアーニ著（杉浦明平） 岩波少年文庫復刻版 1992年

品切・絶版

『モモ』 ミヒヤエル・エンデ著（大島かおり） 岩波少年文庫 2005年 840円

『ハリー・ポッターと死の秘宝』 上・下巻 J・K・ローリング著（松岡佑子）
静山社 2008年 3,990円

『ハリー・ポッターと賢者の石（携帯版）』 J・K・ローリング著（松岡佑子）
静山社 2003年 997円

『図南の翼』 小野不由美著 講談社文庫 2001年 729円

「狼と香辛料」シリーズ 支倉凍砂著 電撃文庫 2006年-

「文学少女」シリーズ 野村美月 ファミ通文庫 2006年-

『やおろず』 古戸マチコ著 イースト・プレス 2007年 1,050円

「図書館戦争」シリーズ 有川浩著 アスキー・メディアワークス 2006年-
6,720円

『小説クロサギ』 夏原武著 小学館文庫 2008年 479円

「ひぐらしのなく頃に」シリーズ 竜騎士07著 講談社Box 2007年-

『アポロ13号奇跡の生還』 ヘンリー・クーパー Jr. 著（立花隆） 新潮文庫
1998年 品切・絶版

『フェルマーの最終定理』 サイモン・シン著（青木薫） 新潮文庫 2006年 820円

『佐賀のがばいばあちゃん』 島田洋七著 徳間文庫 2004年 539円

『生協の白石さん』 白石昌則著 講談社 2005年 1,000円

ブックガイド目次へ